

2013 年度 国際文化情報学会発表要旨／論文 部門（学部生）

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

44

(終了ページ / End Page)

129

(発行年 / Year)

2014-04

2013 年度 国際文化情報学会発表要旨

論文部門（学部生）

細井咲希（松本ゼミ）

●発表タイトル

援助はえこひいき？—孤児支援の構造分析—

本研究の目的は、カンボジアの孤児支援の構造分析を通して、援助のえこひいきについて考察することである。

カンボジアの18歳未満の孤児は2009年時点で63万人にも及ぶ。これは18歳未満の11人に1人が孤児であるという計算になり、内戦終結から20年以上たった今も、深刻な状況であることが分かる。

この状況を解決しようと、多くの日本のNGOが活動している。その中でも複数の団体が「孤児院」支援を行なっている。しかし、孤児院にいる孤児は全体の約1.9%にしかならず、カンボジアの孤児のほんの一部でしかない。孤児支援というのであれば、全ての孤児に平等に支援をする必要があるのではないか。この疑問こそ、筆者が本研究で援助のえこひいきについて考える理由である。

本研究を通じて明らかにしたい問いは、「カンボジアには60万人を超える孤児がいるにもかかわらず、なぜ孤児支援は『孤児院』支援に集中してしまうのか」である。この問いに対する仮説は次の通りである。

第1に、孤児院は多数の孤児が1ヶ所で生活しているため、支援の継続性や効率性を考えたとき、ドナーが支援をしやすいからではないだろうか。カンボジアの孤児全体をサポートするというのは容易ではないため、ドナーは対象先を孤児院に絞って支援を行うことで「孤児」支援という目的を達成することができる。

第2に、大多数の孤児は農村にいて、地域社会や親戚が面倒をみってくれるのに対して、都市の孤児は人のつながりが希薄で、行政以外の助けを得られない。そのため都市は孤児の比率に対して孤児院が多く、そうした都市の孤児院への支援が集中しているのではないだろうか。稲田十一のアンケート調査によれば、カンボジアの農村では、親類以外に近隣の人々や地域社会への依存度が高い。それに比べて都市は、それらに対する依存度は低いが、行政に対しては高い。この結果をカンボジアの孤児に当てはめると、カンボジアの子どもが孤児になった場合、農村では近隣の人々に頼り、都市では行政に助けを求めると考えられる。

これらの仮説を検証するために、既存研究に加え、実際にカンボジアの孤児支

援を行なっている日本の NGO 4 団体に聞き取り調査を行った。その調査結果及び分析結果は以下の通りである。

まず、第 1 の仮説は支持された。インタビューの結果、孤児院を支援するようになった理由として多く挙げられたのが「縁」であった。つまり、意図せずに孤児院支援に至ったのである。聞き取りを行った団体のほとんどは自ら孤児院を設立したわけではなく、元々ある孤児院のサポートをしている。これは一から始めるよりも効率が良く、支援のしやすさを優先したとも考えられる。さらに、孤児院訪問ツアーは全ての団体で行われていたが、参加するには団体のサポーター会員になり、年会費を納めるといった規約を設けている団体もあった。このことから、このようなツアーは孤児の現状を伝えられる機会である一方で、孤児院という一定の場所があることで支援金が集めやすい可能性は否定できない。このように、仮説で考えていた支援の効率性に加え、寄付金を集めるなどのドナーの事情が優先されているために孤児院に支援が集中していると考えられる。

次に、第 2 の仮説である。聞き取り調査で、2012 年時点でカンボジアの孤児院の数は 265 で、その内訳は都市に 25、農村に 240 あることが明らかとなった。筆者の仮説で考えると、都市では行政に頼るために孤児院の数が多く、逆に農村は近隣の人々が面倒をみてくれるため、数は少なくても良いはずである。しかし、農村では地域の人々が孤児を世話するのではなく、援助の受けられる孤児院に連れて行くケースも多いことが分かった。この結果から、支援が孤児院に集中するには、地域や人のつながりの強さは関係ないということ、また、地域全体で孤児の面倒をみると考えられていた農村では、孤児院の存在によりその体系が変わったということの 2 点が考えられる。これらの点から、第 2 の仮説は棄却されたといえる。

本研究の最初に挙げた目的に立ち返ると、カンボジアの孤児支援は孤児院に集中しており、援助にはえこひいきの側面があることは否定できない。孤児院支援は、一部の孤児を支え、農村では孤児院の存在が人のつながりの希薄化を補っている一方で、孤児院にいる孤児とそれ以外の孤児の支援の差を拡大するきっかけにもなる。背景には、支援時の NGO 同士の連携がないことや、資金集めに苦労しているドナーの現状も垣間見られる。より平等な支援の実現には、こうした NGO 側の事情を踏まえた更なる議論が必要である。

桑原恭平（松本ゼミ）

●発表タイトル

なぜ援助から卒業できない国・地域があるのか

国際組織の開発援助委員会（DAC）によれば、ODA とは、開発途上国の経済あるいは福祉の向上を目的として政府や政府機関が供与する贈与や借款で、市場よりも良い条件で提供される資金のことである（樋口 1986, 宮崎 2010）。半世紀以上にわたって 4 兆ドル近い ODA が世界中の途上国に供与され、途上国の中には ODA から「卒業」した国もある。

「卒業」の基準は、一人当たり国民総所得（GNI）が 9,205 米ドル（2001 年）とされており、「卒業」には経済成長が不可欠である。2003 年時点で「卒業」国が 38 に対して、「卒業」できていない途上国は 156 の国と地域にのぼる（DAC 援助受け取り国・地域リスト）。なぜ「卒業」できる国とできない国が生まれるか、どのような要因が「卒業」を阻害しているのだろうか。本論文では「なぜ援助から卒業できない国・地域があるのか」という問いについて、開発援助の視点から書かれた日本語の既存文献をレビューする。そしてどのような研究が行われているのかを整理し、これまでの開発援助の分析が見落とししていた点を明らかにする。

その際、以下に定義した政治・文化・社会の 3 つの要因に着目する。

1、政治的要因

援助国の独裁や不公正などが横行し、被援助国に多大な被害を与える利害関係や問題（2001 年 DAC 貧困ガイドライン政治的能力）

2、文化的要因

生きていくなかで何が重要で価値があるかという共通認識における問題（間亭谷 1972）

3、社会的要因

組織や社会層、階級といった集団におきる問題

この 3 つに焦点をあてるのは、政治的要因については、良い統治に基づく自助努力支援を通じて、国の発展の基礎をつくっていくことが日本の ODA の最も重要な点であるから（政府開発援助大綱）、社会・文化的要因については、近年の日本の ODA では「人間の安全保障」が重視されており、人間中心の開発にとって配慮すべき点だからである（角田 2001）。

分析方法は法政大学図書館の OPAC の詳細検索を使い「開発援助」というタイトルで検索した 111 冊の文献を政治・文化・社会的要因について書かれているかどうかで分類した。その結果 18 冊が関係しており、それらを分析の対象とした。

これらの文献から、援助の効果を阻害する要因として次の論点を導きだした。

政治的要因：援助に対する矛盾、自助努力の欠如、負担として扱われる住民

文化的要因：人間の尊厳の欠如、現在の貧困に対する考え

社会的要因：地域的不平等

筆者が注目したのは援助に対する矛盾、人間の尊厳の欠如、地域的不平等、この3つである。援助に対する矛盾とは、援助において本当に恩恵を受けるべきなのは誰なのかということである。本来恩恵を受けるべき途上国の国民には援助はいきわたらず、逆に援助国側が援助による利益を得ている。人間の尊厳の欠如とは、教育や保健といった人間が生きていくために必要な最低限度の状態すら失われているということである。これにより、読み書きすらできず就業機会に恵まれないばかりか一度の病気や怪我から復帰するのが難しく、貧困の悪循環に陥ってしまう。地域的不平等とは、都市に援助が集中することで様々な産業が発達し消費の選択が増え経済成長につながるが、そのぶん都市と地方の格差が広がっていくということである。こうした不平等は勝者と敗者を生み出してしまうため、敗者を救うセイフティネットを作らなければならない。

この3点に着目した理由は、それぞれが各要因で挙げた他の要素を含んでいるからだ。援助に対する矛盾は自助努力の欠如と負担として扱われる住民にも起きている要因でもある。現在の貧困に対する考えは物質的不足だけでなく、意思決定に参加する機会という人間の尊厳の欠如も含んでいる。地域的不平等は他に要素がないのでそのまま選択した。

これまでの援助に対する分析は援助主体（援助をする側）か開発主体（援助をされる側）かといった区別がされずに論じられてきたため、これからは明確に2つに区別したうえでの研究が必要であるとされている（西川ら2006）。しかし、本論文をとおして援助か開発、どちらの主体かという2つの区別だけではなく、双方の主体が関係している3つの区別が必要なのではないかと考える。なぜなら、文化・社会的要因はどちらも被援助国内で起きている要因のため開発主体の問題と言えるが、政治的要因は利害関係という双方の主体がかかわっている問題のため、どちらかに区別することができないからだ。今後の開発援助の分析は、今まで区別されていなかった開発主体と援助主体の2つの区別に加えて、政治的要因のような双方の主体という3つめの区別が必要である。（1856字）

参考文献

樋口貞夫『政府開発援助』、東京：勁草書房、1986年

宮崎卓『国際経済協力の制度分析』、東京：有斐閣、2010年

DAC「受け取り国地域リスト」

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/kuni/04_databook/ex_t4.html
2013年11月2日)

DAC 貧困ガイドライン

(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/hinkon/>

[pdfs/jk05_01_02.pdf#search='%E6%94%BF%E6%B2%BB%E7%9A%84%E8%A6%81%E5%9B%A0+%E5%A4%96%E5%8B%99%E7%9C%81](https://repository.tufts.ac.jp/bitstream/10108/23739/1/jaas005012.pdf#search='%E6%94%BF%E6%B2%BB%E7%9A%84%E8%A6%81%E5%9B%A0+%E5%A4%96%E5%8B%99%E7%9C%81) 2013年10月14日)
間亭谷栄「経済開発における社会文化的要因の検討」

(<http://repository.tufts.ac.jp/bitstream/10108/23739/1/jaas005012.pdf#search='%E7%B5%8C%E6%B8%88%E9%96%8B%E7%99%BA%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E6%96%87%E5%8C%96%E7%9A%84%E8%A6%81%E5%9B%A0%E3%81%AE%E6%A4%9C%E8%A8%8E'> 2013年10月14日)

外務省「政府開発援助大綱」

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/seisaku/taikou/taiko_030829.html
2013年11月11日)

角田宇子『開発の社会文化的側面』、京都：世界思想社、2001年

西川潤 高橋基樹 山下影一『国際開発とグローバリゼーション』、東京：日本評論社、
2006年

政治・社会・文化的要因の文献 18冊

山田泉絵（熊田ゼミ）

●発表タイトル

内在的解釈によるダリ絵画の分析

一気持ち悪さが溢れる中で現実へ訴えるメッセージとは—

1 内在的解釈とは何か

最近では、美術館だけでなく、街中や学校、駅等におけるさまざまな場所と場面で美術作品にふれあう機会は多くなったが、その度に私たちは目にする作品から感銘を受ける。その際に、どのような人がどのような過程で制作したか、と作者の意図をくみ取る鑑賞者は多い。しかし、鑑賞とは作者の制作意図を把握するのではなく、その作品そのものに抱く印象、及び解釈は鑑賞者側に委ねられているのである。グローバル化が発達し、情報が飛び交う現在の社会において、作品の情報を全く取り入れず作品そのものを鑑賞することは困難である。だが、作品鑑賞において重要なのは、鑑賞者である自分自身、すなわち個人の解釈である。

蓮實重彦『表層批評宣言』から学んだことだが、作品の成立背景等を一切捨象した作品自体を表層と呼ぶことにすると、個人の解釈によって表層のみを鑑賞することを内在的批評、対照に作者の意図や成立背景や過程を交えて鑑賞することを外在的批評とし、この論文では私は前者を方法論とする。

今回論文で扱う作品は、私が未だかつてない衝撃を受けた画家であるサルバドー

ル・ダリの「茹でた隠元豆のあるやわらかい構造」「器官と手」「大自慰者」とし、内在的批評によって各々の解釈をする。それを通して、内在的作品解釈によって鑑賞者が直接的に作品を受容することの大きな意義と、その喜びを明らかにしていきたい。

2 作品解釈

(1) 「茹でた隠元豆のあるやわらかい構造、内乱の予感」

この絵画を初めて鑑賞した者は、気味の悪さあるいは恐ろしさを感じるだろう。積乱雲で覆われた空を背景に、画面一体を占めて謎の巨大生物的物体が描かれている。人間の手や足、頭部といった身体的組織を持つが、その骨格は生物上存在しえない、実に奇妙な風貌である。更にそれぞれの身体的組織は、怪物の如く岩肌のような二本の右手、腐敗した死体のような左足、清らかな女性の乳房、引き締まった男性の尻、白骨化した右足、と統一されていない。第一印象として気味の悪さを抱く起因はこれらの非統一的描写によるものだと思われる。

しかし、異なる身体的末端のもつ象徴の対比こそが、この作品を解釈するメソッドとして重要な手懸りなのである。

(2) 「器具と手」

背景である大気の色と、表題である、中心に描かれた白い器具とその頂部で腫れ上がった真っ赤な手の絶妙な配色が印象的である。明らかに生き物でない器具には血管が這っており、一方手に流れる血管は青白く、生物的事実が歪んでいる。

処々に描きこまれた女性や首を失ったロバ等といった物体はいずれも生命感に欠け、画面上の世界は非現実的で、無機質にとらえられる。これらに加え、荒々しく旋風が舞う大気の中で器具が華奢な脚でそびえ立っている描写から、鑑賞者は「生」「不安定」というキーワードを元にこの絵画を解釈せざるをえないだろう。

(3) 「大自慰者」

ダリの代表的作品の内の一つであるこの絵画は、他の作品の解釈に対し、比較的主旨がとらえやすいだろう。その理由は、画面右上にある男性の股間を嗅いでいる女性の描写による。この明瞭な性的表現から、本作品が性欲すなわち人間の欲望を表現していることは一目瞭然だ。

だが、この絵画全体を鑑賞した時、鑑賞者は一見関連性のない表現描写を目にするのであり、最初に注目した性的描写が何を伝えたいのかという解釈は困難であるかもしれない。画面一杯に描かれた人間の横顔のような形をした物体、その鼻筋に止まる巨大バツタ、その腹には無数の蟻が蠢いている。長い舌を突き出す獅子の頭部や、バツタに背を向けながら、接吻をしているであろう抱擁し合う二人の小さな人間。しかし、支離滅裂なこれらの一つひとつの描写に、明示性に差はあれども、鑑賞者は性的心性を感じ取るのであり、これを読み解くことこそが肝要である。

蓮實重彦『表層批評宣言』筑摩書房、1979年

ロベール・デシャルヌ, ジル・ネレ[編]『タリ全画集(25周年)』Kazuhiro Akase 訳、
タッシェン・ジャパン、2009年

原理沙(堀上ゼミ)

●発表タイトル

「大学生が作る性教育フリーペーパー ～2013年度学生チャレンジサポート制度採択～」

2013年度チャレンジサポート制度採択企画である、「大学生が作る性教育フリーペーパー」の活動概要、活動動機、活動によって期待できる効果について発表する。

この企画の目的は、正しい性の知識の啓蒙のために性教育フリーペーパーを紙媒体で発行すると同時に、インターネット上でも配布することである。対象の中心は中学生・高校生とした。そこで、作成側が一方的に内容を決めて作成に取り掛かるよりも、「読み手が知りたい、または必要としている情報がどのようなものであるのか」という読者のニーズに沿ったフリーペーパーの内容決めを行うこととなった。よって、1500人の中高生にアンケートを実施してから、フリーペーパーに掲載する細かなコンテンツを決定することにした。また、取り扱う情報には医学的な専門的な知識を要するため、現役の医師である人間環境学部の宮川路子教授による監修を経て発行する予定である。

そもそも、この活動を発案することに至った経緯は自分の使命を全うすることと、「日本の性に対する意識を変えたい」という思いから来ている。はじめに、物心ついた頃から性について強い興味関心を持っていた私は高校生の時に産婦人科医の主催する「ピア・エデュケーター養成講座」に1年間参加したのち、ピア・エデュケーターの資格を得た。ピア・エデュケーターとは同世代にHIV/エイズの基礎知識や性感染症の予防方法といった正しい性の知識広める若者のことである。自信が学んだ知識が少しでも広まるよう、身近な家族や友人に機会があれば話をしたり、相談に乗ったりしていた。こうした足元の取り組みは知識の頒布範囲が小さくなってしまうため、より幅広い層の人に伝えるために、フリーペーパーの発行を考えた。

次に、正しい性の知識の頒布という視点から見た今の日本の現状は悲惨である。多くの家庭や学校では、実用的で深い性教育をすることができない。性の話題が忌避される傾向を持つ日本の慣習の影響からか、もし性に関する悩みや疑問を持ったとしても、それを表に出す人は多くない。むしろ、そんな時にどこで、誰に相談すればいいのかわからない人は少なくないのではないだろうか。こうしたこと

が背景にあることが起因しているのかは定かではないが、日本では一年で約 1000 人が HIV に感染している。2012 年度末の時点で、HIV 感染者と AIDS 患者数は 2 万人に達した。薬を飲めば治すことのできるインフルエンザが流行するだけで世間を賑わすこともあるのにも関わらず、現代の医学では治すことができないエイズを発症している人が存在しているという事実が世間を騒がすことが殆ど無いということは、その事実が知れ渡っていないということが原因だと考える。ここでは、性感染症の一例としてエイズを挙げたが、エイズ以外の性感染症にも危険が多くある。治せないエイズ、癌の原因になることがあるヒトパピローマウイルスや不妊症の原因になる可能性までも性感染症は持っている。こうした人生を左右しかねない影響力を持つ病気から身を守るために、正しい性の知識の啓蒙が必要であると強く主張したい。「性のことについて知りたいと思うことが恥ずかしい」ではなく、むしろ「正しい性の知識を知らないことが恥ずかしい」と思う人が増えれば、きっと良い変化が表れるはずだ。そのためには同世代の若者から意識改革を進めたい。そこで、気軽に読んでもらえる媒体であるフリーペーパーを利用して、正しい性の知識の拡大を狙った。

性教育フリーペーパーを発行することによって期待できる効果は、不特定多数の読者に対する啓蒙活動によって、正しい性の知識を拡散させることができることである。知識の拡散によって、性感染症の予防啓発が促されることと、正しい性の知識レベルの底上げが期待できる。また、性に関する悩みの相談窓口もフリーペーパーに掲載することで、悩みを言えずに不安な日々を送る人に役立つことも期待される。

柴田大樹、久保穂波、呉愛慶、小原育実、佐藤萌衣、永井有日、峯岸郁未（曾ゼミ）

●発表タイトル

大学から多文化共生を考える～ムスリム学生の一日を追って～

2012 年末現在、203 万人もの外国人が日本で暮らしている。出入国管理及び難民認定法（入管法）が改正され、1990 年から施行されると、外国人登録者および定住者は増加してきた。そして、私たちが外国人と接する機会も増えており、多文化共生社会をいかに実現していくかが議論されるようになっている。多文化共生とは、「国籍や民族の異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」である。

ところが、多文化共生とは程遠いイスラームに関係する「事件」が 2011 年金沢で起こった。金沢市内に建設予定のモスク（イスラームの礼拝施設）に住民から反対の声が相次いだのである。反対の声を上げた住民の多くが「イスラームには

なじみがなく不安」とネガティブな発言をしている。つまりイスラームについて「知らない」から不安となり、反対運動が起こったのである。金沢市内のモスク建設反対運動を見る限り、日本社会は多文化共生社会とは程遠いことがわかる。

日本人にとってイスラームは馴染みの薄い宗教である。19世紀半ばに日本とオスマン帝国が交流を始めた。これを契機に日本においてイスラームが知られるようになった。しかし、イスラームが日本に到来したのはほんの100年余り前である。6世紀に伝来した仏教や、16世紀に伝来したキリスト教と比べると大きな差がある。イスラームと日本との歴史が浅いことが、日本人がイスラームを「知らない」ことに繋がっているのかもしれない。

また近年のメディアの報道は日本人にイスラームに対するネガティブなイメージを植え付けている。私たちは法政などの大学生を対象にイスラームについてのアンケート調査を実施した。その結果、ムスリム（イスラーム教徒）について「テロリストのイメージがある」などのネガティブなイメージを持っている学生の大半が、メディアによる報道でネガティブなイメージが植え付けられていたことがわかった。また、「イスラームは身近な宗教ではないので馴染みがなく、イスラームについての知識がない」という「知らない」をことからネガティブなイメージを持つ学生もいた。

「ネガティブなイメージ」を日本人が持ち続けてしまえば、金沢のモスク建設反対運動のような多文化共生に逆行する第二、第三の「事件」が起こらないとも限らない。そうなれば非常に憂慮すべき事態である。

そして、このままイスラームを「知らない」ままでは私たち学生にとっても不幸なこととなる。現在世界には世界人口の4分の1にあたる16億人ものムスリムがおり、日本には10万人のムスリムがいると言われている。日系企業のイスラーム圏の国々への進出や訪日ムスリムに対するビジネスが活況を呈していることに加え、イスラーム国であるインドネシアとマレーシアに対する数次ビザの発給、観光ビザの要件緩和により、訪日ムスリムが増えている。つまり、今後私たち学生もムスリムと接する機会がますます多くなることが予想される。ムスリムと非ムスリムとが共生する社会の実現のために、そして私たち自身の将来のためにも、私たちはイスラームを知る必要があるのではないだろうか。

しかし、声高に多文化共生を唱えるのではなく、まずは自分たちの周囲から考えていきたい。実は日本の各大学にはムスリム学生が相当数籍しており、法政大学にもムスリム学生がいる。私たちはまず足元の法政大学からイスラームのことを知り、ムスリムとの共生について考えていきたい。

私たちは2人のムスリム学生の1日を追った。2人はそれぞれ別の大学に通っている。1人はムスリムに対する配慮が見られる大学に通っており、もう1人は法政大学に通っている。ムスリムに対する配慮がなされていない法政大学に通う

ムスリム学生は大学生活においてどのような不便を感じているのか紹介したい。他大学の取り組みと比較しながら、どのようにすれば法政大学のムスリム学生が快適な大学生活を営むことができ、法政大学が国際水準にかなう大学になれるのかを考えたい。

長野裕太（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

低迷し続ける中台関係—文化的側面に着目して—

課題および構成

台湾海峡を挟む兩岸、つまり中国大陆と台湾との間には緊迫した関係が長く続いてきた。国共内戦に敗れた蒋介石の率いる国民党は1949年に台湾に逃れた後も「大陸反攻」というスローガンを掲げ、もう一方である北京の中国共産党は「台湾解放」を唱えた。1958年には、台湾が支配する金門島と大陸との間での砲撃戦、いわゆる台湾海峡危機が起こったこともあった。1971年に中華人民共和国が中国を代表する国として国連に加盟したのに伴って、台湾は脱却せざるを得ず、台湾の国際的地位は低下した。中台間には「一つの中国」を認めるか否かの根本的対立が存在する。1979年には、中国側が「三通政策」、すなわち中台間の「通郵（郵便による直接通信）」「通商」「通航（直行便の運行）」を呼びかけたのに対して台湾側は「三不政策」、つまり「不接触、不談判、不妥協（接触せず、交渉せず、妥協せず）」の方針をとった。しかしながら、台湾が38年間も続いた戒厳令を1987年7月に解除し同年11月には台湾住民の大陸への親族訪問を認め、中台関係雪解けムードが広がり、90年代以降は緊張緩和が急速に進んだ。こうした緊張緩和の根底は、中国が進めてきた改革・解放政策と、台湾側の社会、経済発展による要因だけではない。本論文の課題は台湾人のアイデンティティの変遷に着目し、中台関係における低迷の原因を文化的観点から明らかにすることである。

アイデンティティの変遷

台湾は中国とは別の文化アイデンティティを形成してきた。台湾が中華文化を受け継いでいることは事実であるが、日本の植民地であった歴史もあり、日本文化の影響も根深く残っている。さらに原住民の文化もあり、台湾は儒教、日本、及び原住民などの多様な文化が共存している多文化社会である。人類学から見れば、近代清朝に中国大陆から台湾に移民してきた漢民族が原住民と混血し、現在の台湾の人口の大部分を占める漢民族となっている。国民党は1950年代頃から1980年代頃まで一時期映画や歌謡曲などを通じて大衆文化の領域においては支配的地位まで獲得し、台湾社会に浸透していた。「反共復国」など唱える当時の国民

党による中国化政策と前述した大衆文化の浸透により、1990年初期まで「中国人」アイデンティティは維持されたのである。台湾行政院大陸委員会が、1993年1月に中華電信所に委託した調査では、48.5%は自らのことを「中国人である」と答え、32.7%は「台湾人で中国人である」と回答し、「中国人」アイデンティティの高さを示している。それに対して「台湾人である」と回答したのは僅か16.7%に留まった。（「行政委員大陸委員会」：1998）しかしながら、1987年の「戒厳令」撤廃以降、台湾社会において北京語に対抗した台湾語（閩南語）を主に使用するとした「母語運動」が起き、国民党政権が固持していた台湾語差別政策をついに、1993年をもって放棄せざるを得なくなった。それに伴って台湾ポップスが流行し、「中国人」アイデンティティを謳歌する映画、流行曲といった分野の「中国風大衆文化」の作品は急速で全面的な衰退を余儀なくされた。このようにして「台湾人」アイデンティティが徐々に定着していき、1999年8月の台湾行政院大陸委員会の調査結果では自らのことを「中国人」と回答する人は13.1%まで低下した。反対に「台湾人である」と回答した人は44.8%まで上昇し、そして39.9%は「台湾人で中国人である」となった。（「行政院大陸委員会」：1998）。

結論

この調査で、中台関係が低迷している原因は政治的要因だけではないことが分かった。彼等の大部分は「台湾人」としてのアイデンティティを持ち、自分たちの言葉を持って生きている。すなわち、文化的な側面が今の兩岸関係の発展を大きく阻んでいると言える。

〔参考論文〕

- 1 林泉忠『戦後台湾における二つの文化の構築—「新中国文化」から「新台湾文化」への転轍の政治的文脈—』
- 2 楊井人文『兩岸関係の平和的解決と日本の立場』
- 3 平和研レポート主任研究員 星山隆『兩岸関係「現状維持」の構図—台湾海峡で軍事衝突はあるのか—』

〔日本語文献〕

- 1 岡田充『中国と台湾 対立と共存の兩岸関係』講談社 2003年
- 2 愛知大学国際問題研究所『中台関係の現実と展望』東方書店 2004年
- 3 李登輝『台湾の主張』PHP研究所 1999年
- 4 蔡焜燦『台湾人と日本精神』小学館 2001年

〔中国語文献〕

- 1 包宗和、吳玉山主編『争辯中的兩岸關係理論』五南圖書出版股份有限公司 1999年
- 2 邵宗海『新形勢下的兩岸政治關係』五南圖書出版股份有限公司 2011年

〔WEB サイト〕

1 WEDGE Infinity

<http://wedge.ismedia.jp/articles/-/3252?page=1>

菊池岳（島田ゼミ）

●発表タイトル

現代アイドル論～何故、モーニング娘。の人气が再燃しているのか？～

現在、日本には様々なアイドルが存在しているが、私は「モーニング娘。」（以下モー娘。）というグループに注目してみたい。最近、モー娘。はオリコン週間ランキングに数年ぶりに3作連続で1位を獲得し、人气が上昇している。これは何故なのか、3つの章に分けて考察する。

第一章では今までのアイドルの歴史を大まかにみていきたい。

1970年代のアイドル歌手はファンからすると神格化された遠い存在であった。これはファンとアイドルの間に大きな溝があったとも言える。しかし、80年代に入るとその溝が埋められ、ファンとアイドルの距離はぐっと縮まる。その理由は、アイドルがメディアによって作られたもの、つまり一般的な可愛い女性とアイドルに大きな差はないとファンが認識し始めるからであった。テレビ番組の企画から生まれた「おニャン子クラブ」（以下おニャン子）がその最たる例である。

この認識はそれ以降のアイドル達にも当てはまり、モー娘。や「AKB48」（以下、AKB）、「ももいろクローバー」（2011年に「ももいろクローバーZ」に改名。以下、ももクロで統一。）も同様である。つまり、80年代以降からのアイドルは絶対的ではない、虚構の存在なのである。

第2章では、先ほど例に挙げたおニャン子、AKB、ももクロそしてモー娘。の特徴を「虚構」という視点から考察する。

おニャン子は虚構の「物語」を備えていた。物語とは一般人がアイドルとして芸能界で活躍するその過程である。しかし、モー娘。は物語に新しく偽りの「キャラクター」が加えられた。キャラクターはファンになるための敷居下げる役割を果たした。

そして、AKB、ももクロは二つの偽りに加えて、「会える」という特徴を備えた。これはアイドルが虚構だという印象を薄める役割を果たし、強烈にファンを引き付ける効果がある。また、この頃からインターネットが急速に発展し、ツイッターやブログにより、アイドルはさらに身近な存在になった。

以上のようにアイドルは時代と共にファンとの距離を縮めるための様々な工夫がなされている。しかし、ブレイクするアイドルはいずれも物語性を秘め、アイ

ドルの衰退とは物語の喪失を意味するのだ。

第3章ではモー娘。人気が再燃している理由について宗教と絡めて考察する。

社会学者の宮台真司は、宗教は「根源的偶発性処理の機能」を持つと主張する。その中で、「私とは何か」という問題を無条件で受け入れる際に、〈世界〉と自己の関係性において自己を拡張し、すべての問題が自己世界の中で体験形式であると把握している「修養系」と逆に〈世界〉を拡張し、自分は世界の中で最小の自由しかないと考える「覚悟系」に分けられると主張する。

これをアイドルファンに置き換えて考えると、前者は自分主体で好きなアイドルをコロコロ変える「ライト系」、後者はアイドル主体で特定のアイドルだけを追いかける「ヘビー系」と分けられる。

最近のアイドルファンは圧倒的にライト系が多く、彼等は個人個人の中にある「〇〇なアイドルが好き」という考えに従い、飽きないように常に刺激を求めている。この刺激とは物語性である。つまり、ライト系は自分の好きなアイドルを追っているつもりが、物語性を持った特定のアイドルを追っていると言えるのではないか。これはライト系のファンは、世界の中で最小の自由しかない「覚悟系」、すなわちヘビー系のファンであると言い換えることが可能なのではないだろうか。

モー娘。の全盛期は1999年から2003年であるが、その当時から在籍しているメンバーは道重さゆみ一人であり、かつ加入したのは2003年（第6期）である。さらに全盛期のモー娘。を支えた新垣里沙（第5期）が卒業したのと同時に、楽曲の雰囲気ガラッと変わった。ここに物語性を見出したライト系がファンになり始めているので、モー娘。は再燃し始めているのではないかと私は考える。

都志侑希（松本ゼミ）

●発表タイトル

なぜ豊かさの指標は作られるのか—ブータンと日本の幸福度—

指標は、過去と現在を比べて何がどれほど変化したのかを比較する際の判断基準である。筆者は学生時代に「あなたの幸せは何か」と世界各国の人々へインタビューした経験から、国の経済発展度と幸福観との関連性はないと感じ、「ある国を豊かだと判断する指標」に興味を持った。

人間の生活の豊かさをGNP（国民総生産）やGDP（国内総生産）といった経済指標から捉えることの不適切さは、日米の研究者や行政によって既に指摘されている。米経済学者リチャード・イースタリンは1974年に、ある所得レベルを超えると幸福度は上昇していくことはなく所得と幸福度との相関関係が見られなくなる（幸福のパラドクス）を示した。また、日本の内閣府は2008年の国民生活

白書において、1984年以降は経済的な豊かさが日本人の生活満足度の上昇に結びついていないと指摘した。

経済的な豊かさは必ずしも幸福をもたらさないことは、研究者や行政も一定の理解を示している。ブータンは1976年に、国づくりの中心目標を経済力の強化に置くのではなく、国民の幸福の実現を目指すGNH（国民総幸福量）という幸福度指標を考案し、これまで国づくりの指標に導入している。GNPやGDPに代わる、もしくは補完するような新たな指標が世界中で作られる流れは21世紀に入り加速し、日本では50以上の自治体の行政政策に独自の幸福度指標が導入、又は導入が検討されている。

GNHはチベット仏教の影響が強いことなどの理由で、日本では簡単に導入できないという意見もある。ところが、東京都荒川区はGNHを応用したGAH（荒川区民総幸福度）を区政の指標に導入し、必ずしもブータンでしか通用しない考え方ではないことを示した。ではなぜ宗教的な背景も経済発展度も違うブータンと荒川区が幸福度指標を導入したのだろうか。その理由を明らかにするため、17世紀に豊かさや「国力」の指標化を論じた『政治算術』及びブータンの事例から仮説を導いた。

17世紀後半に書かれた『政治算術』の中で、英経済学者ウィリアム・ペティは英の国力を仏や蘭と比較し「イングランドの利害と諸問題とは断じて悲しむべき状態ではない」と国王を勇気づけた。第1の仮説は、豊かさや国力を測る指標は国同士を比較し自国の優位を示すことで自国を勇気づけるものである。

第2の仮説は、豊かさの指標は導入する国や自治体のプラスの側面に目を向けて作られるものである。ブータンでGNHが作られた理由は、国王がブータンの生活様式を反映したGNHを新たな指標に捉え、それを使って発展させるためであった（枝廣・草郷・平山2011：43）。1970年代、ブータンのような開発途上国一般に共通していた「発展観」は近代化であり、GNPの拡大が国家の発展につながるという考え方である。しかし、ブータンには、経済的発展や近代化が生活の質や伝統的価値を犠牲にしてはならないという価値観があり、これらの維持・促進を国王は国の指標にしたのである。

以上の2つの仮説を検証するため、GAHを調査研究している公益財団法人荒川区自治総合研究所の第2次中間報告書に加え、同研究所の研究員へのインタビュー調査によってGAHが作られた経緯を明らかにした。検証結果は次の通りである。

第1の仮説は棄却された。GAHは他の自治体と比較しておらず、過去と現在を比較するものである。GAHの指標に交通安全運動の参加者数があるが、一般的には豊かさの指標とは思えない。しかし、交通事故は個人の努力だけでは防げない人々を不幸にする社会的な原因の1つである。交通安全運動の参加者数という数値を調査し公表することで、区民の意識を高めて交通事故という不幸を取り除き、

区民の幸福度を向上しようというわけである。

第2の仮説は妥当であった。GAHは荒川区民である西川区長によって作られた指標であり、次の2つを留意し作成されている。第1に、区民が日常的に接している基礎自治体の立場を最大限に活かすことである。第2に、GAHの指標作成の際、アンケート調査など区民が感じる荒川区の良さを指標に反映できる体制構築を進めることである。

本論文の結論として、豊かさの指標を作る理由は2つある。第1に「不幸」の原因を取り除くため、第2に指標を導入する国や自治体が持っている豊かさを行政に反映させるためである。

本論文はブータンと荒川区についてのみ分析したものであり、今後は幸福度指標を導入している日本の他の自治体での検証が必要である。

参考文献

枝廣淳子・草郷孝好・平山修一、2011、『GNH（国民総幸福）——みんなでつくる幸せ社会へ』、海象社。

藤田稜（松本ゼミ）

●発表タイトル

なぜ過去の教訓は活かされないのか —ODAの評価をめぐる考察—

本論文の目的は「政府開発援助（ODA）に伴う負の影響が今もなお続いているのはなぜか」という問いに対して、独自の仮説を構築することにある。筆者が日本のODAに関心を持ったきっかけは、民主党政権が2009年に始めた事業仕分けによりODAが一部削減されたことにある。大学3年に国際協力を専門とするゼミに入り、2013年8月にフィリピンをフィールドワークで訪れた。そこで見たものは、日本のODAで支援したボホール灌漑事業によって農民が苦しんでいる現状だった。ODAに関する文献を読み進めていくと、これまでもODA事業が引き起こした負の影響が数多く指摘されていた。

本論文ではまず、ODAに伴うこれまでの問題がなぜ生じたか、それに対する解決策がどの程度実施されたかを文献研究によって分析した。6つの文献のうち4つ以上の文献に共通して書かれていた批判が以下の6点である（朝日「援助」取材班1985、鷺見1989、村井編1992、2006、諏訪1996、桜井・山崎2003）。

- (1) 住民移転問題に対する批判
- (2) 援助理念の不在に対する批判
- (3) 環境問題に対する批判

- (4) ハコ・モノ援助に対する批判
- (5) 援助の不透明さに対する批判
- (6) 事後評価制度に対する批判

更なる文献研究の結果、批判した研究者などから提起された制度や決まりを作るという解決策のほとんどは実施に移されていることが明らかになった。こうした解決策の実効性を検証するため、ODA 事業の第三者評価報告書を分析した。第三者評価を分析対象とする理由は、ODA に対する客観的な評価がなされていると考えたからである。また、制度・規則面での解決策が概ね整備された時期以降の事業が対象となっている 2008 年度の有償資金協力の評価報告書を分析した。評価対象は 6 カ国、23 事業で、合計約 450 ページにのぼる報告書から、評価者が問題と指摘した点を抽出した。その結果、過去に批判された負の影響と類似のもの、つまり事業の効果、環境社会配慮に関する問題などが今も生じていることが浮き彫りになった。更に評価報告書が「効果あり」としているものと「効果なし」としているものに分けて評価内容を考察したところ、問題が繰り返される原因の一端を、以下に述べるような評価報告書の機能に見出すことができた。評価報告書は、具体的な評価結果とそれに基づく提言に分かれており、その機能は提言を将来に活かすことにある。だが、提言は必ずしも全ての評価結果を反映していない。評価のガイドラインには提言を活かすと書かれている。このギャップに、評価が活かされない原因があるのではないかと考えられる。政治学者の J. スコットの「シンプリフィケーション」という概念を用いると評価報告書の機能の問題点が明らかになる。この概念は中央政府が離れた場所からでも国民を管理しやすいものにするために画一化という手続きを通じて現実を作り変えるプロセスであった（佐藤 2009）。評価報告書にも似たような機能があると筆者は考える。評価する側は、調査で発見した問題を全て報告書に記述する。評価を次に活かす立場の行政は、長い報告書を読んでいる時間はなく、短くまとめられた要約や提言を必要としている。「まとめる」という作業が、評価報告書の内容を断片化し、画一化してしまうのである。そのため、提言から漏れた評価結果が次に活かされず、問題が繰り返されるのではないか。

問いに対する仮説的な結論は、「多様な問題を教訓として活かすはずの評価が、問題を選択し、断片化して解決策を提言していることに一因があるのではないか」というものである。これまでの ODA の問題に対する分析は、何かの不足や誰かの意図を原因とし、それを充足させたり防いだりするための制度や決まりを作るという解決策だった。それに対して、本論文が提示した仮説は、ODA を担う行政がやりやすくするための仕組みが「意図せざる結果」として問題の繰り返しにつながっているのではないかというものである。その点では、仮説構築型論文の意義である「自分独自の新しい概念」（伊丹 2001：272）を示すことができたと考えて

おり、今後は本論文で示した仮説の検証が必要である。

参考文献

- 朝日新聞「援助」取材班、1985、『援助途上国ニッポン』、朝日新聞社。
伊丹敬之、2001、『創造的論文の書き方』、有斐閣。
佐藤仁、2009、「環境問題と知のガバナンス—経験の無力化と暗黙知の回復—」、『環境社会学研究』15号：39-53。
鷲見一夫、1989、『ODA 援助の現実』、岩波新書。
諏訪勝、1996、『破壊 ニッポン ODA40 年のツメ跡』、青木書店。
村井吉敬編、1992、『検証ニッポンの ODA』、学陽書房。——、2006、『徹底検証ニッポンの ODA』、コモンズ。
桜井国俊・山崎圭一、「日本の ODA の新しい課題—批判の更新と成熟を求めて—」、『環境と公害』第 32 巻第 3 号：26-33、岩波書店。 ※本稿も合わせて提出した。
-

横井直輝（島田ゼミ）

●発表タイトル

体罰と部活動について

部活指導と体罰

冒頭で部活中の体罰の動画を流します。

近年大きく問題にあげられることの多い部活と体罰だが中学、高校と部活動をやっていた学生にとって、こういった風景は日常のかもしれない。確かに優秀な部活動の顧問や監督ほど怖いというイメージを持っている人も多いのではないかと思う。実際に行ったアンケートでは半数以上の人々がそう思っていると答えた。では実際、怖い先生とはどのように怖いのか。人によって怒り方は様々であるが、最も生徒に怖いという印象を抱かせるのは体罰ではないかと思う。アンケートでは 40% の人がその答えに体罰と答えた。怒鳴る等の威圧行為を加えれば 70% を超えた。

部活動内で体罰を行うチームは果たして強いのか。また、体罰を行うことでチームは強くなるのか。

ここで体罰とはなにかをはっきりさせたい。これには明確な定義は無く、問題とされる事案が起こるごとに個別に判断されるものである。学校教育法の総則第十一章には「校長及び教員は、教育上必要があると認めるときは、文部科学大臣の定めるところにより、児童、生徒及び学生に懲戒を加えることができる。ただし、体罰を加えることはできない。」とされている。『懲戒』と『体罰』の違いである。この違いについてはレジュメを参考にしてください。

では実際、生徒たちは何を体罰ととらえるのか。当然のように九割以上が暴力だとアンケートでは答えた。そのなかでも多く答えられていたのが「怪我を伴う暴力」と「理不尽な暴力」であった。また同時に暴言などにより精神的苦痛を与えることという回答が複数あり、肉体的な苦痛だけでなく、精神的な苦痛も生徒側は体罰と感じていることがわかった。

部活動はそれ以外の学生生活とあきらかに違った特性をもっている。もちろん部活動も教育の一環であり、教育の目的は「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家および社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」であると、教育基本法で述べられている。一方、文部科学省は部活動を「スポーツに興味と関心を持つ同好の児童生徒が、教員等の指導の下に、自発的・自主的にスポーツを行うものであり、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、学校生活に豊かさをもたらす意義を有している」と定義している。しかし、実際に部活動で追求されがちなのはここでいう「より高い水準の技能や記録に挑戦する」ことになってしまっているように思う。現役時代になにを目標に部活動を行っていたかをアンケートしたところ九割近い人がチームの成績か個人技術の向上と答えていたことでそれは明らかのように思う。

ではその重視されている成績のために体罰は必要なのか。そこで、「体罰が行われている部活は強いと思うか？」とアンケートをとった。その結果は a 思う 6 b 思わない 22 c そうとは限らない 35 という結果でした。(現状)

このことから体罰のある＝強い部活と考える人はごく少数であると考えられます。しかしながら、そのごく少数のなかには全国で優秀な成績をおさめている部活に所属していた人も含まれてもり（高校野球甲子園準優勝、バスケットボールインターハイベスト8等）、いわゆる強豪校では体罰は当たり前と考えられていることも否定はできない。

興味深かったのはどの回答のなかにも指導側に対する信頼度によるところが大きいという回答が得られたことである。

自らに対する暴力、もしくは部員に対する暴力に対して信頼を失うことはあったかとの質問に対し「ある」と答えたのはわずか5人でそのうち1人はソフトテニスで県ベスト8という優秀な成績をおさめていたがそれ以外の人たちは他の部活の顧問の体罰に対する印象、また主立った成績をおさめているわけではなかった。逆にないと答えた中には前述のように優秀な成績を修めた人も多かった。表にまとめると体罰あり／信頼度高のところにアンケートに答えた成績優良者のほとんどが集まっていた。その次に多かったのが体罰あり／信頼低のグループであり、厳しい部活＝強いというイメージは依然としてある。

体罰は部活動をするものにとって身近なものであり、データとしては良い成績を修めるためにはある程度の体罰的な要素が必要であり、それを生徒側も受け入

れていることがわかった。

池賢姫（堀上ゼミ）

●発表タイトル

海ゴミ拾いボランティア～韓国人留学生たち～

法政大学の韓国人留学生たちによる海ゴミ拾いボランティア活動に関する発表である。活動の内容を大きく、

- I. 概要 ①動機 ②目的 ③効果
- II. 活動報告 ①活動までの流れ ②感想と反省 ③映像
- III. まとめ

と分け、発表を進む予定である。

第一の概要として、①動機になったのが、韓国のある新聞記事のことであった。その内容とは、韓国のある島が漂着ゴミですごく苦しんでいるといった記事であった。漂流・漂着ゴミとは、海洋を漂流しているゴミ及び海岸に漂着したゴミのことである。しかし、この漂流・漂着ゴミは国内から流れてくるゴミもあるが、外国から流れてくるゴミの量も多いという。そこで、漂流・漂着ゴミを調べて見たら、日本でも韓国や中国、ロシアなどから流れてきた漂着ゴミで苦しんでいる所が多いということがわかった。

日本で留学をしている韓国人留学生として、ハングルが書いてあるゴミを日本の海岸で見つかるのはすごく恥ずかしく、残念なことであると思い、このような現状をより多くの留学生に知らせ、問題意識を持たなければならないということから、留学生による海ゴミ拾いボランティア活動を計画するようになった。

②目的として、韓国人留学生たちが韓国など、色々な国から流れてきたゴミを含め、海岸に捨てられているゴミを拾うことで、海ゴミの現状をわかってもらい、問題意識を持たせることで意識の改善ができることを一番として目指していた。

また、さらなる③効果として、活動の内容を映像化し、ソーシャルネットワークにアップロードすることで、韓国人、日本人など多くの人々に見てもらうことを期待されている。

活動に参加した学生だけではなく、映像を見た人々にも現状をわかってもらい、海ゴミに対する問題意識やボランティア活動に参加してみたいという気持ちなどを持たせることができる機会を提供する。さらに、持続的な活動を通して、日韓両国の友好関係を図るのにも良い影響の与えられることが期待できる。

第二の活動報告では、①活動までの流れとして、この企画を立て、知らせて参加者の募集を始めた6月から活動日である10月5日までの流れを述べる。

6～7月：参加者の募集。

8月：場所や詳細なスケジュールの決定。

9月：事前打ち合わせと必要用品の準備。

10月5日：活動開始。

11月：映像の制作とアップロード。

そして、活動場所であった千葉県銚子市君ヶ浜海岸が選ばれるまでの流れを述べる。実際、千葉県銚子市君ヶ浜海岸とは、外国、特に韓国から流れてきた漂着ゴミが多い海岸ではなかったが、金銭的・時間的な制約により、選ばれた場所であることを十分説明する予定である。そこから、外国からの漂着ゴミは多く見つかることができないかもしれないが、海岸に散らかっているゴミを拾うことで、人々により捨てられたゴミに対して、また国内や外国から流れてきた漂流・漂着ゴミ問題に対して考える時間を持つことができる。

そして、当日の活動内容を報告し、参加者たちから書いてもらったアンケートを参考して、②感想と反省をまとめて述べる。

③映像として、作られた映像は、多くの人々に見てもらいたいという気持ちを込めてYoutubeやfacebookなどのソーシャルネットワークにアップロードする予定で、最後にこの映像を流す。映像は、活動の写真と参加者たちのインタビューで作られている。

映像のあと、最後のまとめとして全体的な感想と今後の展望を述べて終わりにする。

坂本千里（今泉ゼミ）

●発表タイトル

タンザニアにおけるヒンドゥー教徒の集団形成—経済的、宗教的な視点から—

本報告では、タンザニア連合共和国（The United Republic of Tanzania、以下タンザニア）におけるインド人と、アフリカ人の対立を経済的側面と宗教的側面を中心に分析する。タンザニアがイギリスの統治下から、東アフリカ大陸部のタンガニーカとザンジバルの二つが独立し、連合した。アルーシャ宣言（1967年）以後社会主義を推進したものの、1986年にIMFの構造調整を受け入れ、市場経済への転換が行われた。日本におけるタンザニアに関する研究は、言語分析などの研究はみられるものの、その他の分野の研究は少ない。なかでも、タンザニアにおけるインド人についての研究は少ない。

タンザニア人口の99%はアフリカ人であり、インド人は1%にすぎないが、同

国におけるインド人の経済活動における役割は大きい。14世紀半ば以後インド人たちは東アフリカに関わり、主に商人や金融業者として経済的に力を持ってきた。しかし、インド人の経済面での優位性に対して人口面での多数派であるアフリカ人は、特に1961年のタンガニーカ（1964年以降タンザニア）独立後、法制度による対抗政策を取り始めた。特に社会主義経済を採用するうえで、1971年に制定された「借家没収法（Acquisition of Building Act）」で、インド人は財産を没収された。また、1963年に独立を果たしたザンジバル（Zanzibar）でも、基幹産業の国有化のためインド人所有の土地や企業も没収の対象となり、1971年にはインド人子女のアフリカ人との強制結婚という事態までにいたった。先行研究によると、タンザニアが社会主義的な統制経済から自由主義的経済に移行してからインド人の経済活動は活発になった。しかし、競争の激化でアフリカ人は貧困に陥り、経済的に余裕のあるインド人の商店に略奪を行うなどアジア人排斥の動きがみられるという事実も指摘し、現在のインド人とアフリカ人の経済をめぐる関係を提示したい。

一方、インド人とアフリカ人の対立にみられる宗教的な背景については、インド人のなかのヒンドゥー教徒を対象を絞って考察する。タンザニアにおけるインド人の宗教構成は1999年の統計によると、ムスリム、ヒンドゥー教、キリスト教、ジャイナ教、シク教の順に多く、宗教や出身地別に集団を形成している。特にヒンドゥー教徒は、カーストにより集団ごとに職業や財力の違いが見られることや、アフリカ人社会は一種の「不可触」民社会とみなしていることから、インド人とアフリカ人との対立をインド人の側から解明するうえで注目したい。例えば、ヒンドゥー教徒であるインド人の移住観をみると、欧米諸国への移住はインド人にとってより高い「文明」の地への移住だと意識されたのに対し、アフリカ大陸へのインド人の移住は「未開」の地への移住と意識された。この違いが、インド人とホスト社会との関係を規定した。つまり、欧米のインド人がホスト社会並の権利の要求を目標としたのに対し、アフリカでは、植民地化前から一貫して、アフリカ人社会とはコミュニティ活動が隔絶した社会を形成してインド人としての「特権」の維持ないし獲得を目標としたためである。それが、イギリス統治下では植民地当局が採用した人種差別政策とあいまって「搾取者」かつ「よそ者」という、今日にいたるアフリカ人のインド人への不信感を除去できなかった。また、タンザニアのインド人社会に差別的なカースト社会が存続するかぎり、インド人社会とアフリカ人社会との共存は難しいのかを考えたい。さらに、インド人社会内部における貧富の差や社会的優位性の相違あるいは社会生活の営み方は、コミュニティや宗教によって複雑に多様化している。そこで、ヒンドゥー教徒を集団ごとの職業や資産などから特徴づけることで、タンザニア社会におけるインド人社会内部の問題をヒンドゥー教徒をめぐる問題から明らかにする。以上の考察から、タンザニアのインド人とアフリカ人の間の対立において、問題の所在とそれが生

じた原因を提示し、対立を解決してゆくうえでの一助としたい。

渡邊佳月（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

水野広徳～欧州訪問と反戦論への転換

0、はじめに

旧日本軍の中にも、戦争の悲惨さを目の当たりにし、反戦を訴えた者は少なくない。しかし、それが兵学校出の職業軍人、しかも佐官級の高級将校となれば話は別だろう。本発表で取り上げる水野広徳は、海軍大佐の地位にありながら、堂々と反戦、反軍を主張した稀代の軍人である。1875年に生まれた彼は、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦という激動の時代を生きた。その中で、水野はまったく正反対ともいうべき二つの人生を歩んだ。前半生は軍国主義を信奉する海軍士官として、後半生は平和主義者を主張する人道的評論家＝反戦論者としてである。なぜこんなにも正反対の生き方をすることになったのか。何が彼を変えたのだろうか。本発表ではその転機となった欧州訪問に焦点を当て、一人の軍人が平和思想へと目覚めていく過程を明らかにしていきたい。

1、海軍将校時代

1898年、江田島海軍兵学校での3年間の課程を終えた水野は、三等軍艦「比叡」への乗務を命じられ、初めて海外に渡航している。カナダ、北アメリカのサンフランシスコ、シアトル、ハワイを訪れた彼は、現地で見えた日本人醜業婦への心情を日誌にこう綴っている。

明治三十二年五月九日（火）

（略）日本醜業婦多くして常に邦人の名誉を害し帝國の体面を汚すの行為多く、漸く高まらんとする邦人の信用も忽ち彼等の為に破らるること多しと¹。

日清戦争の勝利によって日本を“一等国”に押し上げたという軍人の自負が、海外で身を鬻ぐ邦人女性への蔑視と苛立ちを惹起しているのである。後述のように、この日本人醜業婦に対する彼の見方は、後年大きく変化することになる。

海軍士官として順調な出世を遂げた彼は、1904年、日露戦争で戦功をあげ、連合艦隊司令長官・東郷平八郎から感状を授与されている。軍国主義を信奉する海軍士官としての頂点を迎えた時期である。

2、欧州訪問と反戦主義への転換

日露戦争の従軍記がベストセラーとなり、海軍軍令部戦史編集部や海軍省文庫主官に配属となる。そこで触れた多くの書物を通じて、彼は世界の現実に目を開く。その後第一次世界大戦が三年目を迎えたころ、この大戦の実状を自らの目で確認

しようと思いたち、二年間の私費留学に行く。帰国の翌年、終戦まもない欧州を再訪し、激戦地となったフランス東部の町や、敗戦後のドイツの惨状を見学する。その時、水野は無残に破壊され、生气のあるものを全く見かけない市街の様子から、国の利益を守るために戦場に駆り出された命を犠牲にすることは、正しい行為なのか。平時ならば、一人が殺されるだけで大事件となるのに、戦争では多数の人を殺した者が英雄と讃えられる。戦争の道徳的価値、人間の命の価値を考えざるを得なかった。水野が信奉してきた軍国主義は、こうして崩れ去ったのである。

日本に戻った水野は、海軍を辞め、平和主義者を主張する人道的評論家としての道を歩んでいくこととなる。

彼の思想の変化がよく現れているのが、前述の日本人醜業婦に対する見方である。彼は50歳のころ書き始めた自伝の中にこう記している。

凡そ日本の海外発展家にして醜業婦ぐらい大胆勇敢なるものはあるまい。男の移民の一人も居らぬ所にさえ彼女等は活動して居る。のみならず彼女達は男の移民より余計に金を儲け、余計に日本に送金し、余計にお国の為になって居る²。

多くの若者を戦場へと駆り立てる軍隊よりも、わが身一つを犠牲にして故国のために尽くす醜業婦により強く共感するようになったのである。

3、むすび

欧州訪問によって反戦論者となった彼は、1923年、軍部が米国を仮想敵国とする「新国防方針」を決定したのに対し、「新国防方針の解剖」を発表。日米戦争がもたらす破滅的な未来を予言した。不幸なことにその予言は現実のものとなり、20年後、彼は最愛の一人息子をフィリピンの戦場で失った。そして、彼もまた終戦後まもなく71歳でこの世を去ったのである。

1 水野広徳著 水野広徳著作刊行会編『反骨の軍人・水野広徳』（経済往来社 1978年） p269

2 同書 p269

小林祥（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

日本が持つソフト・パワーの可能性 国際社会から見た憲法第9条

本研究の目的と方法

イギリスの公共放送局 BBC（英国放送協会）が毎年行っている「世界に良い影響 / 悪い影響を与えている国」を調べる世界世論調査がある。昨年 2012 年は世界 22 개국で 17 の国と地域を対象に各国が国際社会において「良い影響を与えているか」、「悪い影響を与えているか」を電話と対面アンケートで質問した。¹この結果で、最も「世界に良い影響を与えている国」と評価されたのはなんと日本である。日本は今年だけでなく 2011 年にはカナダと EU と並んで同率 3 位、2008 年にもドイツと同率 1 位と毎年世界から高く評価されている。

しかし、喜んでばかりもいられない。多くの国々から高い評価を受ける一方で、隣人ともいえる中国、韓国からは厳しい評価を受けているのである。2012 年の調査によれば、両国の日本に対する評価は、中国が「良い影響」16%、「悪い影響」63%、韓国が「良い影響」38%、「悪い影響」58%と最下位を争っている。

日中、日韓の安全保障の面からも、両国の対日感情を改善する方法はないか。こうした問題意識から、本発表ではわが国の憲法第9条が持つ「ソフト・パワー」に着目し、これが国際社会においてどのように評価されているか、また、それが周辺諸国の対日感情にどのような影響を及ぼすものであるかについて検討し、今日行われている改憲議論に一つの視点を示したい。

「ソフト・パワー」としての憲法第9条

そもそもソフト・パワーとはアメリカの国際政治学者ジョセフ・S・ナイ氏が提唱した、「強制や報酬ではなく、魅力によって望む結果を得る能力」（ジョセフ・S・ナイ『ソフト・パワー』p.10 L11）のことである。特にソフト・パワーの源泉になりやすいものとして国の文化、政治的な理想、政策の魅力の3つが挙げられている。彼の著書『ソフト・パワー』の中で日本は「アジア各国のなかで、ソフト・パワーの源泉になりうるものをとくに大量にもっている」（p.138 L17）と述べられている。

ここで日中、日韓関係を改善し得るソフト・パワーの源泉として注目したいのがこれまでも多くの議論がなされている憲法第9条である。憲法9条は日本国憲法第2章である「戦争の放棄」にあたる条文である。敗戦という日本史上大きな転換点を背景につくられたこの憲法で、日本は憲法として政府が再び戦争の惨禍を繰り返さないことを約束し、そのための手段として武力の行使を永久に放棄し、戦力を保持しないことを明記している。1999年5月にオランダのハーグで開かれた世界平和市民会議では、10の基本原則を採択したが、その第一に、憲法9

条がとりあげられた。21世紀の平和への取り組みとして憲法9条が重要なモデルとして位置づけられたのである。

改憲か護憲か

そんな中で今私たちにはある2つの選択肢が与えられている。改憲か護憲か。現在の憲法が改定され、2005年10月に自民党が発表した新憲法草案の通り前文と9条2項をなくし、自衛軍として戦力を持つようになることを国外から見れば、「過去の戦争への反省まで投げ捨てる日本」として捉えられてしまうのではないか。憲法9条を過去の戦争からの教訓として捉えるのであれば、憲法9条は世界へ誇るソフト・パワーの源泉であると同時にアジア諸国との関係を改善するためのソフト・パワーの源泉にもなり得る。

ナイ氏は日中、日韓の関係の悪さが日本のソフト・パワーを制限している一因であるとも述べている。逆にいえば、中国、韓国との歴史問題を真摯かつ抜本的に清算することができれば、日本のソフト・パワーはより強化され、周辺諸国との安全保障ばかりでなく、国際社会においてもさらに「良い影響」を与えることができるのではないだろうか。

参考文献

『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』 ジョセフ・S・ナイ 山岡洋一〔訳〕 日本経済新聞出版社 2004年9月出版

『イメージの中の日本 ソフト・パワー再考』 大石裕・山本信人 編著 慶應義塾大学出版 2008年8月出版

『世界の中の憲法九条』 星野安三郎・森田俊男・古川純・渡辺賢二 著 高文研 2000年8月出版

注釈

- 1 この調査は電話と対面アンケートで質問し、合計2万4090人から回答を得た。調査期間は2011年12月6日から2012年2月17日の間。(BBC World Service)

西幸乃 (熊田ゼミ)

●発表タイトル

真の平和教育について考える

私はこれまで様々な土地に住み、様々な国籍、バックグラウンドを持つ人々と出会うことで世界の人々は理解しあえるという希望を持つ一方で、世界はまだ平和だとは言えないということを痛感してきた。日本人の記憶には遠い戦争も、本当は今も多くの人が国内外での戦争に苦しみ、それは過去のものとは言えない。

そこで私は、真の平和教育について、今回の論文で取り上げ、考察したい。

そのために、私は二つの国を比較したい。私が中学時代を過ごし、第二の母国と考えるオーストラリア、そして私の生まれ故郷である日本だ。なぜなら、この二つの国が平和教育において全く異なっているからだ。

まず、オーストラリアにおいて一種の国民国家形成の基盤になっているといっても過言ではない、ガリポリの戦いだ。第一次世界大戦中、オーストラリアとニュージーランドの部隊 ANZAC が行ったトルコのガリポリでの上陸作戦である。機関銃で迎え撃つトルコ軍に対し、ANZAC の青年たちが無謀な突入を行い多数の死者をだした悲劇としてオーストラリアでは語り継がれ、誰もが知っている。注目すべきなのは、この悲劇がどのように語り継がれ、記憶されているかという点である。彼らは町の構造、教育現場、日常生活、様々な方法で、自分たちが「負けた日」について美化することなく人々の記憶に残そうとしている。

また、オーストラリアにはカウラという日本人が知るべき場所がある。かつて、第二次世界大戦中に捕虜となった日本兵たちが大脱走を計画、実行し、祖国を想って死んでいった場所だ。彼らの多くは「生きて虜囚の辱めを受けず」という言葉を信じ偽名を使っているが、現在この地にはオーストラリア政府の意向で彼ら日本人兵の墓地が作られている。

さらに、未帰還・行方不明になっていた日本軍の特殊潜航艇がシドニー湾で2006年に発見された際には、オーストラリア政府が「特殊潜航艇の発見は、豪日両国にとって重要な意義があり、遺構は最大限の敬意と名誉で扱われる」と発表し、万全の敬意をはらって調査、遺族訪問をサポートした。戦争中は敵として殺し合い、憎み合ったであろう相手を今は戦友としてその命、名誉を重んじるオーストラリアに私は心打たれた。

その一方で私たち日本人はどのように平和について考えさせられる教育を受けているだろうか。例えば、第二次世界大戦中のもっとも悔いるべきであろう悲劇「特攻隊」について私たち日本人はどれほど教えられ、知っているか。私はゼロ戦と特攻隊の遺書をオーストラリアの戦争記念館で初めて見て以来、関心を抱き、その後鹿児島県の知覧や靖国などの記念館にも足を運んだ。特に知覧には特攻で亡くなった人が残した山のような遺書、遺品の数々が展示されていた。一人ずつのエピソードなども紹介され、それらは、単なる数字として知るよりも、強烈に心に焼きつくもので、特攻で亡くなったすべての人が自分と同じように感情や心がある生身の人間であったことを改めて痛感させられた。

日本は唯一の被爆国であり、神風特攻を生んだ国であり、これほどまでに悲しいことがあったにも関わらず、戦争を通史として展示する国立博物館は存在していない。例えば知覧のように鹿児島県の中心地から遠くバスに揺られないと、これら貴重な資料に出会えないのだ。辛い過去、直視したくない過去にもあえて目を

向けることで、それと対になる平和も見えてくるのではないだろうか。

日本の平和教育に必要なものを端的に示している言葉がある。MEMENTO MORI (死を記憶せよ)。ラテン語の死生観を示した言葉である。私なりのこの言葉の解釈は、「死を知ることで生きることを知る」ということだ。今現在に至るまでに、どれだけ多くの犠牲が払われたのか、彼らの死を知ることでこれから私たちがどのように生き、平和に向かっていくべきかを考えることができるのではないだろうか。

笹川喬介（和泉ゼミ）

●発表タイトル

「Arduino とインターネットによる簡易通信モジュールの作成と実現」

1. はじめに

「フィジカルコンピューティング」という分野がある。コンピュータに対してマウスやキーボード、ディスプレイ、スピーカーといった既存の入出力装置に加えて、センサ、アクチュエータ、マイクロコントローラなどを組み合わせることで、従来よりも人間とコンピュータとの意思疎通の幅を拡げ、われわれの身の回りの物理的な世界とコンピュータ上の仮想的な世界との間に対話を作り出す試みである。今回このフィジカルコンピューティングの実現を目的とした Arduino を用いて、インターネットを介し、受け取る情報に応じて光や音といった様々なふるまいをする簡易通信モジュールの作成を行った。同時に誰もが情報を発信、受信することが出来る通信モジュールの実現を目指した。

1.1 Arduino とは

Arduino とはフィジカルコンピューティングを目的とした、統合開発環境である。AVR マイコンや簡単な入出力ポートを備えた基盤、C 言語に似た processing 言語による動作で構成されている。開発環境は Windows、Mac、Linux などの複数の OS 上で動作し、USB ポートを用いた通信が可能であること、基盤が比較的安価であることなど、初心者でも扱いやすいことが特徴である。またシールドと呼ばれる基盤を用いたインターネット接続などの機能の増設も容易である。

1.2 研究目的

本研究の目的は、誰もが簡単に情報を発信、受信することが出来る簡易的な通信モジュールの実現である。言い換えれば、各種センサや LED を搭載した Arduino とインターネットを用いることで、動作や操作が直感的に理解しやすく、情報機器に関する知識や経験が無い人でも使用可能な通信モジュールの実現を目

指す。これによって例えば離れた家族の生活に不都合がないかどうかを複数のセンサを用いて把握することや、インターネットで得た各地域の環境情報を、光や音といった基盤の単純な動作で知らせることで利用者にわかりやすく伝えることが可能となる。

2. 通信モジュールの制作

2.1 制作過程

以下の3つの過程を踏まえて制作を進めた。

① Arduino と Web ブラウザ（外部の通信端末）との連動

Arduino 上に HTML ページを内在させ、センサや LED を搭載。パソコン・スマートフォンなどの外部の通信端末から Web ブラウザを介してセンサで計測した数値の閲覧、および Arduino への命令送信と制御機能の実装。Arduino から外部へ情報を簡単に発信できるようにする試み。

② Arduino とインターネット上の情報の連携

インターネット上で公開されている災害の情報や環境の既知の情報などを Arduino で読み取り、解析した結果に基づいて動作させる。Arduino が得た情報を、LED を用いて直感的で分かりやすい動作に変換することで、利用者にとって情報を理解しやすいものにするのが目的である。

③ 2 台の Arduino による通信・連動

2 台の Arduino 基盤をインターネットに接続する。一方では赤外線・光センサによる数値の計測を行い、他方の基盤と計測結果をやり取りさせることで光・音などによる振る舞いをさせる。離れた家族の生活に何か不都合が無いかどうかを検知し、その状況を知らせる機能を目的とし、各家庭において簡単に設置、使用が可能な簡易通信モジュールとしての実装を目指す。

2.2 制作環境

開発環境 Arduino IDE 1.05

使用機器 MacBook Pro (OS: Mac OS X)

Arduino Uno R 3

Arduino イーサネットシールド R 3

各種センサ、LED

3. 結果と今後について

現在までに、Web ブラウザを介した外部の情報端末からの Arduino 上のセンサ計測数値閲覧（上記①）、および、外部からの Arduino の制御（上記②）までを実装している。これにより Arduino が受け取る情報を、インターネットを通じて離れた場所においても知ることや直感的な情報の伝達が可能になった。今後は利用者がより簡便かつ分かりやすく情報を受け取ることのできる端末の実現のために、設置が簡単で、より直感的に操作または情報を読み取れる端末としての実装を進

めたい。

金子怜（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

唐代伝奇小説と現代ドラマの比較にみる負心文学の変容

研究の目的と方法

「負心」とは、愛情を注いでくれた者への裏切りをいう。男女の間の裏切りと復讐をテーマとした作品を、中国では「負心文学」と呼んでいる。

負心文学は、古くは『詩経』の中にその原初的な姿を見ることができる。しかし、それが文学の一ジャンルを形成するようになるのは、唐代以降である。隋唐代に始まる科挙制度は、身分や出自、貧富の差に関わりなく、すべての男性に立身出世の機会を与えた。科挙の受験勉強には膨大な時間が必要となるが、その間、彼らを支えたのが妻や恋人といった女性たちであった。しかし、ひとたび科挙に合格すると、男たちの心は揺れる。より高い地位や富を得るため、糟糠の妻や恋人を捨てて、良家の娘との縁談に走る者も出てくるのである。ここに男女間の裏切りと復讐をテーマとした負心文学が誕生する。

こうした負心文学の伝統は、例えば、路遥が1982年に発表した小説『人生』のように、20世紀に至るまで、中国文学の世界に連綿と受け継がれている。これは、かつての科挙がそうであったように、現代中国の入試制度が優秀な人材を国家が一元的に管理するためのしくみに過ぎなかったからである。

しかし、近年、こうした社会のしくみを批判し、裏切りと復讐という枠組みを超える作品が誕生している。それが、2010年に制作されたテレビ・ドラマ「愛は一顆幸福的子弾（愛は一個の幸福な銃弾）」である。「現代の科挙」と言われる大学受験を背景に、受験によって変わっていく若者たちの人生を描いたものである。そのドラマを通じて、中国の知識人社会の現状とそれに立ち向かう現代人の姿を垣間見ることができる

本発表では、科挙制度の開始とともに誕生した王魁物語と、現代のこのドラマを比較し、中国の知識人社会の変化や現代の若者たちはどのようにしてそれを乗り越えていくのかを見てきたい。

王魁物語と現代のドラマとの比較にみる負心文学の変容

王魁物語の概要は次のとおり。

王魁という男性が科挙に失敗し、失意の中、桂英という女性に出会う。桂英は彼が次の試験に合格できるよう懸命に応援する。しかし、科挙に合格した王魁は、彼女を裏切り、高貴な家柄の女性と結婚してしまう。絶望した桂英は自ら命を絶ち、

悪霊となって王魁に復讐するという物語である。

一方、「愛は一個の幸福な銃弾」の概要は次のとおりである。

両親を亡くし、社会の最下層に生きる江林と彼にひたむきな愛情を捧げる衛鉄民は相思相愛の仲。ところが、ある日、江林は一人の高級幹部の娘と出会い、そのコネを使って要職に就くため、大学受験に向けて勉強を始める。そうとは知らぬ衛鉄民は、江林が大学に合格できるようにと懸命に彼を支える。大学に合格した江林は、衛鉄民と別れ、高級幹部の娘の元へ去っていく。しかし、大学卒業後、故郷の銀行に就職した江林は、衛鉄民と再会し、彼女のひたむきな愛情を思い出す。本当に大切なものが何か気づいた彼は、彼女に許しを求め、すべてを捨ててやり直すことを誓う。

両者のストーリーに大きな違いはないが、注目したいのは後者の結末である。王魁の悲惨な結末に比べ、江林は自ら本当の愛に気づき、新しい人生を歩み始める。地位や富は受験を経てエリートになっていく知識人たちが本当に求めているものだろうか。そうであれば江林は最後に衛鉄民の元に戻らないだろう。国家が能力ある若者を一元的に管理するために作られた科挙や大学受験というしくみは、エリートへの階段であると同時に、本当の愛を遮断する壁でもあった。大学生の就職難が深刻な問題となっている現代中国において、若者たちはそれに気づき、より人間らしい生き方を模索し始めているのである。

参考文献リスト

- 石川忠久『中国文学の女性像』（汲古書院、1982年）
 田中一成『中国演劇史』（東京大学出版社、1998年）
 宮崎市定『科挙—中国の試験地獄』（中公新書、1984年）

松浦未和、永瀬雄一、大石純平、須江玲奈（松本ゼミ）

●発表タイトル

なぜ農民の声が無視され続けたのか —ボホール島灌漑事業から見る開発援助の問題点—

1. 背景と問い

本論文の目的は、日本のODA（政府開発援助）案件であるフィリピン・ボホール島の灌漑事業が引き起こした住民生活への悪影響が、なぜ長年解決されなかったかを明らかにすることである。研究方法は、2次資料となる文献研究と現地での半構造化インタビュー調査の実施である。そのため、筆者らは他のゼミ生と一緒に2013年8月にフィリピンを1週間訪問した。

ボホール灌漑事業は、フィリピン国家灌漑庁（NIA）を実施機関として1980年

代に開始され、当初から日本がODAで支援をしている。1990年代後半から灌漑用水の供給不足などにより、事業実施前よりも生活苦に陥ったという声が農民からあがり始めたが、約10年間も未解決のまま事実上放置されてきた。それが、2009年に民主党政権が実施した事業仕分けによって問題が日本政府に認識されたことで、解決に向かって動き出した。なぜ事業仕分けが解決に向かうきっかけとなったのかに関心はあるものの、筆者らはもう一つの側面、すなわち問題が農民に指摘されながらも事実上放置され続けた10年に着目し、「なぜ長い間農民の声が無視され続けたのか」という問いに取り組んだ。

2. 仮説

問いに対する仮説を導くため、筆者らは事前に文献研究を行い、日本政府の援助機関である国際協力機構（JICA）と日本のNGOのFriends of the Earth Japan（FoE）が作成したボホール事業に関する報告書を読んだ。その結果、灌漑が引かれることを前提にした農地の整地作業に関して、JICA、農民の間に認識の違いがあることに気がついた。JICAは整地するための機材を農民負担にしたことで農民の自助努力を促したとしているが、農民はその負担によって借金が発生し生活苦に陥ったと指摘する。そこで筆者らはJICAと農民の二者の認識の違いが、ほかの問題においても発生していると推測し、その認識の違いこそが農民の声が無視され続けてきた原因だと仮説を立て、現地でJICA、農民へのインタビュー調査を実施した。

3. 仮説検証・分析

筆者らは当初JICAと農民の二者間に認識の違いがあると仮説を立てていた。しかしフィールドワーク初日に行われ、実施機関への訪問を目的としたNIAへのインタビューを通して事前研究では不透明であったNIA自身の認識が明らかとなった。そして問題を長引かせた原因にはNIAを含む農民とJICAの三者の間で認識の違いがあったからではないかという仮説へ変わった。その後の農民とJICAへのインタビューを通して筆者らは以下の3つの問題点に関する認識の違いを確認した。

第一に「水不足」の問題である。灌漑開始当初から水路末端まで水が届かず農民の抱える大きな問題とされていた。農民は水不足の原因をNIAの計画に問題があると指摘していた。それに対してJICAは計画ではなく農民の灌漑用水の利用方法を指摘した。一方NIAは上流に住む農民が自主的に作った用水路への取水や気候変動による水量の変化が原因であると指摘している。

第二に「農民の定期集会への不参加理由」に関する問題である。NIAと農民は定期的な会合で意見を交換することになっていたが、農民の参加の割合は低い。その理由として農民は自分たちの意見が反映されにくいことと会場場所までの交通費負担をあげている。それに対してNIAは、農民の不参加は事業に満足してい

る表れだと主張している。一方の JICA は意見交換について現地に委ねている。

第三に「水路の維持管理の責任主体」に関する認識である。不十分な水路清掃による水路の詰まりが、水循環の悪化を引き起こしていた。この問題に対して農民は高額な水利費を支払っており清掃は NIA が実施するべきだと主張している。NIA は、水路は農民の共有財産だから農民自らで清掃すべきとの見方を示している。一方 JICA は、定期的な訪問前に、NIA が清掃するため、水路は綺麗になっていて問題への認識が薄い。

以上 3 つの問題点に置いて三者間にある認識の違いを確認した。

4. 結論

以上のことから、事業の成否に係る点をめぐって、仮説で立てた JICA と農民の間にある認識とその違いのみでなく、NIA も両者と異なる認識を持っていることが確認できた。それぞれの問題に対して、三者が各認識にもとづいた行動をとっているため、問題が共有されず改善に至ることができなかつたと考えられる。これこそがボホール灌漑事業において農民の抱える問題が長い間無視され続けた原因だったと言える。

ボホール灌漑事業の事例を直ちに一般化することはできないが、開発援助の現場で度々指摘される負の影響は、各アクターがそれぞれの認識に従った行動を取ることによって起因している可能性がある。他の事例についても検証を重ねるとともに、このような問題を解決するためにはアクター間の認識の違いを埋める第三者的な存在が必要なのではないかと筆者らは考える。

白井 魁（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

台湾人作家呉濁流

～かつて日本語をもちいた作家が最後に伝えたかったこと～

日本植民地下の台湾では、日本語で活動する多くの台湾人作家がいた。戦後、彼らの多くは日本語から中国語へという言語の壁に阻まれたり、国民党独裁下での思想弾圧に屈したりなどで筆を折ることとなる。ところが、そうした中で作品を発表し続けた作家がいた。呉濁流である。

台湾漢族のマイノリティである客家に出自をもつ彼は、1943 年に創作を開始した代表作『胡志明』¹で、日本の植民地支配下で自らのアイデンティティに苦悩する台湾人の姿を描いた。この作品は「地下文学」²とも評される通り、日本の敗戦がなければ発表さえできない作品であった。戦後も多くの作品を発表し続ける一方、雑誌『台湾文藝』を創刊し、後進に発表の機会を与えるとともに、「台湾文学奨」

を創設し、台湾文学の発展に貢献した。こうした功績から、台湾では「台湾文学の守護神」³とも呼ばれている。

1968年に発表した自伝的小説『無花果』では、戒厳令下の台湾でタブーであった「二・二八事件」(1947年に起こった国民党政府による台湾住民虐殺事件)を正面から取り上げたことでも知られている。

そんな彼が1973年に発表したのが、本発表で取り上げる『台湾連翹』である。彼の遺作となった同作品は、日本の植民地支配から戦後の国民党独裁体制下に至る歴史を、自らの体験や伝聞を織り交ぜながら綴ったもので、『無花果』とよく似た作品である。しかし、そこに描かれた内容には大きな違いがあった。

日本植民地下の台湾で日本語で創作活動を始め、戦後の国民党独裁政権下でも筆を折ることのなかった老作家が、最後に伝えようとしたことは何だったのか。

本発表では、『無花果』と『台湾連翹』を比較することで、これを明らかにしていきたい。

二つの時代を生きた作家が伝えようとしたこと

『無花果』と『台湾連翹』を比較すると、「微温的」⁴とも評される前者とは対照的に、後者には二つの時代に共通する統治者の横暴や台湾人同士の裏切り、行き場をなくした台湾人の姿などが実名を挙げて描かれている。

『無花果』を発表していた彼が、あらためて『台湾連翹』を執筆した目的は何か。これを作者自身の言葉と両書の比較からみると、「二・二八事件」から白色テロに至る歴史を知らない世代に対する老作家としての責任⁵、『無花果』などの作品で書かなかったこと、あるいは書けなかったことへの後悔⁶、全編を通じて、後の世代に伝えなければという作者の思いを発見できる。『無花果』で明らかにできなかった歴史の空白を、彼の真の読者である台湾の若者たちに伝えようとしたのである。

『台湾連翹』には、日本の植民地支配についても、『無花果』とは異なる厳しい現実が描かれている。これは彼が最晩年になって、真の読者が誰なのかに気づき、日本での発表⁷という退路を断った証しでもあろう。

戦後まもない1949年、彼は日本の雄鶏通信に「台湾文学の現況」という一文を寄稿し、「台湾はすべてが夜明け前である」⁸と訴えた。それから、四半世紀後、台湾の夜明けを期待し、書き残したのが『台湾連翹』ではないかと考える。

参考文献

- 1 呉濁流『台湾連翹』草根出版、2011年
- 2 呉濁流(1949)「台湾文学の現況」『雄鶏通信』第5巻14頁
- 3 彭瑞金『台湾新文学運動四〇年』中島利郎、澤井律之訳 東方書店、2005年
- 4 廖為民(2006)「追憶吳濁流沿門托鉢的文化人」『書香遠傳』42巻44-45頁
- 5 王育徳『台湾海峡』日中出版1987年

注釈

- 1 のち『アジアの孤児』と改題
- 2 彭瑞金『台湾新文学運動四〇年』東方書店 2005 年、41 頁
- 3 廖為民 (2006) 「追憶吳濁流沿門托鉢的文化人」『書香遠傳』42 卷 44 頁
- 4 日本に亡命した言語学者で台湾独立派の王育徳は吳濁流を「微温的」と評した (『台湾海峡』日中出版 180 頁 参照)
- 5 吳濁流『台湾連翹』草根出版、2011 年 (以下『台湾連翹』) 259 頁
- 6 吳濁流『台湾連翹』241 頁
- 7 吳濁流のそれまでの作品は、大部分が日本語に再翻訳され、日本で出版されている
- 8 吳濁流 (1949) 「台湾文学の現況」『雄鶏通信』第 5 卷 14 頁

鵜澤光佑 (松本ゼミ)

●発表タイトル

ヨーロッパ地域統合 (ヨーロッパ地域統合とローカル —日本における「アルザス研究」動向から)

本論文の目的は、フランス東部、ドイツと国境を接しているアルザス地方に関する日本での研究動向を既存文献のレビューによって明らかにし、ヨーロッパ地域統合研究に資する視点を提示することである。アルザス地方に注目した理由は、19 世紀の終わりから 20 世紀前半にかけて敵対するフランスとドイツの領土紛争の舞台になった歴史を持っている一方で、現在はヨーロッパ統合の政治的な役割を担っているからである。

インターネットの論文検索ツール CiNii で「アルザス」をキーワード検索し抽出された 189 件の文献のうち、大学紀要などの学術論文 33 件を研究対象とした。内容とタイトルを一つひとつ確認したところ、19 世紀前半と普仏戦争以降第一次世界大戦までのドイツ帝国時代のアルザス地方を研究対象としている研究がほとんどないことがわかった。研究内容の傾向を見ると、アルザス語、アルザス経済、そしてアルザス地方の自治主義・地域主義に関する研究が多く、検索した学術論文の 72% を占める 24 件を確認できた。そこで本論文では、この 3 つのテーマを軸に 24 件の文献を分析の対象とした。

まずアルザス語に関する研究動向である。アルザス語は、この地方特有の言語であると同時に、フランスの地域語であり、ドイツ語の方言の一つでもある。既往研究では、第二と第三の位置づけに着目している。具体的には、この地方の独自の言語・文化を守ろうという運動から始まったフランス語とアルザス語による

バイリンガル教育が展開されてきた歴史や、フランスとドイツの和解によってヨーロッパ統合の象徴的な言語とされドイツなどとの貿易において使用されていることなどが論じられてきた。その反面、アルザス語の第一の位置づけであるこの地方特有の言語という視点での研究がなされていない。

次にアルザス経済に関する研究動向だが、大きく2つに分類できる。1つは1870年以前のアルザス地方の産業革命、もう1つは第二次世界大戦以降のアルザス経済に着目しているものである。つまり、1870年から1945年までのアルザス経済を対象とした研究が日本ではほとんどない。しかし、この時代のアルザス経済を研究することは重要ではないかと考えられる。というのも、仏独間の戦争によってアルザス地方がフランスとドイツの間で2度も帰属が変更された期間であるからだ。帰属の変更によるアルザス経済への影響を研究することは、隣国に領有される恐れのある国境地帯での経済政策を考える一助となりうる。それは別の意味での帰属の変更とも言えるヨーロッパ地域統合の進展が、国境地帯の経済に及ぼす影響やその地域の独自性を活かした経済政策を検討することにもつながる。

最後に、アルザス地方の自治主義・地域主義に関する研究動向である。自治主義・地域主義はどちらも地域独自の文化・言語を尊重するものであるが、アルザス地方にとってはアンビバレントな要素を備えている。なぜなら、自治主義は場合によってはその地域の独立のため他国に協力を求めることもあるが、地域主義は独自の文化・言語などを国の内部で認めさせる穏健な運動だからである。アルザスの自治主義に関する既往研究では、アルザスの住民のアイデンティティがアルザス地方にあることを示すものとして描かれているのに対し、第二次世界大戦以降の地域主義をテーマにした研究は地域統合の進むヨーロッパの中で、アルザスの住民のアイデンティティがヨーロッパにあることを述べている。第二次世界大戦以降の地域統合に関しての研究がアルザス地方の独自の文化・言語を守ろうという本来の自治・地域主義の視点から研究されていない。既往研究では、アルザス地方はフランスとドイツの対立と和解の象徴、ヨーロッパ地域統合の象徴として取り上げられてきた。言語、経済、自治・地域主義の3つの研究テーマに共通していることは、アルザス地方が古くは仏独間、近年では統合の進むヨーロッパの文脈で論じられていることである。かつてフランスやドイツの中に位置づけられてきたこの地方が今度はヨーロッパの中に位置づけられるようになったのである。ヨーロッパ地域統合によって、アルザスの住民が求めているアルザス地方の独自性を失いつつある。日本におけるアルザス研究では、住民にとってのアルザス地方という視点からのこの地方の研究がなされなくなっている。改めてアルザス地方を研究することで、国境地帯の独自性を失わないで進んでいくヨーロッパ地域統合のあり方を見出せるのである。

齋藤秋希（島田ゼミ）

●発表タイトル

各国のテレビゲームの背景

テレビゲームは今の若者にとってテレビゲームは、アニメ、マンガと並んで最も身近にあるサブカルチャーの一つであり。文化的背景を多く秘めている。

私はこのレポートで次の2つの事柄について書いていく。

1、洋ゲー（欧米製のゲーム）と和ゲー（日本製のゲーム）の違い

まず洋ゲーと和ゲーでそれぞれ有名なソフトを挙げていく。

洋ゲー

- Grand Theft Auto シリーズ
- Call of Duty シリーズ など

和ゲー

- ポケットモンスターシリーズ
- ファイナルファンタジーシリーズ
- ドラゴンクエストシリーズ など

次に双方の特徴とその違いについて述べていく。

まず洋ゲーでは自由が重要視されている。画面は基本3Dであり、カメラ視点も自由に移動できる。主人公は自分で操作でき、自分の好きな場所に好きな時に行け、服装なども自由に選べるものも多い。内容はミッションなどを自分で選択できたり、プレイヤーの選択によって結末が変わったりするものもあり、ストーリーを自分で決められる。対して和ゲーは固定視点のものも多い。そして一本の定められた筋道にそってエンディングに向かって行くものが大抵で、そこにはかなり凝ったストーリーが組み込まれて、さらにそのゲームのために作られたオリジナルの音楽が使用される。決められた技の中から選択して、予想通りの効果が表れるという形式のものも多い。

作画では洋ゲーではリアルさが重要視されている。高度なグラフィックでより現実世界と近い世界が描かれる。主人公は筋肉質な30歳くらいで実際の人間に近い。対して和ゲーでは、登場人物は美少年か美少女で、現実とは全く異なった世界の話が多い。このように、洋ゲーは自由度が高く現実世界に近いゲームを追及しているが、和ゲーはアニメ的で、物語感があるものを作っている。これは自由が好きな欧米人と、予想外の結果を嫌う日本人との文化の違いが表れている。

2、急成長する中国のPC オンラインゲームについて

テレビゲームを語る上で忘れてはならないのがPC オンラインゲームである。コアなゲーマーが多いPC オンラインゲームだが、近年中国がこの分野で急成長している。欧米や日本でコンシューマーゲームが主流なのに対し、中国のPC オンラ

インゲームの国内シェアは全体の90%に達し、その規模はアメリカのコンシューマーゲーム市場を20億ドルも上回る89億ドルにまで上る。中国と言えば人出が多い国である。そのため、中国のPCオンラインゲームにはそんな中国ならではの特徴を持っている。例えば豊富なやりこみ要素である。コンテンツが豊富で思いつくものは全て入れてしまおうという考えである。さらに斬新なのがオートプレイである。多くのゲーマーが面倒くさいと感じるものがレベル上げと移動であり、各国では飽きさせないための様々な工夫を凝らしている。しかし中国ではその部分を自動でやってしまおうという斬新なアイデアを取り入れた。この考えは手もひまかけて作ったフィールドマップやモンスターなどを素通りされても構わないという人出の多い中国ならではのと言える。

上の2つで述べたようにゲームには様々な背景がある。今日、日本のコンシューマーゲーム市場は減少していて、ケータイ向けソーシャルゲーム・カジュアルゲームが国内でヒットしている。しかし狭い日本の市場だけで何十億もの市場を10タイトル以上リリースすることは不可能であり、海外に目を向けなければならない。そこで日本のゲーム企業は各国のゲーム市場の裏にある文化的背景を考慮しなければならない。しかし日本のアニメやマンガなどの文化は海外でも人気が出てきている。そのため私は、日本文化の強みと各国の人々が求めているものを融合させた海外用和ゲーを開発する必要があると思う。

参考文献

灰汁 それが私 <http://lye.blog.shinobi.jp/>

【特別企画】独自の進化を続ける中国産オンラインゲームの世界を覗いてみよう
「ユグドラシル」、「オリエントストーリー」、「セイクリッド シュヴァリエ」に見る
特徴と魅力

http://game.watch.impress.co.jp/docs/news/20111109_489485.html

クールジャパンとか騒ぐ前に知るべき、中国のオンラインゲーム業界で起きていること

<http://bylines.news.yahoo.co.jp/yamamotoichiro/20130918-00028208/>

2億人の有料ゲームユーザーを取り込めるか 中国でジャパニーズドリームを具
現化する——任宜・DeNA China 副総裁 <http://diamond.jp/articles/-/36531>

中国オンラインゲーム市場シェア 57%のテンセントが世界を飲み込む日

http://wirelesswire.jp/future_of_digital_media/201309111230.html

Xbox 360 continues its roll at the top of the U.S. console market

http://blogs.technet.com/b/microsoft_blog/archive/2013/05/16/xbox-360-continues-its-roll-at-the-top-of-the-u-s-console-market.aspx

沢木麻衣（松本ゼミ）

●発表タイトル

なぜフィリピンのストリートチルドレンは減少しないのか —戦前日本の浮浪児問題との比較—

本研究の目的はなぜフィリピンのストリートチルドレンは減少しないのかを、太平洋戦争前の日本の浮浪児が減少したことと比較をして、明らかにすることにある。研究方法は文献研究である。ユニセフによれば、現在世界中で数千万人のストリートチルドレンが存在し、人口増加、移住、都市化の進行につれてその数は増加している。その中でもフィリピンは子どもの権利条約にいち早く批准し、NGO活動が活発であるが、ストリートチルドレンが社会問題化して対策に苦慮している国である。一方で、日本でも近代化を目指していた当時、路上生活をして子ども達を浮浪児と呼び社会問題化していたが、その数を減らすことに成功した国である。削減できた日本の事例をもとに、問いに対する新たな仮説を構築することが研究の狙いである。

ストリートチルドレンとは路上で生活や労働をする子どもで、家族と繋がりがあらずとも、ない子どもがいる。既存研究によると、フィリピンのストリートチルドレン問題は都市化・近代化によって生じており、それに伴う家庭崩壊が絡み合っているとされている。従って社会構造の是正と共に家族やコミュニティへの対策と、その対策をより多角的に改善する必要性が提示されてきた。しかし、これらの研究は発生後のストリートチルドレンに注目をしていて、発生前の段階や発生を防ぐことに重きを置いていない。そこでこれまであまり目を向けられてこなかった発生前の「ストリートチルドレン予備軍」（日本の場合は「浮浪児予備軍」）に注目し、仮説を構築することにした。

戦前の日本の浮浪児が減少した理由を考察すると、①浮浪児の発生要因の分析②「浮浪児予備軍」の予防が重要であった。まず、第一の発生要因については都市と農村で異なり、都市の貧困層家庭で養育できなくなった棄児・孤児と、農村から貧困や家庭内不和によって都市へ出てくる子どもがいた。そしてそのまま適当な扶養者が見つからず路上で生活を始めると浮浪児となっていた。したがって、日本の浮浪児は養育者の不在が主な原因となったと考えられる。第二に、予備軍の浮浪児化の予防として効果を上げたのが、篤志家の慈善事業による児童保護施設の増加である。この施設は都市の貧困家庭から出る棄児・孤児の受け入れ先となり、路上で生活することを防ぐ効果を上げた。農村で災害や飢饉があった際は、子どもを施設で預かる活動も行った。したがって日本で浮浪児が減ったのは、施設の増加によって「棄児・孤児→浮浪児」というプロセスの予防がなされ、「浮浪児予備軍」が減少したことにあると考えられる。一方で浮浪児の完全な解消に

至らなかったのは、農村から貧困や家庭内不和で絶えず予備軍の供給があったためだと言える。

フィリピンでのストリートチルドレンの発生要因は都市の貧困層家庭にある。農村・漁村での貧困の為に家族で都市に流入しているが、都市には大量の流入者を受け入れる雇用はなく、不安定で低賃金な労働をしている。家計の収入不足を補うために子どもは路上に出て働く。このように家族と繋がりを持つストリートチルドレンは全体の75%にのぼる。フィリピンでは家族と繋がりを持ちながら路上に出ている割合が高いため、戦前の日本で「浮浪児予備軍」だった棄児・孤児の段階を踏まずにストリートチルドレンとなるケースが多く、「ストリートチルドレン予備軍」は家族内に潜んでいると言える。

つまり、戦前の日本では都市の棄児や孤児、農村からはじき出された子どものような「浮浪児予備軍」だけを支援すれば浮浪児化を予防することが可能であった。しかし、フィリピンでは家族で都市に移り住んでいるため、ストリートチルドレンは家族の繋がりがある。その結果、子どもだけを切り離して対応することができず、家族ごと支援しなければならない。口減らしのために子どもが「浮浪児予備軍」となった日本と異なり、むしろ子どもが稼ぎ手であるために子どもだけを切り離して養育できないところに、フィリピンのストリートチルドレン問題を解決する難しさがあることが本研究から明らかになった。もちろん、既述したようにフィリピンには家族との繋がりがないストリートチルドレンもあり、それをなぜ減らせないのかについては別途研究が必要であるが、発生要因や家族との繋がりによって異なる対策を検討することで、解決に繋がる可能性があることを示唆しているとも言える。

寒川沙代子（島田ゼミ）

●発表タイトル

キリン一番搾りから考えるヒットの秘訣

キリンの一番搾りと言え、言うまでもなく同社の看板人気商品であるが、如何にしてこのようなヒット商品を生み出したのだろうか。一番搾りは、スーパー等の家庭用食品店、コンビニエンスストア、飲食店、あらゆるところで目にされるが、世間一般で言われるところのこのビールの特徴といえば、スッキリとした飲み口が挙げられる。スッキリしている分、他のビールよりもスルッとたくさん飲めていい、という人もいるだろう。または、他に比べて特筆すべき点がなく、特に一番搾りを選び好んで飲もうとは思わない、という人もいるだろう。もちろん好みは人それぞれであるし、今回特に一番搾りの肩を持って細やかなる宣伝を

しようという気もないが、幾千あるビールの中でまぎれもない人気商品となるに至ったその理由を考えてみたい。

まず、一番搾りから視点を移して考えてみたいと思う。一般的なビールは、概して麦芽と水で麦汁を生成し、その麦汁をろ過したものにホップを加えて出来上がる。ここで麦汁とは、ビール作りの仕込みとも言われ、ビール作りにおいてビールの味を決める大変重要な工程になる。通常ビールに使用する麦汁は、麦芽を煮込んでできたもろみを濾過して自然に出てくる一番搾り麦汁と、その後エキス分をすすぎ出した二番搾り麦汁を合わせたものから成るのだが、さらに使用する麦芽によって、ビールの色であったり、渋み、また口当たりの軽さ、重さなどが変化する。たとえば、他社でキリン一番搾りとしばしば比較対象に挙げられるのはアサヒスーパードライであるが、アサヒスーパードライは、麦汁を作る際、極限まで麦芽の量を減らし、インパクトのあるキレを生み出している。

では、一番搾りの麦汁はといえば、文字通り、一番搾り麦汁だけを使用している。つまり、単純に考えれば、普通なら二番搾り麦汁も使ってできるものを、二番搾り麦汁はすべて使用せずに作っているというのであるから、コストと手間は如何なるものかは容易に想像できるだろう。実際、二番搾り麦汁も使用するものに比べて、1.3倍売れないと採算がつかないという。一番搾り製法自体も、世界で初の試みであった。

近年は、若者のビール離れも叫ばれる中、誰にでも比較的飲みやすいもので、誰にでも買える値段ということはビールをヒットさせるのに重要な項目であったはずだ。飲みやすいビールを作るため、今まで誰も挑戦しなかった方法を一から模索する変化を恐れない革新精神、絶対に売れる、だからプレミアムビールでなくレギュラービールとして売るという自分の商品にたいする自信、これがヒットの一因を担ったのではないかと考える。

中條裕紀子、富山光樹、塩原笑美里、松浦奈々（曾セミ）

●発表タイトル

「インバウンドにおける情報発信と受入体制の重要性 ～和歌山県田辺市の取り組み～」

1 和歌山県の観光に関する現状

近年、旅行形態が「団体」から「個人」へとシフトし、各地域の持つ資源を生かし企画する着地型観光が注目されている。和歌山県は、「紀伊山地の霊場と参詣道」が2004年7月7日に世界遺産として登録されたため増加が見込める外国人旅行者にも対応可能な着地型旅行業に力を入れている。

2 調査概要

本発表で扱う和歌山県田辺市は、世界遺産を有する地域であり、かつ FIT（外国からの個人旅行者）向けにも着地型観光を提供した日本で初めての地域であり注目に値する。そのため、私たちは9月23日～27日まで田辺市でフィールドワークを実施した。現地では、情報発信や受入体制の整備を担う田辺市熊野ツーリズムビューロー（以下、ビューロー）や周辺の宿泊施設、田辺市を実際に訪れた外国人観光客に聞き取り調査を行った。

本発表では、田辺市のインバウンド施策から考察した課題を報告し、田辺市に対して受入体制と情報発信に関する提言をする。

3 情報発信

① 熊野ツーリズムビューロー

2003年の市町村合併に伴い、それまであった5つの観光協会（田辺・龍神・大塔・中辺路町・熊野本宮）を構成団体として、2004年4月に設立された。ビューローは官民共同で観光プロモーションをする団体で、情報発信に2つの特徴がある。1つ目は国内だけではなく海外からの旅行者にも対応するために、ビューロー傘下にした着地型旅行会社、熊野トラベルを設立したことである。WEBを通して利用者のニーズに合わせた旅行プランを作成することで、「熊野の魅力」を発信している。2つ目はスペインとの共同プロモーション活動である。スペインのガリシア州サンティアゴ・デ・コンポステーラ市と姉妹遺産協定を結び、共同で国際的に観光PRを行ってきた。また国際観光推進委員による、ホームページやパンフレットの多言語化にも取り組んでいる。

② 宿泊施設

田辺市の旅館の情報発信として、Hostel World, Booking. comをはじめとする海外オンライン予約サイトや世界を代表するガイドブックである Lonely Planet Japan への掲載を行っており、いずれの旅館も掲載を機に宿泊客が増加した。

4 受入体制

① 熊野ツーリズムビューロー

外国人観光客の積極的な受入の取り組みとして、ビューロー主催で行われたワークショップがある。観光関連業者（宿泊、交通）の方を対象とした、2年間で60回実施されたワークショップでは、外国人旅行者に対し、ありのままの日本文化をいかに伝えるかを意識して行われている。

② 宿泊施設

外国人に評判の良い旅館は、昔ながらの日本家屋のたたずまいをあえて残しており、畳や布団など昔ながらの日本の生活様式が体験可能であるため、宿泊客数増加の大きな要因となった。

5 課題と提言

上記のような強みを持つ和歌山県では、近年旅行者数は増加しているが、まだまだ改善の余地があると感じた。情報発信の面では、より多くの人に知らってもらうための工夫が必要であり、観光に興味がない人も楽しめるホームページの作成、現地に訪れた際に楽しめる現地文化や歴史などの情報を発信するなどの方法が考えられる。そしてスポーツ大会や会議など観光目的以外の来訪者へも積極的に情報を発信する必要がある。更に、観光客の口コミやSNSなどを利用することで、より良い情報発信が可能となる。受入体制の面では、少子高齢化に伴う人材不足の対策として、大学と連携したインターンシップ制度の活用や外国語を話せる人材の育成などの対策を練る必要がある。

6 参考文献

佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり—地域ツーリズムの展開』学芸出版社 2008 年

久保 明代『観光立国に資する欧米系外国人の観光行動論—大阪市、高野町、田辺市の事例を中心に—』創造都市研究 2012 年

論文部門（大学院生）

市岡卓（中島成久）

●発表タイトル

「シンガポールのマレー人問題への取組み —マレー知識人の挑戦と挫折—」

東南アジア諸国が抱える民族問題の一例として、シンガポールのマレー人が抱える問題とその改善を目指すマレー知識人の取組みの課題について分析し、特に、それが政府の人種政策との衝突により挫折を余儀なくされてきたことを明らかにする。

(発表概要)

1 シンガポールの人種政策

シンガポールは、華人（74%）、マレー人（13%）、インド人（9%）、その他（3%）の4つの人種からなる多人種国家である。マレー人が多数を占める半島・島嶼部の東南アジアにありながら華人が多数を占めるという特異な状況にあり、人種問題をめぐる衝突等によりマレーシアから分離し独立した。各人種に機会の平等を保障する多人種主義を憲法で規定して人種融和政策を推進しており、「人種中立

的」な英語中心の言語政策、公共住宅の人種別入居枠による人種混住化、少数グループの議席を確保する選挙制度など、広範にわたる社会制度が人種融和の観点から設計されている。

2 マレー人の抱える問題

少数エスニック・グループであるマレー人は、他人種との間で大きな経済的・社会的格差をつけられている。また、イスラム教徒であるマレー人は、学校等での女性のベールの着用禁止や宗教学校の教育への規制などの問題に際し、宗教的アイデンティティと国の政策との衝突に不満を持っている。さらに、マレー人は、与党主導で人選されたマレー人議員に不満を持ち、自分たちの意思が十分に政治に反映されていないという意識を持っている。

3 マレー知識人の挑戦

マレー知識人たちは、1990年、2000年、2012年の3回にわたり「コンベンション」を開催して提言を行い、これに基づいてマレー人問題の改善に主体的に取り組んできた。1991年には「ムスリム知識人協会」(Association of Muslim Professionals / AMP)を設置し、貧困家庭への教育支援、小規模ビジネスの起業支援など、政府関係の団体と別に独自の社会改善事業に取り組んできた。また、各コンベンションにおいて、新しい政治参加チャンネルとして、様々なマレー人の問題について議論する協議体を設置することを提案してきた。

4 マレー知識人の挫折

政府は、マレー人の政治参加に関する提案については、「マレー人の自人種中心主義を助長し、人種融和を害する」、「マレー人議員を通じた現行の政治システムを否定するものである」といった理由から、強く反発している。政府は、人種問題については、「微妙な問題」として非常に慎重に取り扱っており、自らの管理下でない場での政治的な議論を封じようとしている。このため、財政支援の削減などを材料にAMPに圧力をかけ、その都度AMPの提案を撤回させている。

AMPはマレー知識人が政府から独立して自由に提言や社会改善事業を行うことをねらい設立したものであるが、AMPによる新しい政治参加チャンネルの議論は政府に封じられている。AMPの設立後約2年を経た1993年には、政府に積極的に問題提起を行っていた初代会長が突然辞任させられたが、本年にも個人の資格で市民活動に参加していた役員が政府の圧力を受け辞任を余儀なくされた。このようにAMPは常に政府の圧力にさらされ、その独立性が危ぶまれる状況にある。

5 政治・社会環境の変化とマレー人問題のゆくえ

2011年の総選挙で与党が大きく後退したことを契機として、言論が統制され政府・与党に対する批判が押さえられてきたシンガポールにおいても、言論の自由が大幅に拡大するとともに、政府が国民の声を積極的に聴いて政策決定に反映させる姿勢を見せるようになった。マレー人の問題についても、政府は昨年秋から

約1年かけてマレー人社会との対話を行い、その結果をとりまとめた。政府の人種政策の基本的な枠組みが直ちに変更されることは考えにくい、「マレーの大海に浮かぶ華人の島」シンガポールが、今後マレー人問題の改善につながる政策をどのように推進していくのか注目される。

塚島順一（高柳ゼミ）

●発表タイトル

1970年代の川崎教会・青丘社を中心とした地域の在日コリアンと日立闘争を契機とした市民運動

川崎市の多文化共生に関して1980年代以降の在日コリアン（以下「在日」という。）による教育委員会や市との交渉、施策などに言及した研究論文や文献は多いが、日立就職差別糾弾闘争（以下「日立闘争」という。）を契機に始まった1970年代の在日二世を中心とした民族差別に対する運動や在日の意識変化についての総合的な論文等は見当たらない。本論文はここに焦点を当てる。研究はなるべく一次資料まで遡り、必要な可能な範囲で当事者に確認する。

日本鋼管に隣接する川崎市池上町は桜本地区でも特に朝鮮人が多く、葦の生える湿地帯だったので、集落は「あひる長屋」などと呼ばれ、行政マンから「ブラックホール」と称された町であった。1952年、この池上町に隣接する桜本一丁目に川崎教会が建った。

話は変わるが、ベトナム派兵を拒否した韓国兵金東希が大村収容所に収容されていたことから、ベ平連は1969年に大村収容所へのデモを行ない、そして入管法・在日朝鮮人問題に取り組んでいくことになった。1970年10月、横浜駅でベ平連の宣伝活動をしていた慶応大生に、日立から就職差別を受けた朴鐘碩が声をかけた。これが日立闘争のきっかけとなり、12月に裁判は提訴された。新聞記事を見た川崎教会の在日二世崔勝久が訪ねてきたことから、1971年4月に「朴君を囲む会」が結成された。川崎教会李仁夏牧師も一人の呼びかけ人となった。日立闘争の時期は在日二世が社会に出てくる時期と重なった。1974年の日立闘争の勝利によって、「自分たちもやっけていいんだ、やれるんだ」という自信が在日に浸透していく。日立闘争は「同化路線」であるという民族団体等の批判があるなか、日立闘争はまさしく意思を同じくする川崎教会を中心とする在日と、日本人との共闘であった。日立闘争の勝利を勝ち取った後、それは川崎教会・青丘社を基盤とした「生活に根ざしていくという運動」となり、やがて行政差別や教育に目を向けるようになる。

川崎教会では1969年に桜本保育園が誕生し、保育園を運営する青丘社が社会福

社法人として認可され、1974年に公認保育園となった。日立就職差別裁判勝利後の7月、川崎市当局に「児童手当」と「市営住宅入居」を求めて、初めての国籍条項撤廃の申し入れをし、市側はその完全受入れを承諾した。この運動は全国に波及し、「川崎方式」と呼ばれるようになった。桜本保育園では本名を名乗っていた在日の子供が民族差別から日本の学校に行くと本名を使わなくなる現状を見て、青丘社は学童保育を行なう桜本学園を1975年に開設し、1974年に「子供を見守るオモニの会」もできた。青丘社やオモニたちが中心となり、1978年の川崎信用金庫融資差別撤廃闘争など地域住民と共闘する市民運動スタイルが展開された。

民族差別は子供にいじめとなって現われた。1949年生まれの在日女性二世は自分と娘の二世代でいじめを経験する。いじめる側には自分を守るために在日やダブルであることを隠していた子供もいた。この地区の低学力の子供は朝鮮人だけでなく、日本人も多い。朝鮮人の場合、民族差別による生活上の問題を抱える中で低学力が形成され、日本人の場合、生活保護、公害病、親が十分に教育を受けられなかった等が原因であるという。民族差別を受けて来た子供が、障害児の子供を差別するということは、自分の中にある不満を他者に転化してゆく構造があり、日本人の場合は、生活保護の家庭、底辺の家庭になればなるほど、朝鮮人に対する差別意識が根深いという。桜本学園の教師たちは、日本名を名乗らざるを得ない民族差別の状況を変えていくには「子供の行っている学校をどうするかが問題にならないと一歩も進まない」と指摘した。1980年代初めに、それが教育委員会との交渉につながって行く。一方、同じ時期に、今まで運動の中心にいた崔勝久や日立就職差別裁判の原告朴鐘碩らは論争対立等によって川崎教会・青丘社から去って行くことになる。

佐々木健太 (大嶋ゼミ)

●発表タイトル

大学ピア・サポートの研修制度の提案 —CRLA チューター研修認定を参考に—

1. はじめに

高等教育界において、学生が学生を支援する「ピア・サポート」活動が広まりを見せているが、法政大学もピア・サポート活動を行なっている大学のひとつである。法政大学は、文部科学省の新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（以下、学生支援GP）に採択され、2007年度から2010年度まで学生による学生支援の方策を企画・実施した。その後の2011年度に、「学習ステーション」が学生の授業時間以外の学習活動のサポートを目的に開設された。学習ステーショ

ンは、学内の学生に向け、学生スタッフが主導となつて行なうプログラム（以下、学生プログラム）、教職員によるプログラム、産学連携企画や学生向けガイドブック作成などのプロジェクトを実施する場となっている。

学生プログラムでは、およそ2～3名の学生スタッフを1チームとして、具体的な実施内容を彼ら自身が企画し、実施するに至る。しかし、これまでの学生プログラム参加者数は、学習ステーションの最大収容人数¹を大きく下回っており、学生プログラムに改善の余地があるといえ、その際の重要な要因として学生スタッフの能力について着目することとした。なぜなら、学生スタッフは、学生プログラムの企画から実施までを担っているため、彼ら自身の能力を開発する方策を打ち出すことにより、持続的に学生プログラムは改善されるのではないかと考えたからである。

そこで本研究では、他大学における学生スタッフ養成の研修事例、およびCRLA チューター養成認定制度 ITTPC (International Tutor Training Program Certification) を踏まえ、学習ステーションの学生スタッフの研修プログラムと比較し、研修制度充実化に向けた一提案を行なう。

1. 他大学事例の紹介

香川大学では、ピア・サポートに関する能力を学内基準にて認定する制度であるCPS(Certificate for Peer Support)を2008年度から2011年度まで実施していた。学生支援に関する基礎的な内容を扱う正課科目を履修することで第1段階、課外講座による研修を受けることで第2段階、支援活動を行ない、活動に関するレポートを作成し、担当教職員に適切と認められると第3段階の認定を大学から授与される。正課科目の事例としては、学内や他大学のピア・サポートの実践例を学び、グループワークを通じて自分たちにできるピア・サポートの企画を行なうものがある。課外講座では、コミュニケーション力や異文化理解力、信仰力、アピール力などの養成を目的として開講されており、そのほとんどが90分の講座となっている²。つまり、第1段階の認定には正課科目による評定、第2段階は研修時間や内容、第3段階はピア・サポートの内容や質について見ているといえる。

他としては、大学院生TAを対象とする「北海道大学TA研修マニュアル」、青山学院大学経営学部マーケティング学科の初年次教育科目「マーケティング・ベシックスI」におけるSA研修プログラムなども参考となる例がある。

2. CRLA チューター養成認定制度 ITTPC

ITTPCでは、研修レベルとチューター学生の経験によって、Regular、Advanced、Masterの3段階の研修制度について認定のレベルを設けている。Regularの認定レベルの場合、10時間で、チュータリングに関する基礎知識や、ゴールの設定、参照スキルなどの8項目以上を含む研修を行なうこととされている。実際のチューター経験時間も認定内容に設定され、業務に就いた内容も評価の対

象となることがいえる。しかし、評価基準については明確な表記がないが、定期的に行なわれ、結果をチューター本人に通知することが求められている。

2011年10月現在、このITTPCの認定を、名桜大学の言語学習センターにおけるチューター育成プログラムは、日本で唯一受けている。そのトレーニング内容のうち3分の2は先輩チューターによるセッションとなり、残りは教職員によって行なうとある³。

3. まとめ

学習ステーションでは、 Semester毎に書類選考を通過した学生を対象に、3時間程度の研修プログラムが用意され、学生スタッフ間の情報共有や各種プログラムの改善のため、学生スタッフと教職員によって定期的に会議を行なっている。研修プログラムでは、コミュニケーションに関して、また業務に当たったの注意事項について触れるのみとなっている。そのため、香川大学にあるような「企画の構想」の練習、ITTPCにあるような「ゴールの設定」や「参照スキル」が指す資料収集能力について、現状の研修プログラムでは扱えていないといえる。すなわち、研修プログラムが扱う範囲を拡大し、より広範囲にわたる能力開発を受けた学生スタッフが、学生プログラムについての Semesterを通した目標の設定と、各回の目的を意識しつつ、業務に就くことが想定されよう。また、eラーニングを研修の復習教材として併用し、定期的に学習させることで、研修内容で扱った範囲の定着を促すことが考えられる。さらに、学生プログラムの目標と目的の設定は、各回および企画全体を通しての省察を可能にするであろう。学生プログラムの実施後、学生スタッフはチームのうち1人が報告書を書くことが義務付けられており、担当メンバー、学生プログラムの参加者人数と所属、実施内容について記入する。ここに、達成度の自己評価が加わることで、より具体的に次回へ向けた省察が行えることが期待される。

- 1 座席数は24席ある。
- 2 2011年度に120分講座、2010年度に180分講座と120分講座、2009年度に1泊2日が2講座、2日にわたる講座がある。(香川大学 学生支援プログラム 主体性の段階的・形成支援システム (CPS), <http://cps.ca.kagawa-u.ac.jp/about/schedule.html>, 参照日 2013/11/12)
- 3 津嘉山 淳子, Stephen A. Templin 「名桜大学言語学習センターの活動とCRLA 証明書 (ITTPC)」, 『国際的保証制度ITTPC 認定プログラムによる学生チューターの育成と学習支援』, 日本リメディアル教育学会, 2011, pp.16-17

田邊美樹（大嶋ゼミ）

●発表タイトル

ダルクローズメソッドからリトミックへ

19世紀末から20世紀初頭にかけて、スイスの音楽家、教育家エミール＝ジャック・ダルクローズが創案した音楽教育メソッドは、一般にダルクローズメソッドまたは、その人の名とともにダルクローズと呼ばれ、世界的に広がっていった。日本にも、創案から5年後には歌舞伎俳優によって紹介されその後作曲家、演劇人がダルクローズメソッドを学び日本に持ち帰っている。

ダルクローズメソッドは「リトミック」「ソルフェージュ」「即興演奏」の三つにより成りたつ。ダルクローズの定義によると、リトミックは動くこと、ソルフェージュは歌うこと、即興演奏は演奏すること、であるがここでの「動くこと」とは音楽演奏に反応して動くことを指し、まずリトミックを1年間練習した後、続いてソルフェージュと即興演奏を学ぶ。ダルクローズがこの三つが全体として調和する方向へ努めるべきであると述べている¹ように上記の各要素を組み合わせることにより、音楽に含まれる「時間、空間、エネルギー」の2要素を感じとる能力（音楽的感覚の鋭敏さ）を養う「身体の動きを通して音楽を学ぶ方法」がダルクローズメソッドである。

大正末期、ダルクローズメソッドは、パリのリトミック学校に2度留学し、ダルクローズから直接教をうけた教育家小林宗作（1893-1963）によって、日本の教育界に導入された。小林宗作は、リトミックを狭い意味での音楽教育のための訓練方法として考えたのではなく、子どもの全面発達をうながすという基本的な教育の理念に根差した音楽教育法を提起し、各地でリトミックの講習会を開き幼児教育者へ影響を与えている。²現代の日本におけるリトミック教育はこの流れを引き継いでいるものと思われる。すなわち、ダルクローズメソッドのリトミックは、日本において幼児教育のためのリトミックとして受容されたといえるだろう。しかし、国内の教育制度のなかでの位置づけはかなわず、第二次世界大戦の勃発とともにリトミックは姿を消した。³戦後、音楽教師板野平（1928-2009）はニューヨークのダルクローズ音楽学校に留学しリトミック国際免許を取得して帰国、音楽教育の基礎としてリトミックを位置づけた。そして、板野は小林とともに幼児教育におけるリトミックの発展に努力しつつ、リトミック指導者養成のために国立音楽大学に教育学科第Ⅱ類リトミック専攻コース（現・音楽教育学科リトミック専修）を開設、リトミックの普及活動と研究に努力した。⁴現在は、音楽大学や幼児教育、保育系の大学やNPOでリトミックの講習会が開かれるなど実践活動を通して音楽教育、幼児教育としてのリトミックは普及している。⁵

では日本の小学校におけるリトミック普及はどのような状況だろうか。文科省学習指導要領には次のような記述がみられる。

音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽とかがわることができるよう、指導

のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること⁶

「体を動かす活動」ということでリトミックを指すのではと思われそうであるが、この一文からはリトミック導入と実践という確証は得られない。別々の公立小学校⁷に通っている小学生4人に音楽の授業の様子を尋ねると体を動かす授業を行っていたのは4校中1校のみであり、歌唱や器楽合奏や楽典が主流を占めるのが現状のようである。

文部科学省小学校用教科書目録（平成26年度使用）⁸によると音楽の授業では現在、東京書籍、教育出版、教育芸術社3社の教科書が使用されており、内容には体の動きをともなうプログラムも導入されている。ただし既定された曲既定されたリズムに合わせる動きであり、「音楽に反応して動く」というリトミックと捉えるには疑問が残る。

学習指導要領によると音楽の教科の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」とあるが⁹音楽によって何を得るか、何を伸ばすかといった音楽によって何を得るか、何を伸ばすかといったより広い総合的な視点から、身体運動も含めた授業内容が望ましいのではないだろうか。

ダルクローズメソッドが小学校低学年を対象に創案されたことを考えれば¹⁰本来は小学校の低学年を対象とするのが自然な発展形態と思われる一方日本に受容されたリトミック教育は幼児教育と指導者養成に偏ってしまったのは、リトミックは幼児教育という視点にとどまっているからではないかと考えられる。

- 1 エミール＝ジャック・ダルクローズ著『リズム・音楽・教育』河口道朗編者・河口眞朱美訳 開成出版 2006年114頁
- 2 福嶋省吾「日本におけるリトミック教育の歴史的概観」『リトミック研究の現在』日本ダルクローズ音楽教育学会編 開成出版 2003年 30頁
- 3 R・リング/B・シュタインマン編著『リトミック事典』河口道朗・河口眞朱美訳 2006年 開成出版 143頁
- 4 福嶋 前掲書29頁
- 5 同書33-34頁
- 6 文部科学省学習指導要領：平成二十年三月二十八日文部科学省令第五号文部科学省学習指導要領第6章音楽第3 2 - (1) http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/on.htm#3_4gakunen

- 7 江戸川区立上小岩小学校、上小岩第二小学校、中小岩小学校、葛飾区立鎌倉小学校のうち上小岩第二小学校のみ。
- 8 文部科学省 HP 教科書目録(平成 25 年 4 月)小学校用教科書目録(平成 26 年用)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/mokuroku/25/1333777.htm
- 9 文部科学省「小学校学習指導要領解説音楽編」7 頁 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afielddfile/2009/06/16/1234931_007.pdf
- 10 河口道朗編『リズム・音楽・教育』河成真朱美訳 開成出版 2009 年 5 頁

中山寛子(今泉ゼミ)

●発表タイトル

「日本の海外移住に関する一考察 —1920 年代以降の国策移住にみる「集団移住」—

本稿では戦後の海外移住の特徴やこれが持つ問題を分析するために、戦前に国策として行われた、ブラジルと満州への移住を特徴づけられる「集団移住」を取り上げる。戦前の集団移住をめぐる政策やその実態をあきらかにするとともに、移住者の募集方法や集団形成(のされ方)における国家権力の関与について分析する。そして、それをもとに戦前と戦後の移住の関係を考察する。

日本では明治維新以降 1970 年代まで海外移住が行われたが、なかでも 1920 年代以降は国策として実施された。第二次世界大戦後 7 年間を除く、戦前戦後の 40 年間以上にわたって、国家の指導のもと行われた集団移住方式は戦前から戦後に繋がるものであり、特に満州移民は集団移住として国家管理が行われた究極の形といえるだろう。

集団移住の端緒はハワイへの出稼ぎ契約労働者としての送出であり、その後ほとんどの日本人集団移民は南北アメリカ地域を中心に農場・炭鉱・鉄道建設等の労働現場に送出された。当初の募集実務は官庁の依頼を受けた移民周旋人により、その後は移民会社によって担われ、地方の移民取扱人が実際の募集を行った。

1900 年代初め、米国西海岸では日本人移民の増加に伴い排日運動が高まり、日本政府は米国への移民送出自粛から中止を余儀なくされた。ブラジルが新たな大量送出先となり、積極的移住奨励政策が実施されることになった。その主管庁である内務省では増加する失業者の対策を社会事業として扱うことになり、事業の中に海外移住を取り入れ、国策として大量送出を目指す取り組みを開始した。まず、移民会社が統合され、唯一の国策移民会社である海外興業株式会社が創設された。そして、移住業務管掌のため内務省に社会局が設置され、移住業務機関が

整備されたことで、地方自治体を組み込んだ移住斡旋業務や渡航費補助も推進された。それらにより、ブラジルに創設された海外興業所有の移住地（一戸当り約25町歩）に集団移住するという体制が整えられ、それが以降の送出方式の雛形となった。

海外興業創設後、ブラジル移民は同社1社のみで募集された。各県では地方自治体を組み込んだ送出機関が設立され、県単位で集団が形成されブラジルの移住地へ送出された。しかし、ブラジルへの移民が増加するにつれ、ブラジル国内でも米国同様に日本人排斥運動が起こり移民は減少していくが、日中戦争の開始とともにブラジルへの移住は途絶え、以降、送出先は日本の勢力圏に向かっていった。

その中心は満州国で、同地への移住は満州事変以降関東軍、拓務省を中心に進められた。満州移民政策ではブラジル移住でも提唱された自営開拓農方針が掲げられ、約7～20町歩の土地が譲渡された。当初、募集は武装移民として在郷軍人を中心に行われたが、1936年の満州移民国策化後は大量送出が目指され、38年以降は分村方式による集団移住のみになった。

ハワイ・ブラジル移民も地方自治体はその募集に関わっていたが、満州移民募集では省庁及び地方自治体の連携による「膨大精密な機構」が整備され、一貫した募集体制が敷かれた。分村移住では指導者とすべき人物が養成され、彼らの役割が重視された。1930年代末にピークを迎えた送出数は、戦争の激化に伴う農村人口の減少により低下し、分村方式は継続が困難となった。だが、政府は戦争末期も分村方式を継続しようとし、機構の末端にある町村には強制的に割当が課され、強権的な募集が行われた。

以上のような国策としての集団移住と、戦後再開された移住はどのような関係があるのだろうか。戦後移住は1952年末、ブラジルへの集団移住により再開され、55年には移住が国策として決定された。当初は契約労働移民が中心であったが、政府系移住機関が経営する移住地の創設後は、多くが自営開拓移民として集団移住した。戦後移住では戦前のブラジルや満州への移住と同様の方法が援用されたが、戦前の方式は批判されることなくモデルとされたのである。

月野楓子（今泉ゼミ）

●発表タイトル

アルゼンチンの沖縄系下位世代による文化活動 —Ryukyu Sapukai を例にして—

本報告では、南米・アルゼンチンで「島うた」をうたう Ryukyu Sapukai というグループを取り上げ、沖縄系下位世代による文化活動について考察する。下位

世代による文化活動は、一般的に親・祖父母等が沖縄出身であることから、沖縄文化の継承という文脈で説明されてきた。しかし、初期の移民から数えると100年以上が経過する中で、一世と、その子どもや孫である下位世代の沖縄文化の捉え方やこれをめぐる活動を同じに考えることができるのだろうか。

Ryukyu Sapukai は、留学や研修で沖縄に暮らした経験をもつアルゼンチンの沖縄系下位世代によって2000年に結成された。沖縄の楽器である三線を手に「烏うた」などをうたうグループである。所謂「一世」は参加していないという特徴があり、年齢層は主に20代から40代で、週に一度、首都ブエノスアイレスにある沖縄県人連合会の会館で練習をしている。Ryukyu Sapukai のメンバーのような沖縄系の人々は現在、世界に約36万人いると言われ、沖縄出身の移民及びその子孫については、移民先の日系人の中でもとりわけ沖縄独自の文化の保持やアイデンティティが強いと評価され、関心が寄せられてきた。こうした関心のもとで行われる海外沖縄系の文化にまつわる研究には大きく分けてふたつの特徴をみいだすことができる。ひとつは、文化・芸能の活動そのものに関する研究で、「継承」や「変容」の様相に重点が置かれている。もうひとつは、活動の担い手に関する研究で、彼らが活動に参加するのは沖縄系というアイデンティティを保有していることによるものとして主に説明されている。

アルゼンチンについては日系人のうち沖縄系が7割を占めるといわれているが、沖縄系を対象とした研究は他の中南米地域に比して著しく少ない。アルゼンチンでは沖縄系も日系も現地との「同化」がかなりの程度進んでいると認識されているため研究の対象となりにくかったと考えることができる。しかし、アルゼンチンのような状況に目を向けることこそ「同化」を検証し、沖縄系・日系の実態を捉えていくことを可能にするだろう。

アルゼンチンへの日本人移民はその初期から他の中南米地域にみられたような開拓地への集団移住が無く、従って日系社会の形成は都市部で個別に生活を営む人々から出発した。この経緯から、沖縄系の県人会活動への継続的な参加者も限定的である。そして、一世には一般的であった職業も二世以下の世代では現地社会の一員としての教育と社会進出の機会を得て職業選択の幅も広がり、下位世代はますます県人会の活動から縁遠くなっていった。一方で、幼少期はほとんど県人会と関わりが無くても成長してから参加する者もあらわれている。こうした下位世代による昨今の文化活動参加については、マイノリティやエスニシティに対する理解への広がりによるところが大きいことが指摘され、アルゼンチンの沖縄系に関する研究においても同様の指摘がある。しかし、エスニシティといった概念が目される中においても、「世界のウチナーンチュ大会」に象徴される沖縄県からの働きかけや、後に沖縄のイメージとして定着する様々なシンボルが沖縄ブームによって創出されていくことこそ、移民社会や下位世代に影響を与えていった

のではないだろうか。

本報告では、これら先行研究が対象としてきた文化活動と下位世代について、Ryukyu Sapukaiを通し、そもそも彼らが活動に至るにはどういう背景が歴史的・現代的に見られるのか、活動に参加している本人たちの意識はどういったものであるのかを分析しながら、沖縄という「ルーツ」の自明性と下位世代による文化活動を問い直す。

小林亜佑美 (山根ゼミ)

●発表タイトル

虚構のムーミン一家 —『ムーミン谷の十一月』考—

トーヴェ・ヤンソンは児童文学のムーミンシリーズを9作品書いた。このシリーズの最終作、『ムーミン谷の十一月』には、8作目までほとんど作品の中心を担っていたムーミントロールおよびその家族が登場しない。ここでムーミン一家は、直接的には描かれないが、6人の登場人物たちによって、記憶や想像の中での存在として語られる。

作中でムーミン一家はどのように描かれているか。また、虚構の存在として描かれることにはどのような意味があるだろうか。

1. 児童文学のムーミンシリーズについて

■ トーヴェ・ヤンソン

1914年フィンランドの首都ヘルシンキに生まれる。2001年没。画家、作家。母語はスウェーデン語で、創作はスウェーデン語でおこなった。代表作は児童文学(1945-1970)、連載漫画(1952-1959)、絵本(1952、1960、1977)などのムーミンシリーズである。文章及び絵は、ともにヤンソンが手掛けている。これらをもとに、日本でのアニメーションやフィンランドでのオペラ、パペットアニメーションなどが制作された。ムーミン以前は風刺雑誌の挿絵、ムーミン以降は短編小説など、活動は多岐にわたる。

■ 8作目までのムーミンシリーズと『ムーミン谷の十一月』

本発表では児童文学を対象とするため、単に「ムーミンシリーズ」と記載する場合は児童文学シリーズを指すこととする。

9作のムーミンシリーズは続きものというよりは、各作品が独立した作品であるといってよい。1～3作目は、ムーミントロールがほぼ中心となって物語が進行する。4～7作目はムーミントロールだけでなく、ほかの登場人物にもスポットが当たる。中心人物となっていなくとも、8作目までムーミントロールおよびその家族が登場しない作品はないが最終作の9作目ではムーミン一家

は全く登場しない。

■「子どもの世界」を脱却する過程としてのムーミンシリーズ

ヤンソンは1966年に国際アンデルセン賞を受賞した際に彼女の考える「子供の世界」についてスピーチを行った。ムーミンシリーズはこの世界を描くものだったが、5、6作目からはここを徐々に脱却し、ムーミンシリーズ以降の大人向けの小説に近づいていく。

■6人の登場人物とムーミン一家

6人はそれぞれ目的がありムーミン一家を訪問するが、そこには誰もいなかった。スナフキンとミムラねえさんは一家と付き合いがあるが、他の4人はおぼろげな記憶があるか、面識がない。6人はムーミン一家に対する記憶や想像を衝突させながらムーミンの家で共同生活をする。

2. 『ムーミン谷の十一月』の論点

■先行研究

芦田みゆき：

作者と読者のなかで築かれてきた「あたたかくて気持ちのいい場所」という前提に関する指摘。

富原真弓：

『ムーミン谷の十一月』不在では、不在であるがゆえにムーミン一家の存在感は浮き彫りになっている、との指摘。

3. 登場人物が語るムーミン一家

■イメージの不確定性を浮き彫りにする

登場人物たちが繰り返すムーミン一家に対する記憶や想像の衝突は、読者が持つムーミン一家のイメージを不確定なものにする。

■登場人物は読者の鏡になる

ムーミン一家に対して独りよがりなイメージを抱いている点で、登場人物と読者は共通している。

4. ムーミン一家が虚構として描かれる意味とは

■ヤンソンの児童文学に対する態度の表明

ムーミンシリーズ後半ではヤンソンみずからが定義する「子どもの世界」を脱却していく過程が見て取れるが、1作目以来の主人公を登場させないことは、ヤンソンの創作の態度が児童文学およびムーミンシリーズから距離を置いていることの象徴的な表現といえる。

■アイロニー

登場人物たちがイメージを衝突させることによって、読者がもつムーミン一家のイメージに疑問を呈している。『ムーミン谷の十一月』が最終作であり、さまざまな表現媒体を通して読者が各々の「ムーミン」に関するイメージを持つ

ている時期であるため、アイロニーは強調される。

ポスター部門

船橋将人、山田くるみ、中村実帆、服部薫（重定ゼミ）

●発表タイトル

キネクトを用いたダイエットアプリケーション

重定ゼミはプログラミングを用いたコンピュータエンターテインメント性を含む物作りを研究しているゼミで、今回ゼミ室の設備一新にともない、なんとキネクト（Kinect）を手に入れた我々ゼミ生は歓喜とともに何としてもこのキネクトを使って何か作りたい欲が沸きに湧き上がりまして、実行に移した所存であります。キネクトというのは、コントローラを用いずに操作ができる体感型のシステムで、ジェスチャーや音声認識によって直観的なプレイが可能となる機器です。今回はこのキネクトを使ったダイエットサポートゲームを作成しました。

ゼミ生を二つのグループに分け、一人用と二人用のゲームをそれぞれの班で製作しました。一人用はプレイをすることで画面上のゲージが上下し、長時間プレイすることを目的として、二人用は競争型となっており、アイテムを登場させることでポイントに差をつけ易くしてゲーム性を高め、先にライフがなくなると負けとしてゲームが終了します。

発表では実際にゲームをプレイするとともに、ゲームの構造や製作段階で工夫したポイントなどをまとめていきます。

大澤菜摘、秋山明日香、八幡響子、高柳こずえ、千葉夏実、藤田佐和子、浜中瑞穂、八木勇太、熊谷駿希、森有沙、新海真菜、田口剛、曾我旭、矢口恵利花、佐藤福子、武澤誠、五十川里子、吉岡沙織、杉田梨香子（衣笠ゼミ）

●発表タイトル

“美しい”東京——あなたの足下に何が？——

“美しい”東京——あなたの足下に何が？——今年の夏、あるニュースが日本中を沸かせた。2020年の東京五輪の開催決定である。これは東京にとって、また日本にとって明るい話題となり、日本が元気を取り戻す転換点になると考えられている。二度目のオリンピック開催地となった東京では利便性や環境面に配慮しな

がら”美しい”東京づくりが進められつつある。しかしそこには、さまざまな問題があるのではないだろうか——そうした疑問を抱いた私たちがたどり着いたのが、都市東京の再開発における景観の問題である。SA プログラムで世界中の様々な都市の姿を実際に目に焼き付けてきたことが、自分たちの住む都市東京の景観について考えるきっかけとなった。私たちが着目するのは、「放置自転車」、「電柱」、「鉄道」である。これら三つの要因はとくに東京に目立つものであり、その都市の景観に影響を与えていると考えられる。目下これらのそれぞれについて地下化事業が進められているが、それには利便性の向上につながる面もある一方で課題となる部分も少なくない。

一つ目の「放置自転車」については、地下に自動駐輪システム（エコサイクル）を導入し、放置自転車削減に成功した品川駅周辺に着目した。成功したかに見えるこのシステムだが、莫大なコストや停電時の対処といった課題があり、同様の施設の建設を一概に進めることは困難とされている。

二つ目の「電柱」については、景観の美化やバリアフリー、災害対策などの面から電信柱と電線を地中下させる計画が進められており、東京オリンピックまでに都内19区の無電柱率を100%にしようとする動きがある。だが現実的には、莫大な費用が必要となる点が問題視されており、さらに電磁波による身体への影響や落雷の危険性なども指摘されている。

そして三つ目の「鉄道」の例としては、今年の3月に文化・演劇の街として多くの人が日々集う小田急線下北沢駅が地下化されたことがあげられる。この地下化により、長年住民間で問題視されていた開かずの踏切問題が解消された。しかし他方で、都市計画道路を進める行政側と、新しい都会のオアシスを作ろうという住民側の間で意見が分かれており、まちづくりや再開発後の景観のあり方をめぐって論争が起きている。

これらの問題を考える上で、私たちは以上の三種類の地下化に関連する場所のフィールドワークを行なった。その目的は、地下化の現状を観察するとともに、そこで生じている問題を発見し、現在の東京における景観の美化と再開発の実態を体感することである。このフィールドワークのなかで撮影した、上述のような東京の景観の知られざる姿に考察を加え、ポスター発表を行なう。

世界に名だたる都市東京において、利便性と景観の美しさを兼ね備えた再開発はいまだ道半ばである。この発表を通じて私たちは、私たちが暮らす東京という都市の変容について、多くの人に考えてもらうきっかけを与えたい。そして、独自の魅力と国際的な競争力を高める都市再生を推進する上で「景観」、「地下化」というキーワードをもとに、これからの東京のあり方をともに今一度見直してもらいたいと考えている。

原みさと、片山優衣、木村麻佑子、名波亮、野村知代、松本奈実、森田あゆみ、渡邊由季、石田恵子、居合晴菜、加藤法子、田原雅基、伴弥奈美、樋口達也、黄海玄、宮下夏実、森田あかね（佐々木直美ゼミ）

●発表タイトル

「文化遺産における遺産保全と観光の共存」

今日、「世界遺産＝観光地のメッカ」が通説だが、本来の世界遺産の姿は違う。世界遺産条約誕生の大きなきっかけは、1960年エジプトのヌビア地方にある「アブ・シンベル神殿」「フィラエのイシス神殿」などの古代遺跡が、アスワン・ハイ・ダム建設のためダムの底に沈む危機に直面した。そこでユネスコがその救済キャンペーンを実施し、世界50ヶ国が賛同した。遺跡は高い丘に移築され、移築の費用は各国からの寄付金でまかなわれた。これこそが世界遺産の理念の原点であり、世界にとって貴重な財産である遺産を、世界各国が協力して守らなければならないという「人類共通の遺産」という概念に発展していった。

上記で示したとおり世界遺産は「保全」目的で誕生したのだが、世界各国で遺産を守る以上、世界中にその遺産を知らせ伝える必要がある。その手段としての「観光」と、世界遺産は切っても切り離すことが出来ないのではないだろうか。しかし、現在の世界遺産は本来の姿を変え、偏っている。その偏りのために本来の世界遺産の意義が薄れてしまっているのではないだろうか。そこで、私たちが今年のゼミ合宿で訪れた島根県の「石見銀山遺跡とその文化的景観」を“保全優先”の例として、また前期のゼミで大きく取り上げたカンボジアの「アンコール遺跡」を“観光優先”の例として挙げる。それぞれの偏りに焦点を当て“「保全」と「観光」の共存”という、これからの世界遺産のあり方について、私たちなりのビジョンを提言しようと思う。

現在「観光」というと、ただ写真を撮り感動するだけで終わりがちだが、事前に遺産の世界遺産登録理由や問題点等を学習する—例えばガイドブックに見どころだけでなくそれらを大きく掲載する、あるいはエコツーリズムのように訪れた先で学習する機会があれば、良い面ばかりでなく問題点に目を向ける観光客も増え保全に対しての活動も今以上に盛んになり、観光と保全の両立が可能になるのではないだろうか。

益子莉佳、小野広平、仲田優花、根本優希乃、小川有奈、佐野亜美、末吉優里、高瀬悠人、中野柚（曾ゼミ）

●発表タイトル

東京どうでしょう

私たち曾ゼミのガイドブックチームは「日本のインバウンド活性化につながる情報の発信」を目標にして調査研究を進めてきた。日本の魅力について外国人と日本人の注目するポイントは大きく異なるため、私たちは特に『外国から見た東京』という視点に重点を置いている。これまでの研究を通じて、私たち日本人が「当たり前」としていることが、外国人にとっては「素晴らしい」もしくは「不思議な」文化・習慣として受け止められるケースが多いという事実が分かった。私たちの研究成果は Web サイトにアップして、情報発信していくが、情報収集の過程では、渋谷観光案内所や実際に東京を観光する外国人観光客の協力を得て、観光現場の情報を多く取り入れることができたので、まだ来日したことがない外国人の方々にとって、よりリアルな日本の情報や魅力を発信できると期待している。

また、調査研究を進めていくなかで、私たちは外国人観光客が様々なことに困っているが、現行のガイドブックでは情報が足りない、という事実も知った。そこで、私たちの Web サイトでは、ただ外国人に人気のスポットを紹介するだけでなく、彼らの役に立つような情報をより多く盛り込むことを心がけた。これは、事前に行った、外国人を対象としたガイドブックに関してのアンケート、日本在住の外国人とのモニターツアー、渋谷観光案内所の協力により、外国人が何に困っているのかを洗い出して、Web サイトに掲載する情報を厳選した。情報は「食」・「交通」・「カルチャー」・「お役立ち情報」というカテゴリー分けをして、見やすいように整理している。

そして、観光誘致のターゲットは 20 代～30 代の若者に絞り、「安い・かわいい・現代的な日本」というコンセプトで情報発信することを今年のテーマにしている。20 代～30 代の若者をターゲットにした理由は、大学生である私たちが持つ「若者目線」を活かし、同世代の外国人観光客のニーズに合った Web サイトを作成したいと考えたからである。昨年行った約 200 名の外国人留学生アンケートの結果から、1 位浅草、2 位秋葉原、3 位お台場、4 位渋谷であるということが分かった。また、今回行ったアンケート調査やモニターツアーから、外国人の若者は古き良き日本にももちろん興味はあるものの、それよりもやはり現代的な日本文化により興味を持っていることが分かった。こうした理由から、今回 Web で紹介するスポットは外国人の若者に人気があり、「安い・かわいい・現代的な日本」というコンセプトに合う渋谷と秋葉原の 2 つである。なお、渋谷に近く、昨年の留学生アンケートで 10 位だった原宿も渋谷エリアに含めた。

渋谷・原宿では、日本の様々なポップカルチャーを楽しむことのできる街として紹介している。「食」では、外国人観光客の寿司に対する関心が高いことが分かったため、形態別・値段別に色分けした「すしMAP」を作成する。「交通」では、渋谷や原宿周辺を移動するのに便利な「ハチ公バス」を紹介する。「カルチャー」では、原宿のDAISOを舞台に、外国人観光客が100円ショップでどんな物を買うのかを調査した結果を掲載する。ここではインタビュー映像や、500円でどんな物を買うか?という企画映像も掲載する。「お役立ち情報」では、渋谷にある両替所の情報やWi-Fi環境に関する情報を掲載する。

一方、秋葉原では、マンガ・アニメやオタクカルチャー、エンターテインメントに重きを置いた情報を紹介する。「食」では、秋葉原にメイドカフェなどのコンセプトカフェが多く存在することから、「コンセプトカフェMAP」を作成する。「交通」では、JRや地下鉄の情報や、路線図も掲載する。「カルチャー」では、日本の若者に愛され続けるプリント倶楽部（プリクラ）や、ガチャガチャを紹介する。「お役立ち情報」は、渋谷と同様両替所やWi-Fi環境、そしておでん缶などの珍しい自動販売機の紹介も掲載していく。

また、以上2つのスポットで共通する事柄として、ベジタリアンメニューを扱う飲食店や、若者がターゲットであるため、気軽に手頃な価格で楽しめる日本食（日本のファストフード店）も多く紹介している。

このように、これまでのガイドブックには無かった情報をより多く掲載したり、サイト内のページを印刷して実際に持ち運べるようにしたりと、外国人の方々にとってより実用的なWebサイトを作成した。動画、写真、マップを用いて、あらゆる人にとって視覚的にわかりやすいように工夫したのも、このWebサイトの大きな特徴である。最終的には、このWebサイトをFacebookなどのSNSによって世界に発信し、少しでも日本のインバウンド観光促進につなげていきたい。

岡崎玲良、平岩保乃香、新井大貴（岡村ゼミ）

●発表タイトル

漫画『3月のライオン』で描かれた街 —「聖地巡礼」の彼方へ

私たち岡村ゼミ（表象文化演習一場所論）は、文化を足元から支える基盤である「場所」に焦点を当てて研究を進めている。文化の観点から「場所」を研究するとともに、文化（絵画・写真・漫画・映画など）を「場所」の観点から見直すことは、その「場所」の意味を理解することへと繋がるだろう。

前期ゼミでは「描かれた都市」を研究主題としたが、アニメや漫画作品などに

おいて物語の舞台となった場所（聖地）を巡るサブカルチャーである「聖地巡礼」に関心が高まっている。そこで学会発表では、実景を積極的に取り込んでいる人気漫画『3月のライオン』（羽海野チカ、『ヤングアニマル』2007年4月号～）を研究対象として取り上げた。実際に作品の主要舞台となった佃・月島界隈をフィールドワークしたことで、作品の中では実際に存在する建造物や景色が数多く正確に描写されていることが分かった。同時に、漫画には描かれていない物件も数多く存在することにも気づくことができた。このように、『3月のライオン』を「場所論」的観点から調査していくことで、作者が意図した漫画の世界観や、作中における「場所」の意味を考察する。いざ、「聖地巡礼」の彼方へ！

発表概要

・漫画『3月のライオン』について

漫画作品を制作する過程で、現実に存在する場所を物語の舞台として選んだことには作者の意図が存在する。作品のあらすじを紹介し、作者がどうして物語の舞台として佃・月島界隈を選んだのかを、漫画の世界観を読み解く中で考察する。

・聖地巡礼マップ作り

実際に佃・月島フィールドワークを行い、作品シーンと現実世界を比較した。漫画と一致する点、異なる点を、マップや写真を通して実感してもらう。

・『3月のライオン』の場所論

作中では、人物が「川」とともに登場するシーンや、「橋」を渡るシーンが多い。また伝統的木造家屋と現代的建築との対比が見られる。漫画を読み、実際に月島を歩くことで、これらのシーンの裏側にある場所の意味を考える。

・漫画で描かれなかった佃・月島の姿

漫画には描かれていないリアルな佃・月島の様子を考える。その歴史を紹介し、街並みや、人々の生活の移り変わりを考察し、現在の下町風情あふれる月島のルーツを探る。

横田一、戸部翔太、鮎川紗有里、大場梨沙、倉持碧、深谷仁美、佐々木希、田井照美、近藤かな、玉利真之介（大沢ゼミ）

●発表タイトル

Welcome Japan!!

地図の変遷や歴史を発表します。

東京オリンピックまでにどのような事を工夫すればいいのかを結論として発表します。

私たちは東京オリンピックが開催される事が決まった事で、おもてなしがブー

ムになりました。そこでゼミ中におもてなしとは？という事を議論しました。そこででてきたのは日本のおもてなしは確かに優れているけれども、まだまだ問題点があるという点が浮上してきました。そこで、話を詰めていったところ地図がとでもわかりにくいという事に至りました。そこで大沢ゼミは地図の変遷や歴史を調べてなぜこうなったのかという事を考えて、東京オリンピックまでにどのように改善して行けばいいのかや他国との比較する事に決めました。具体的には大阪の梅田、秋葉原、1964年の東京オリンピックの開催地でもある、国立競技場近辺などの地図をまとめて考察していきます。そして、日本の地図の変遷などを同時並行で研究します。そこで前の東京オリンピックでの地図の影響や歴史的にみたなかでどのような事が原因でわかりにくくなったのかを考察していきます。つまり日本のおもてなしをするであろう場所は本当にわかりにくく迷ってしまうのではないかと他国と比べて地図がわかりにくいなどを具体的にポスターにまとめ発表します。

最後に大沢ゼミでどう地図が変わったらおもてなしをしやすくなるか、という提案を結論としてまとめたいと思います。

遠藤千晶、今津健太、高橋ゆりか、馬場咲歩、春名林（松本ゼミ）

●発表タイトル

大学生の海外フィールドワークにおける課題

一般的にフィールドワークとは、現地へ行って調査をし、人づてではない生の情報を獲得することでその地域を理解することである（アジア農村研究会編2005）。ゼミ生13名と教員で2013年8月の約1週間、フィリピンでフィールドワークを行った。調査では主に、ポホール灌漑事業という日本が援助をしているプロジェクトに注目し、プロジェクト実施者のフィリピン国家灌漑庁（NIA）と、資金援助を行った日本政府（大使館）と国際協力機構（JICA）、それにプロジェクトの影響を受ける農民、という立場の異なる3者にインタビューを行った。また、それとは別に都市貧困層やストリートチルドレンの生活する地域や国際組織のアジア開発銀行（ADB）本部を訪問したり、観光地やビーチを訪れたりするなど、見学の機会も多く設けた。

フィールドワーク前は、英語力や健康管理や治安に問題がなければフィールドワークがうまくいくと思っていた。しかし、実際に経験してみるとそれらはあまり重要ではないことに気づいた。順調に進まなかったインタビューを分析してみると、事前に想定していなかった3つの要素が浮き彫りになった。それは、周辺地域の把握、通訳者とコミュニケーションをとることによる理解、余裕のあるス

ケジュールであった。これらの要素はすでにフィールドワークにおいて重要とされる点として既存文献に書かれている。では、なぜ私たちはこうした点を乗り越えられなかったのだろうか。

その原因は、私たちのフィールドワークが異なる2つの目的、すなわち「調査・研究」と「見学」を抱えていたためではないかと考えられる。見学とは、調査・研究の目的とは直接関係のない、学生の興味関心に基づく場所に訪れることを指す。本来、より多くの時間を調査・研究に費やすべきだったのだろうが、実際には初めてフィリピンを訪れた学生も多く、見学地の希望が準備段階で多数挙がった。その希望を満たす一方で、学生の立場上、時間的にも資金負担能力においても制約があったために、短い時間に多くのものを詰め込む結果となった。それによって、いくつかのインタビューがうまくいかなかったのである。

したがって、この問題を解決するには予算や時間を増やすか、学生の関心に基づく見学を減らすしかない。いずれも大学生にとっては難しい選択である。大学生ならではこうした課題を乗り越えることが、フィールドワークにおけるインタビューをより良いものとするためには必要である。

今回のフィールドワークのスケジュールは、低コストに抑えることに留意しつつ、1週間という短い期間に調査・研究と見学の両方を盛り込んでいた。大学生であるがゆえに、資金は限られており滞在期間を伸ばすことは難しい。したがって、余裕のあるスケジュールをたてたいのなら、調査・研究の目的以外の場所に行くべきではない。しかしそれと同時に、せっかく海外に行くのだから自分たちの関心がある場所をなるべく多く訪れたい、という大学生なら誰もが持つ要望も捨てきれない。

時間と資金の制約が大きい一方で関心の幅が広い大学生のこうしたジレンマに対して、フィールドワークに関する文献は答えを示してくれていない。文献には訪問先を絞って時間をかけろと書かれているが、研究者ではない学生にはそこまで割り切ることは難しい。ではどうすればいいのか。答えを出せるのは大学生自身である。法政大学では様々な学部で海外フィールドワークが実施されていると聞く。私たちと同じようなジレンマに陥っているはずである。そうした経験を互いに学び合い蓄積することで、「大学生にとってのフィールドワーク論」を作り上げる必要があると感じた。

引用文献

アジア農村研究会編、2005、学生のためのフィールドワーク入門

中谷真依、本田沙織、大原絵理奈、沖本貴代、小嶋はるか、志賀仁美、柴屋
颯季、長澤つぼみ、波田野由紀、前田涼、山口由貴、山田まゆか（山下ゼミ）

●発表タイトル

アート・コントロール

あなたは無意識のうちにアートに操られている。

都市にあふれるパブリックアート、公園のベンチ、壁や空き地に存在する鳥居、
これらのアートたちは人々の行動を誘導する力を秘めているのである。

都市公園には居心地の悪いベンチが点在し、人々に長居させない環境を生み出
している。またパブリックアートの存在は時として人々に畏敬の念を抱かせ、そ
の場所を「特別な場所」と無意識に捉えさせているのである。するとこの公共で
あるはずの空間で行動が制限され、無意識のうちに自由が奪われてしまう。

本発表ではポスター、写真、展示品などを用いて多くのアートの例を挙げ、い
かに人々がアートに操られているかを説明する。

「アート」という言葉によって都市の操作・管理が美化されている、そのことに
気づいていないあなたに出会うことだろう。

松本彩、荒木栞、庄司早紀子、飯島大地、古谷宏平、斉藤ふみ、松本才佳（堀
上ゼミ）

●発表タイトル

石川県羽咋市菅池町における地域活性化活動の報告

私たち堀上ゼミは「生きる」上で欠かせない「食」について学ぶため、ゼミ創
設の2003年度より各地の農村で夏期援農合宿を行っています。2006年度は、国土
交通省の「地域興しインターンシップ」を通じて羽咋市役所の職員の方と知り合っ
た事がキッカケで、菅池町での夏期合宿が始まりました。能登半島の付け根、石
川県羽咋市（はくいし）神子原（みこはら）地区に菅池町があります。この合宿
は「集落のにぎわい」創出も目的として始まりました。私たちが訪れた当時、こ
の地域は住民の54%が65歳以上の高齢化が進む、所謂「限界集落」の一つでした。
少子高齢化に伴う過疎化問題が顕著に現れるようになってから、様々な地域で過
疎対策は行われているものの、なかなか解決までには至らないというのが現状で
す。しかし、羽咋市と菅池町の皆さんの努力で、現在では「限界集落」を脱出し「奇
跡の集落」と呼ばれています。

その集落で、今年も私たちゼミ生は、9月9日から13日まで各自が農家さん
のお宅に泊めていただき、農作業のお手伝いなどを行いました。今回は、合宿開始

前夜に大雨が降ったため、田圃が水浸しとなり、足場が悪い中での作業は、想像以上に大変でした。稲刈りは、すべて機械化できず、足腰を落としての手刈り作業や重い稲束を運ぶので、かなり重労働で、足腰が弱った高齢の農家さんにとっては、とても大変な作業だと実感しました。泊めていただいた農家さん宅では、普段の都会暮らしとは異なる生活スタイルも体験しました。また、自分たちが収穫したものが食卓に運ばれてくる時の喜びはとても大きく、自然と食のありがたさを実感しました。泊めていただいた農家さんとは、初対面でしたが、町内会のみなさん方も私たちを温かく向かえて下さり、心温まる交流となりました。この援農合宿を通じて、人とのつながりの大切さを強く感じました。今後も、このような活動を継続できれば良いと思います。

賑わいを取り戻しつつある菅池町ですが、高齢化が進んだため耕作放棄地が増えています。羽咋市では2011年6月に「能登の里山・里海」がFAOの「世界農業遺産」に登録されたことをキッカケに、農薬、除草剤および肥料を使わない自然農法で農作物を育てる若い新規就農者を募りました。その結果、現在では二組の若者たちが就農し、菅池町を元気づけることにもつながっています。この自然農法は、現耕作地よりも、むしろ耕作放棄地が適しています。農薬を使えば作物は育ちやすくなりますが、土中の有用菌などが死んでしまいます。耕作放棄地では、自然に近い状態であるため、スムーズに自然農法に移行が可能だと考えられています。耕作放棄地は、菅池町だけの問題ではありません。全国に埼玉県程の面積を占めている耕作放棄地は、我々にとっても問題なのです。日本の農業の進むべき道の一つである自然農法についても発表します。

また、夏の援農合宿の恩返しとして、毎年ひな祭りの時期に、高さ10m程の巨大ひな人形を作っています。2011年に世界農業遺産にも認定された、「神子原の棚田」を巨大ひな壇に見立て、地元にある素材を活かしてひな人形を作るのです。主な材料は田畑の害にならない竹や雑木と廃棄反物を用い、竹や雑木は山に入って自ら調達し、布は市内の織物屋さんから欠陥品として廃棄される反物を頂くので、材料費はほとんど掛かっていません。菅池町の観光資源になればとの思いで2007年3月にこの活動を始めた所、テレビや新聞で取り上げられ、お披露目の2日間で1,500人の見物客が訪れ、菅池町は過去に例のない賑わいとなりました。それ以来、毎年違ったデザインで作り、2008年度からはより楽しんで頂く為にテーマを決めるようになりました。2008年度はUFOの羽咋市に因んで「ピラミッド・パワー」、四角錐の立体構造のおひな様でした。2009年度は『動き』で人形の頭に風車をつけ、表情も変わるよう工夫しました。2010年度は「光」。夜間には煙火師さんによる打ち上げ花火も上げました。2011年は東日本大震災の復興を祈願し、「起き上がり小法師」をテーマに作りました。そして2012年は、ローマ法王に「神子原米」を献上した事から、「お米」をテーマにしました。

今年も、観客のみなさんに喜んで貰える素晴らしい作品を作り、微力ながら地域興しのお手伝いをさせていただく予定です。

廣橋ひかる、平井知明、里村優太、山口裕太、水野菜美、藤原佳奈（甲ゼミ）

●発表タイトル

聴覚障害者の生活の質を豊かにする支援方法の基礎研究

1 はじめに — 研究目的

聴覚障害者は、聴覚情報が受け取れないことによって、誰もが暗く苦しい生活を強いられているわけではない。聴こえないことを受け入れ、聴覚以外の方法で情報を受け取り、生活を自ら工夫し、積極的に生きている人々が多くいる。自らのハンディキャップを悩みながらも受け入れていくことで、生活を工夫して豊かにしようとする営みは、難聴者・聾者などの聴覚障害を持つ人々も健聴者も人間である限り同じであり、そこに個人の限界が存在し、それを克服しようと努力することもまた同じである。

本研究では、聴覚障害を持つ人々が「聴覚障害」というハンディキャップを克服するための努力を支え、日常の生活の質をより豊かにする支援方法を質的調査法と組み合わせながら研究することを目的とする。

2 従来の研究

匂いで警告を伝える火災警報器の研究や、音の代わりに強い光を発するインターフォン、音の視覚化の研究、日常で使用する機械の作動音などの研究などがあげられる。

3 今回の研究アプローチ

本研究を始めるにあたり、聴覚障害者の生活の質を向上するためには、彼ら彼女らを感じ取れる世界を広げ、聴覚情報を感知可能な他の感覚情報に変換することが有意義であるという考えを仮説として設定し研究を進める。

対象となる聴覚障害者に対し質的インタビューを行い、そのインタビュー結果から聴覚障害者の感じ取れる世界を広げるためにはどのような要素が重要かを分析し、その要素を補うための支援方法を検討する。最終的には、その支援方法を具体的な支援ツールとして試作し、その効果の評価を行う。

インタビューによる調査研究チームと、その支援方法を実現させるツールの開発チームの二つに分かれて研究を進める。

4 質的調査と支援ツールの設計・製作

聴覚障害者の協力を得て、半構造化インタビュー法を用いた質的インタビューを行った。

インタビュー結果を分析し、支援ツールの設計指針を検討し、聴覚障害者の感覚世界を広げることを目的とした具体的な支援ツールを作成する。そのプロトタイプとして自転車のベルに反応して自転車の存在を知らせるツールはその一例である。

5 結論

質的インタビュー調査結果の分析と具体的な支援ツールの製作を通じて、研究当初に設定した、聴覚障害者の感じ取れる世界を広げ、聴覚情報を感知可能な他の感覚情報に変換することが有意義であるとした我々の仮説の妥当性、支援ツールの可能性について評価する。

佐々木美紀、中村思保、吉野紗都、海野里奈、岩泉高志（今泉ゼミ）

●発表タイトル

私に関係あるの?～一緒に考えたい沖縄戦～

本発表では、「唯一の地上戦」、「集団自決」と教科書で習い覚えてきただけの沖縄戦が、自分たちにとって遠い存在から身近なものになった経験、これを通じて考えたことを、国際文化学部の同世代のみなさんと共有して関心を持ってもらい、二度と沖縄戦のような一般住民を巻き込んだ戦争を繰り返さないためにはどのようにすれば良いのか考えたい。

私たちは今年9月中旬に沖縄研修を行った。沖縄研修では沖縄戦の戦跡や米軍基地を訪れ、そこで沖縄戦体験者や、基地や戦跡を案内する沖縄国際大学のサークルの大学生、沖縄戦の体験を語り継ぐ活動を行っている方々に出会った。

その中でも特に印象深かったのは、学徒隊資料展示室の説明員として私たちを案内してくださった本土出身の大田光さん（24歳）であった。大田さんは展示室一面に飾られていた当時十五歳前後であった男子学徒隊ひとり、ひとりの少年の写真について、「ただの写真として見るのではなく、彼らも皆と同じように生きていたことを意識して見て欲しい」と述べ、その中の一人の少年が書いた遺書を見せて下さった。

そこには「戦争で立派に死んできます」という典型的な言葉とともに、「家族にもう一度会いたい」という気持ちが綴られていた。この言葉から、彼らも私たちと同じ、大切な人を恋しく思う同世代の少年であったことに気付かされた。「唯一の地上戦」や「集団自決」という字面だけの認識で、遠い存在であった「沖縄戦」が一気に身近なものに感じられた。

沖縄研修終了後、沖縄戦に関心を持ち元沖縄大学法経学部の屋嘉比取准教授の『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす一記憶をいかに継承するか』を読んだ。その中

で日本軍の関与が指摘される集団自決や旧日本軍による沖縄住民の虐殺などが、1980年代以降、日本政府によって高校の日本史教科書から削除が求められるなど、教育現場で教えないようにしようとする強い動きがあることを学び、私たちは、何故政府がこれまでして隠蔽しようとするのかを知りたいと思った。同時に、沖縄戦体験者が私たちに語りかけ、あるいは展示物の制作などに協力していることは、政府が自分たちの体験を教科書で教えないようにしようとしていることへの抵抗であり、自分たちの体験を戦後世代に語り継ぐことにより自らの体験の継承を図っていることだと分かった。今、沖縄戦を知る世代の高齢化が進み、彼らから直接沖縄戦について話を聞くことは難しくなっている。それゆえ、戦後世代から戦後世代へこの沖縄戦の体験を伝えていくことの必要性が高まっている。だが、戦後世代の私たちにとって沖縄戦は身近に感じることは難しく、この問題に対し無関心な人が多い。実際に沖縄研修に行く前の私たちも、この無関心な人の一部であった。そして、私たちと同じ世代、かつ本土出身者である大田さんから沖縄戦の話聞いた際に、沖縄戦体験者、またその体験を語り継ごうとする人々から発信される「過去から学び、もう二度と自分たちと同じ経験、自分たちが犯した同じ過ちを繰り返させたくない」という思いを感じ取った。また、戦争体験者から聞いた「今は戦前と同じ雰囲気を感じる」という言葉から、私たちがこの感覚を理解できないことに危機感を覚え、私たちに「戦争は自分たちと無関係なものではない」という意識を芽生えさせた。沖縄で出会ったこれらの人たちの言葉から、沖縄戦は自分達には関係ないという考えは大きく変わった。この経験を経て、私たちは、第一に体験者たちや体験を語り継ごうとする人たちが、沖縄戦の体験を本土の若い世代に伝えようとし、伝えてほしいと切実に思っていること、それゆえに第二に、私たちは非体験者であっても、沖縄戦を伝えていくことの意味と重要性、それを妨げている無関心の危険性を強く感じた。だからこそ、今学会で沖縄戦を取り上げることで本土の同世代の学生に関心をもってもらう場を準備し、共に考えたい。

大嶋良明、佐々木健太、田中勇太（大嶋ゼミ）

●発表タイトル

ePortfolio を活用した学部教育の取組み—プロジェクト2年目の現状報告

我々の研究室は従来ブログや SNS、CMS を活用した学習成果の可視化を目指した活動を行ってきた。学部ではこれを発展させて 2011 年頃より ePortfolio ツール Mahara を試験的に導入し、2012 年度からは学部新入生全員が利用する運用を始め

た。本稿では、チュートリアル、入門科目、演習、情報科目などのいくつかの学部授業において試験的な利用を始めたのでその結果を報告する。Maharaは演習やワークショップ科目など少人数の教室環境では特に使いやすいが、情報実習室でのマルチメディア科目や150人規模の教室でのグループワークなどでも、補助員による適切な支援があればそれなりに効果的な利用ができることが分かった。

入門科目において、学外での課題を授業内でグループ討議しその成果をMaharaページにまとめてプレゼンするグループワークにMaharaを使用した。1年生のICTスキルにはばらつきがあり機器操作にはTAの補助が必要であったが、貸出ノートPCで提出ページを構成させ、プレゼンテーションと講評を実施した。この科目の一度の受講数は160名程度であり、グループワーク用のノートPCに加えて、スマートホン等を介して多くの学生が同時に自分のMaharaアカウントに接続していることより、中～大教室における無線LANの接続数やMaharaへのアクセス状況に関して興味深い利用例となった。

情報科目ではPCマルチメディアの基礎科目においてPhotoshop作品や短い映像作品と制作メモをePortfolioにまとめる実習をした。学生はリテラシ科目を履修済みであり、学生のMaharaに対する抵抗感は少なく円滑に実習に取り組むことができた。またweb公開機能も手軽であり、この点は学生達に歓迎された。ひとつの問題となったのは学生作品をひとつのページとしてギャラリー化した時で20~30本の動画を貼り付けたページはロードにかなりの時間がかかることであった。コンテンツはできればYouTubeなどの外部のクラウドサービスを使わずに配信できることが望ましく、VideoPressのような配信環境とのリンクが求められた。

マルチメディア科目においてはMコンテンツの保存場所として、また動画、音楽、静止画、ポスター原稿、制作メモ、絵コンテなどを収納するデジタルポートフォリオとして活用した。学部3年生は操作への抵抗感は少なく、みずから使い方を発見する段階に到達しつつあるように見受けられた。必要な作業等は相互に教え合う雰囲気が醸成されMaharaの利用はもっともスムーズに展開できた。一方で学生が提出するデジタルデータのファイルサイズがかなり大きいため、アップロードの上限値に十分に余裕を持たせる必要があった。

演習においては、研究指導やプロジェクトの管理、輪講論文の管理、論文レビューなどでの実践的利用を行った。今年度は学部と大学院のゼミを連続で合同運営するが社会人学生も含めて全員が顔をあわせる機会は限られておりMaharaのグループ機能を活用して各自の研究構想を逐次更新し、その結果を共有するような運営方法は適している。

一方、普段のコミュニケーションはもっぱらFacebookのようなSNSが好まれ、Mahara内部のメッセージ機能の利用は伸びなかった。コンテンツについては、これまでにGoogle AppsやCMSなどに研究活動の成果物が散在している。Mahara

を中心とする研究室の仕組みづくりは始まったばかりであり、その教育上の長所や恩恵について考察する段階には至っていない。

その他の取組みとしては、新システムが提供するルーブリック作成機能を活用してチュートリアル科目や異文化理解のルーブリックテンプレートを作成しユーザに提供した。今年度は大規模な実施には至らなかったが、ルーブリック機能の活用に向けてひとつ足がかりができたものと期待される。

ePortfolio ツール Mahara の活用に関する学部授業での実践的経験を報告した。今後はさらに成熟した利用法の発見とユーザによる学習コミュニティの内発的な発展をめざして取り組みたい。

映像部門

紺谷佳弘、塩田百々、依田直大（島田ゼミ）

●発表タイトル

「透明人間の夢」

「透明人間の夢」というゼミの講師・島田雅彦先生が脚本と構成を手がけた作品に、生徒である私たち自身が実際に演じ、撮影し、映像手法を考え、ロケハンした生徒主体の作品だ。

今回の撮影・作品制作の目的は制作を通して映像手法や映像を創る基本中の基本的な技術を学ぶことや主人公のキャラクター作りをどのようにすれば観客を惹くことができるかということ学ぶことである。

「透明人間の夢」

主人公マナブは全てのことに関してルーズな性格でそれをほっとけないヒロイン・レイコ。住む家がない、泊まる場所がない、そのような二人のケンカのシーンから物語は始まる。そうした状況の中でマナブは盗み・食い逃げ・のぞきが何でもできる透明人間になりたいと願うようになる。「仕事を探しているのか。」という謎の男の登場でマナブ・レイコの環境は大きく変化していく中で、マナブは透明人間になれるのか。

原悠里奈（島田ゼミ）

●発表タイトル

舞踊世界紀行

私は幼い頃からクラシックバレエをやっていた。私の生活の一部と化したバレエは私にとってとても身近なものであり、バレエのなかのキャラクターダンスに興味を持ちそれは舞踊全般に興味を持つようになるきっかけであった。

舞踊とは人類と同様に古く、舞踊の発生についてなどその詳しいことは分かっていない。しかし現代に残る世界各地のダンスや、古代遺跡・遺物などから、本能的な身体動作、求愛行為、呪術的行為などが初期のダンスではないかと考えられる。舞踊の目的とは、鑑賞を主たる目的としたものと、それ以外のものに大きく分けられている。前者は演者とそれを鑑賞する者から成り立つ、舞台芸術としてのダンス全般を指す。後者は、娯楽・社交としてのダンスや、スポーツとしてのものなど、ダンスへの参加を主たる目的としたものや、宗教・呪術行為としてのダンスなどが含まれる。

今回私が舞踊全般についてだけではなく伝統舞踊に絞って取り上げることにしたのは、舞踊で世界紀行をすると考えた時に、舞踊の中もジャンルを絞った方がわかりやすいと感じたということと、伝統舞踊はやはり今現在存在しているダンスの原点だと感じたからであり。伝統舞踊は深く意味がありダンスの中でも存在意義がわかりやすいと思ったからである。

例えばアジア地域のダンスは、歴史的な出来事や物語などを、ダンスの形態で表現するものが目立っている。また、演劇と不可分なまま発生・発展してきたものが多い。例として、推古天皇の時代に日本に移入されたとされる伎楽は、楽人と舞人とで構成される仮面音楽劇であり、日本舞踊の源流の一つとされている。

アジア地域の代表的舞踊劇には、日本の能、歌舞伎、中国の京劇、インドのカタカリ、ジャワ島のワヤン・オラン、バリ島のレゴンなどがある。これらの舞踊劇で行われるダンスは、僅かな所作も洗練されており、象徴性が極めて高い。一方、民間のダンスには、宗教儀式や豊作を願う呪術的行為に起源を持つものが目立つ。中南米のダンスでは、サルサ、メレンゲ、ルンバ、レゲトンなどが代表的な例としてあるが、これらのダンスはいずれも主に民間に盛んであり、結婚式はもとより誕生日会などのちょっとしたパーティーでも気軽になされている。北米のダンスとしてはジャズダンス、タップ、ストリートダンスなどがある。タップなどは元来はアメリカ南部の黒人のダンスであり18世紀アメリカ合衆国にて白人が黒人の集まる場でのドラムを禁止し、ドラムの代わりに足を踏み鳴らし音を出した事から始まった。20世紀に映画や音楽とともに世界に広がった。現在ではタップダンスも多様化しており、リズムタップやミュージカルタップなどのスタイル

がある。ヨーロッパ地域は、中世以降、貴族社会において舞踏会が盛んに催され、社交ダンスが文化の一部として強く根付いている。ヨーロッパ地域のダンスにはフォークダンス、コサックダンス、アイリッシュ・ダンス、マズルカ、ポルカ、フラメンコ、ワルツ、タンゴ、バレエなどがあるが、概して足の動きが特徴的である。アフリカ地域では、アフリカ太鼓（ジャンベ・ジェンベ）の音に合わせて体全体を使って踊るアフリカの伝統的な舞踊がある。そのダンスはエネルギーに溢れ力強く、リズムを基にしたダンスであり、結婚式や成人の祝い、豊作の祝いなど様々な儀式的時に踊られていた。

このように少しあげただけでも多くの舞踊が存在し、自分自身でおどることによってダンスから学ぶその国の歴史的背景などを身を持って感じることができると思ったので、今回このテーマで映像を制作しようと思った。

藤木駿、岩田駿一、岡田胡桃、岡田麻里、茂原大地、林光吉、猪野広樹、小佐野夏実、北村英士（山根ゼミ）

●発表タイトル

鏡の罪

グリム童話の「白雪姫」を原作としたこの作品は、原作とは全く違ったアプローチで制作を行った。激しい独占欲を中心に取り上げ、その独占欲を向ける加害者側と向けられる被害者側を描き、最終的に身勝手な行動は自分に返ってきて、悪因悪果することになるというストーリーとし、原作と教訓が近くなるようにした。

表現においても、あえて非現実的な表現を用いることにより、視聴者側へのメッセージ性を強調し、原作の面影は全く無い物の、それと似たような後味の悪さや、独特の世界観に対する関心を促している。

谷口達彦、林光吉、赤穂愛、猪野広樹、小佐野夏実、北村英士、早瀬萌（山根ゼミ）

●発表タイトル

わすれもの

オリジナルでストーリーをゼミ生が徹底的に討論し意見を出し合って起草し、脚本を書き上げ、演出・撮影・編集を行った。

ストーリー概要としては、SFとヒューマンドラマを基軸としている。

人間同士の“つながり”の不思議さを、人体化された宇宙探査機という視点から見つめることで表現し、観終わった後に人間はなぜ人間と関わり合って生きて

いくのかを考えさせることを狙いとしている。

(ストーリー)

MUSES シリーズ・第三工学実験機ハヤブサは2003年の打ち上げから、約7年の歳月を経て、奇跡的に日本に帰還した。なぜ奇跡的かというと、途中で故障、本部との通信断絶、制御が途中で上手くいかなくなる、他いくつもの困難を越え無事イトカワからサンプルを持ち帰ってきた。

この作品は、ハヤブサが打ち上げられる前に、何か戻ってくるための何かハヤブサ自身に起きたのではないのか。そう考え、この作品を制作するにあたった。

舞台は2002年の秋、ハヤブサは、自分自身が科学者以外の人間を知るために、「人体化実験」および「人間との接触実験」を行う。そこである三人に出会う。初めは人間に対する不信感があったが、写真を撮る男「リク」と出会い、そしてその仲間たちと触れ合い、ハヤブサ自身のなかで何か変化が起こる。

和田望、森井みなみ、斉藤光、向田愛佳子、中島望、加藤侑里、工藤綾子、光山佳絵、吉田達也、林利奈（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

集団自決～歴史から学ぶこと～

制作の目的と方法

この映像作品は、1945年3月28日に渡嘉敷島で起きた「集団自決」¹を題材にした、ドキュメンタリーである。

今年度前期、私たちのゼミでは、琉球・沖縄から見た日本をテーマに、17世紀以降の日琉関係史について学んだ。そのなかで、太平洋戦争の末期、渡嘉敷島で起こった「集団自決」と、それへの軍の関与をめぐる論争について学ぶ機会を得た。

渡嘉敷島の「集団自決」とは、戦時下の宣伝と教育によって捕虜になることへの恐怖を植えつけられた島の人々が、米軍の上陸によって「鬼畜米英の前で生き残ることが恐怖の対象となって」「米軍による残酷な死に方をさせるより、自らの手で身内の命を絶つことがせめてもの慰み」²と、軍から支給された手榴弾で集団自殺したり、棒きれや鎌、ナイフ、石などで家族が家族に手をかけて死なせた事件である。

この事件を資料を通じて間接的に学ぶだけでなく、事件のあった現場を訪ね、生存者の方々から直接お話を聞こうと考え、今年9月、ゼミ生全員で渡嘉敷島を訪ねることにした。本映像作品は、そこでの取材をもとに制作したものである。

作品の概要

渡嘉敷島の「集団自決」では、島の人口の三分の一に当たる329人が亡くなった。

家族や友人の死を目の当たりにした人々は、戦後は固く口を閉ざし、この事件について語るのを避けていた。そうした中、文部科学省が2007年の高校歴史教科書検定の中で、「集団自決」への軍の強制に関する記述を、「沖縄戦の実態について、誤解する恐れのある表現」として削除させたことが明らかになった。これに衝撃を受けた人々は、長い沈黙を破り、「もう黙ってはおられない」と自らの体験を語り始めたのである。

今回、私たちの取材に応じてくださったのは、吉川嘉勝さんと米田光子さんである。「集団自決」の現場から逃げる途中、米軍の砲撃で父親を失った吉川さん。手榴弾で父と兄ら家族5人を失った米田さん。お二人の証言には、二度と同じ過ちは繰り返させまいという強い決意があった。いまの日本には戦前と同じような空気が流れているという。だからこそ、事実を事実のまま後世に伝えたい。いま話さなければ「集団自決」の記憶が風化してしまう。そんな危機感があった。

取材の最後に元教師の吉川さんは、国際文化学部に通う私たちへ一つのメッセージを送ってくれた。そこには、本学部に通う私たちへの期待と責任が示唆されており、ぜひ多くの学友に見ていただきたい内容となっている。

- 1 渡嘉敷島での「集団自決」の生存者の一人・金城重明氏の沖縄「集団自決」裁判での証言（岩波書店編『記録 沖縄「集団自決」裁判』岩波書店、2012年、p.308）
- 2 渡嘉敷島での「集団自決」の生存者の一人・金城重明氏の沖縄「集団自決」裁判での証言（岩波書店編『記録 沖縄「集団自決」裁判』岩波書店、2012年、p.308）

王城星海、森田直紀、大場将也、小澤有輝、吉野拓磨、石川真衣、村瀬友希、鈴木花奈、菱木麻佐美（鈴木晶ゼミ）

●発表タイトル

友罪

私たち人間は87%の情報を目から知覚しています。目から得た情報から感動して泣いたり、おもしろくて笑ったり、時には怖くて恐怖を感じたり様々な感情の変化をもたらします。また、耳から得る7%の情報と合わさる事によってその効果がより一層高まります。これを踏まえ、映像とは発信者にとって最も簡易かつ効率的に心に残る情報やメッセージを受け手に伝達できる手段である事がわかります。インターネットが普及した今の世の中では、多種多様な映像が国境を越え、世界中の人々が世界各国の情報を共有し、そこから日々影響を受けています。映像というものは私たちの生活の中にありふれている物であり、何かを知る、何かを感じる上で貴重な存在であることは紛れもない事実です。

私たちは限られた時間の中で、その映像という媒体を通して見た人に驚きやイ

ンパクトを与える物を作れないかと思い、サスペンスホラーという内容の映像作品を制作しました。ストーリーや作中に出てくる台詞は全て私たちが考えたオリジナルのものであるのが特徴であり、全てオリジナルにする事で制作に携わった私たち全員の表現力を測る事ができると思ったからです。

以下は本作品の主なストーリーと説明です。

【主なストーリー】

高校時代に仲の良かった裕紀、健志、麻佐美、加奈の男女4人組がいた。彼らは大学に進学し、それぞれの生活を東京という大都会で送る。

大学2年生の夏休みの終わりに4人は久しぶりにみんなで遊ぼうということ、で、地元の熱海で会う約束をする。久々の再会に胸を踊らせる4人は高校時代のときにみんなでよく遊んでいた海岸へ向かう。海を眺めながら思い出話をしていると、ある男の子の話になる。それは昔みんながいじめていた野呂という男の子の事である。笑い話のように話す彼らだったが、そのいじめとはとても酷いものであった。そして話しに夢中になっていると、4人の携帯に不可解なメールが一斉に届く。

「おかえり」

そう一言だけ書かれたメールの送り主は不明であった。

丁度4人が昔いじめていた野呂の話しをしていたせいか、一瞬そのいじめられっ子によるものではないかと疑う。しかし、そのいじめられっ子は高校を卒業し、突然行方がわからなくなったという噂が以前から広まっていた。こんなメール、ただのいたずらだろうと思い、その後メールに関しては特に気にすることはなかった。

帰りの駅でまた東京で会う事を約束し、別れを告げる4人。

夏休みも終わり、それぞれの生活に戻る彼らはこれから起こる悪夢など知るよしもなかった。

そしてある日、不気味な黒いローブに白いマスクを被った人が現れ、彼らを次々と襲う。果たして犯人が彼らを襲う目的とは一体何か。そしてマスクの下にいるのは一体誰なのか。そこには誰も予想できなかった衝撃的なラストが待っていた。

サスペンスホラーということで脚本制作の段階から見の人を驚かせるにはどのようなストーリー構成にするべきか何度も考え直しました。誰が犯人なのか予想しながら見るのも一つの楽しみ方かもしれません。

作中で何度か人が殺されるシーンがあります。このようなシーンの撮影は全員が初めての試みということもあって、今回の制作の中でも一番難しいシーンであったのと同時に一番こだわったシーンでもあります。死という瞬間が迫る恐怖をBGMや効果音を上手く使い、編集でも様々な工夫をこらして表現しま

した。

富岡恵（島田ゼミ）

●発表タイトル

鎌倉版、ニッチを探して

日本には多くの名所、観光地がある。日本全体はもちろん、関東だけでも魅力的な場所はたくさんあるが、その中でも、都内からのアクセスも良く、都会の喧騒を離れ風情を味わえる場所といたら鎌倉であろう。私は、生まれてから二十年間ずっと鎌倉に住んでいる。幼い頃は、「田舎すぎる。もっと都会に住みたい。」と思うことが幾度となくあった。しかし、大人になるにつれ、海や山などの自然や、多くの歴史に触れることができる環境を、ありがたいと思うようになった。またそれと同時に、「もっと鎌倉の良さを知ってほしい。」という気持ちも増していった。そこで今回この学会で、鎌倉でのニッチ（納まるべき居場所、適所）を自分なりにさがして、紹介したいと考え、このテーマにたどり着いた。

「鎌倉」と聞いてまず思いつくことと言えば、「大仏」や「鶴岡八幡宮」、「幕府」など、あげていたらキリがないほど、いろいろな歴史を感じられる場所や、多くの自然、また、絶景がある。そこで今回の研究では、鎌倉の名物のひとつでもあるローカル電車「江ノ島電鉄線」、通称「江ノ電」の各駅ひとつひとつ、それぞれニッチを探していき、それをまとめた映像を作成し、発表しようと考えた。江ノ電は、1902年に開業した、鎌倉から藤沢間（鎌倉、和田塚、由比ガ浜、長谷、極楽寺、稲村ヶ崎、七里ガ浜、鎌倉高校前、腰越、江ノ島、湘南海岸公園、鶴沼、柳小路、石上、藤沢）を走行するローカル線であり、速度も非常に遅く、途中住宅地の中を通ったり、歩行者や車と同じ道を通ったりするほどの、ローカル具合が魅力である。「鎌倉版、ニッチをさがして」ということで、今回は、鎌倉市内である鎌倉、和田塚、由比ガ浜、長谷、極楽寺、稲村ヶ崎、七里ガ浜、鎌倉高校前、腰越の各駅にスポットをあて、研究を進めた。

鎌倉には、観光客なら誰もが行くであろう「鶴岡八幡宮」や「小町通り」、「荏柄天神社」「源頼朝の墓」などの非常に有名な観光名所が数多くある。また、秋ならではの紅葉が綺麗に見える絶景スポットや、ハイキングコースも多く存在する。そのような有名な観光名所のほかにも、普段地元民しか通らない道にあるニッチや、ガイドブックには載っていないような、鎌倉の魅力的な小路などがたくさんある。由比ガ浜には、海はもちろんのこと、由比ガ浜海岸に行く途中にある小さな小物屋や洋服屋なども多くあり、それらも魅力のひとつである。長谷は、鎌倉の象徴ともいえる「大仏」があり、外国人観光客の姿も多く見受けられる。七里ガ浜から、鎌倉高校前、腰越間は、江ノ電が海沿いを走行するので、車内から海

が見られることも有名である。

このように各駅それぞれ、有名な、観光客が多く集まるような名所がたくさんある裏で、ガイドブックには載っていないけれど、落ち着くような適所や居場所が必ず存在する。鎌倉にずっと住んでいる人間だからこそ、知っている良さなども、また多く存在すると思う。今回のこの研究を通じて、少しでも多くの人に、鎌倉のニッチを知ってもらい、また興味をもってもらえることができれば、と思う。

早瀬萌、谷口達彦、小金井貴文、近藤信太、中野愛夏、大西幸美（山根セミ）

●発表タイトル

猫吉親方～またの名を下駄を履いた猫～

グリム童話、長靴を履いた猫の和訳版を再現。撮影はたくさんの自然と日本風な建物のある環境の中で行うと同時に、作中では美しい日本語を使い日本文化のすばらしさを改めて実感できるような作品を目指した。

人は例え今が悪条件であろうとも将来必ずしも不幸になるとは限らない。どんなに厳しい環境下にあっても工夫次第では与えられた条件で成功することができるということを作中の猫がさまざまな悪知恵を働かせ主人を成功者へ導く様子を交えて描写する。

あらすじ

貧しいざる屋の三男坊が遺産にもらったのはたったの猫一匹。すっかりしょげかえり食べてしまおうかと考えた矢先、猫がいうには「釣り竿をひとつ、下駄を一足こしらえてください、主人をきっと幸せにします。」とうとう猫はことば通り貧しい主人を成功者へ仕立て上げた。

池田浩大、菊池岳、依田直大、佐藤薫（島田セミ）

●発表タイトル

「ある男の不思議な恋物語」

石が大好きな現役大学生、康弘。マイナーな趣味を引け目に感じ、誰にも打ち明けることができずに日々一人ぼっちに石を拾い続け、愛を注いできた。しかし、大学3年生になったある日、康弘は千春と運命の出会いを果たす。今まで誰にも話せずしていた「石拾い」という趣味に千春は興味を示した。康弘は「石拾い」に興味を持ってくれるなんて変な女の子だなと思いつつも、二人の仲は急速に深まっていったのだが…

冴えない大学生「康弘」と不思議な女の子「千春」が織り成す青春・ラブ・ミステリアス・ストーリー
「ある男の子の不思議な恋物語」

東井勇樹（島田ゼミ）

●発表タイトル

映像ドキュメンタリー「東京のクラブシーン、発展か衰退か」

東京のクラブシーンは現在、栄えているのか、または衰退しているのか、まったくはっきりしない状況です。クラブという所に行ったことがない人からすればクラブのイメージは悪い方です。ニュースでは風営法違反で経営者が捕まったという内容からクラブでの暴行事件など。私自身も絶対にあってはならないと思いますが、現在もそれはなくなっただけではありません。しかし日本の本当のクラブ文化ではないと感じています。DJ 機材、DJ の技術は世界に誇れるものがあり、音楽が好きで集まるクラブには暖かい輪、人情もあります。この混沌としている東京のクラブシーンを撮影、インタビューを通して、現在のクラブシーンの実態を日本の一つの“文化”として正しく捉えたいと思います。インタビューは現在活躍しているベテランDJ から若手DJ まで広くインタビューをとりました。

私個人は一DJ として下からクラブシーンをしばらく見てきて、日本のすばらしい技術、シーンをいろいろな観点から見つめること、またそれを世間に伝えることを目的としています。また風営法などの政府の見解を考へてみたり、クラブを運営している、関係者の方々の見解から、外部からの客観的なイメージなどを交えつつ、インタビューから結論を見いだしたい所です。

今回のテーマ「東京のクラブシーン」において重要な点がいくつかあります。まず一つは日本人の音楽的センスです。日本では数多くオーディオを取り扱う会社があり、その中で音響機器、DJ 機材は非常に使いやすく、優秀で日本以外にほとんど競争相手がいないのも現状です。また、日本プロデューサーやアーティストの楽曲レベルは高い技術をもち、海外でも認められているたくさんのアーティストがいます。

二つ目は日本のポピュラー音楽シーンです。現在アイドルやダンスユニットが歌う楽曲は昔日本の音楽シーンをにぎわせた“トランスミュージック”をベースにした楽曲がほとんどです。これはどちらかというとマイナスイメージに感じられますが、現在世界で主流の音楽ジャンルは日本の主流のジャンルとはかけ離れていて、どちらかというとK-POP が一番近いと感じました。

三つ目は風営法の問題です。現在その昔の日本をにぎわせたトランスが流行っ

た時、クラブ文化は盛んで、そのときに男女の交流文化としてとてもにぎわいました。その時にできた法律は今も残っています。現在のクラブは男女の交流の場というよりかは飲み物を飲んで、音楽をきいて帰るという映画館のような場所になっています。クラブ内の装飾がゴージャスな装飾から、宇宙を思わせるような異空間のような装飾がメインになりました。昔とは異なる文化になり、法律の改正も必要と皆訴えかける中、客足は徐々に少なくなっていき、クラブ文化は一般の人々に受け入れられるものではなくなっていきました。

いろんな問題もあり、日本の良いところがある中、現在クラブで活躍されているいろいろなDJさんにインタビューし、現在のシーンの問題とこれからの日本の音楽シーンはどうなるかをみている方々解き明かしていけるドキュメンタリーになっていると思います。

撮影は許可を受けたクラブでの撮影を行い、良い撮影ができたと思います。現場の方々の本当の声とシーンの解説をしていただき、東京の音楽シーンの状況を解き明かしていきます。私の考えではクラブ自身は悪いところとは全く思いません。風評、イメージも有ると思います。それを払拭できるようになればと考えます。

赤穂愛、谷口達彦、早瀬萌（山根ゼミ）

●発表タイトル

ミュージックビデオ『Satellite - みなとまち』『ありがとうごじゃいます - DOZ』『Alcohol - CSS (LEGO ver.)』

各々で各国の楽曲を選び、それぞれの楽曲を聴いて感じ取ったことを、それぞれストーリーや演出を考えた上で、キャストやLEGOなどの玩具による小道具、また、自分自身の身体表現を用い撮影・編集し、制作した。

1. 『Satellite - みなとまち』は、日本のバンドの「みなとまち」の代表曲“Satellite”を題材に制作した。曲名やこの曲の歌詞から連想し、ストーリーの中に海王星の衛星の中で最も大きく、そして最も近くを公転する衛星トリトンの海王星墜落説を絡め、誰もが青春時代に通ったであろう淡く儚く切ない恋愛模様のドラマによって「Satellite」という楽曲の世界観を独自の視点から描いている。（赤穂の作品）
2. 『ありがとうごじゃいます - DOZ』は、韓国のアーティストDOZによる日本語の歌詞で歌われた楽曲を題材に制作した。歌詞が単調であるため、自身のリズムカルな身体表現や、計算されたカメラアングル・編集によってユーモアを醸し出しており、見ている人を退屈させない工夫をしてある。（谷口の作品）

3. 『Alcohol - CSS (LEGO ver.)』は、ブラジルのエレクトロ・ディスコ・パンク・バンドのCSSによる英語で歌われた楽曲を題材に制作した。「Alcohol」という曲名や歌詞からオリジナルでストーリーを連想し、脚本を書き上げ、ポップな曲調と曲名のイメージに近づけるよう工夫しながらLEGOや小物を用いて細かな動きを一つ一つコマ撮りし、子供から大人まで楽しめるような動画に仕立てて制作した。

インスタレーション部門

仁科瀛、河村愛、小林久美子、櫻井夏紀、白石恵梨、長谷川愛、樋口貴裕、古田佳奈子、山口夏林、平賀愛、西幸乃、岩戸信之介、大隅倅代、窪田寛大、奈良宏美、松原早紀、原萌香、山田泉絵、平山岐映、毛利優萌、蜂屋悠子、若田久枝、森紗紀子（熊田セミ）

●発表タイトル

青い球体

あなたはなぜ母親をお母さんだと思うのでしょうか？母親のお腹から自分が産まれてきたところを見たこともないのに、小さいころから目の前にいる女性を母親だと信じてやまないのです。人は生きていく上で、様々な“当たり前”を刷り込まれています。そしてたいていは刷り込まれていることに気付きさえしません。私たちはその様々な“当たり前”の中でも、「国」「文化」ということに焦点を当てました。私たちのインスタレーションは三つの要素＝解体・分析・創造から成り立っています。私たちのインスタレーションに参加し、私たちと一緒に、ありとあらゆる当たり前をまずは壊してみよう、そして疑ってみよう、最後に創ってみよう。

1 Candy Flag

まず解体セクションとして、飴を使って表現した国旗を展示します。国旗は私たちが国という枠組みを最も認識し易いものです。今では、国民国家の役割が限界を迎えています。私たちは依然その国家の国民であるということにとらわれがちです。国民国家という単位がもろいものであり、かつての意味を失いつつあることを、この作品で実感しましょう。国旗を身近に引き寄せて感じることができるよう、飴を並べて作った国旗を展示し、その国旗の飴は参加者が手で外して自由に食べることができ、徐々に国旗は形を失い、無になりますが、その過程のすべてが作品です。各々が好きに飴を取るという行動が、Nation-state崩壊のプロセスを発動させます。このような巨大な権威も、人間ひとりひとりの行動によ

て動かすことができます。複合的国際社会・多文化共生の時代である今、私たちみんなが「国民国家」の解体に参加していくことを体感することができる、それがこの作品です。

2 Entre l'ideal et la realite~ 理想と現実の中で

次に分析セクションとして、隔たりのない透明な1枚のビニールシートに自由に絵を描いてもらいます。ビニールシート上で両面から個々人が抱く理想と現実を描くと、どのような世界が出来上がるのでしょうか。透明なビニールシートを使用することで、自身が描いた絵が前に見え、また他の人が現実を思っただけで描いたのか、理想を思っただけで描いたのかわからない絵が目の前に広がっていきます。出来上がった表裏一体の絵の中には、想像不可能な新世界が生まれるのではなく、個々人が心の中でどこか共感できる絵や、はたまた違和感を覚える絵が出来上がるでしょう。多文化共生社会の中で、私たちがそうした違いを持って生きているということを表面化させ、再認識したうえで、そのずれをどう受け入れていくべきか、どう向き合っていくべきかを参加者が考える、そんなきっかけとなる作品です。

3 “そうぞう”の世界

最後に創造セクション。自然風景を描写した紙をベースに、様々な地域や国を連想させる写真や切り抜きを用意し、参加者に好きなように貼ってもらうことで、“そうぞう”の世界を生み出してもらいます。Nation-stateの崩壊と共に、異文化理解・多文化共生を基盤とした新しい枠組みが必要となります。そこで私たちはあらゆる人為的背景を払拭し原点に戻した地球=“青い球体”こそが、その新しい枠組みになりうるのではないかと考えました。そして、“青い球体”を探ってみるために、このセクションを提案します。写真や切り抜きを来場者が自分の手で貼っていくという動作は、自ら新しい世界をつくるという行為を、身をもって体感でき、可視化できることを意味します。皆さんの潜在的な世界観、その場の直感をもとに思い描く世界、これら全てを合わせて、新しい世界を想像かつ創造してもらいたいという思いを込めました。

変化しつつある社会の中で、私たちは様々な“当たり前”をただそのままにしていいのでしょうか。“当たり前”が刷り込まれた地球を原点に戻して、宇宙からそのまま見てみましょう。そこに見えるのが“青い球体”であり、丸い“青い球体”には終わりや始まりがなく、どこも中心であってかつどこも中心でない自由で平等な世界です。“青い球体”で生きている私たちは皆、ただの地球人です。自分とはいったい何者なのかを、三つのパートからなるこのインスタレーションを通して、もう一度考えてほしいと思います。

石井秀明、澤登達也、田中翠、鈴木結実、西田鈴夏、楯石洋子（森村ゼミ）

●発表タイトル

アニメ～現実に潜む幻想～

普段、私たちが意識していることは、こころのほんの一部分に過ぎません。人間の持つ意識は、いわば氷山の一角であり、そのより深い部分には、広い無意識の世界が広がっています。カール・グスタフ・ユングは、この無意識の世界にスポットを当てて、人間の深層心理を研究した心理学者の一人です。

無意識の世界には、忘れ去られてしまった過去の記憶や、意識によって抑圧されてしまった欲求、思い出したくないと無意識にしまわれてしまった感情（コンプレックス）などが潜んでいます。この無意識の層を、ユングは個人的な経験に基づいたものであることから、「個人的無意識」と名付けました。そして、そのさらに深い部分には、すべての人間が共有する無意識の層が存在するとユングは語っています。これを「普遍的無意識」といいます。ここは、個人の経験を越えた、人間が普遍的に持っている無意識の領域であるため、意識から追いやられた個人的な記憶や欲求などはありません。この普遍的無意識には「元型」と呼ばれる、人間が共通して持っている傾向性の型があります。この型の代表的なものが、人間の否定的で暗い面を指す「影」、男性の持つ女性性である「アニマ」、女性の持つ男性性である「アニムス」、物知りの「老賢者」などです。

このように言うと、無意識というものが、私たちの意識の手には届かない、少し遠い存在のものであるように感じられるかもしれません。しかし、私たちの日常生活の中にも、無意識の内容を知るきっかけが多くあります。その代表的なものが、寝ている間に見る夢です。例えば、夢の中で、嫌いだと思っていた人と自分が、手をつないで楽しそうに歩いたり、なぜだかわからないのに、突然歯が抜けてしまったり、普段は考えたこともないような事や、思ってもみなかった事を夢に見ることがあると思います。このような、普段の認識からはかけ離れた夢を見ることこそ、無意識の作用によるものであるからなのです。

無意識の世界には、私たちの認識をはるかに超えた世界が広がっています。無意識は、無意識であるがゆえに、思わぬところで私たちの意識に影響を及ぼし、時には、意識の手に負えないような行動を引き起こすこともあります。そこで、ユングは、自分の無意識を知ること、言い換えれば、無意識を意識化することこそが、人間のこころを知るためには、最も重要なことであると考えたのです。

ユングにとって、無意識は、意識を補ってくれるものであり、その点、人間のこころの成長の過程において、その手助けをしてくれる存在であるとも言えます。彼は自身の論文の中でも、意識と無意識は補い合う関係にあると書いており、意識と無意識のバランスを取り、両者を統合させることが、人間の本来持っている

本能的な欲求であるとしています。その意識と無意識の統合を「個性化」と呼び、皆がそれを目指すように広く伝えることが、ユング心理学の根底のメッセージでもあります。

このように、森村ゼミでは、ユングの文献を通して、「ユング心理学」についての理解を深めてきました。そこで、今年度の国際文化情報学会では、中でも「アニマの投影」をテーマに発表を行いたいと考えています。アニマとは、上述のように、無意識に存在する元型の一つで、男性の持つ女性性です。人は、意識の面において、男性は男性として、女性は女性として生きています。しかし、その反面、無意識ではそれを補い、バランスを取るために、それぞれ、男性は女性性である「アニマ」を、女性は男性性である「アニムス」を有しています。

男性は、そのアニマを現実の女性に投影してしまう事がありますが、これは、決して特殊な例ではなく、誰もが自分では気づかないうちに日常的に行っています。このような「アニマの投影」を、映像を用いたインスタレーションで表現することによって、見ている人が、自分自身の無意識について考えるきっかけとなるように発表を行います。

澤田彩香、橋田悟、池田佳穂、大内沙織、石毛卓馬、伊東いちこ、入倉優香、岩佐すみれ、小原卓人、川尻知佳、門脇智恵、竹野真央、永井美優、黛詩織、青木謙祐、石川理恵、柏川千秋、金秋りさ、北圃莉奈子、杉本理沙、羽生早織（稲垣・土谷ゼミ）

●発表タイトル

「いちめんのなのはな」

詩からのイメージを具現化し、その空間を体感してもらうというインスタレーション。体験してもらった際にその詩の何が見ることができたのか、この詩の本質を訴えは何かということを考えて欲しいと思い、空間という実際に体感できる作品にした。

詩のイメージを熟考する際に、詩が作られた背景やモチーフを深く調べ、そして今回は山村暮鳥の「風景」に着目した。この詩は非常に華やかさと作者・山村暮鳥の心の闇・負の部分の二面を持つ。一見華やかで春の雰囲気醸し出す詩に見えるが、熟読し考えることによりこの詩の暗い部分が見ることができる。この詩の二面性を我々の作品の中で見つけるためには、考えるという事を行う必要がある。考えることにより本質に辿り着くのだ。

この詩のインスタレーションを通して、物事の本質を見るという力を養ってもらいたいと考える。問題を解決する際に表面だけの事にとらわれて、問題の本質

が解決できずそのまま曖昧なままになっている事が現代の世の中で多いと感じる。私達国際文化学部生は日本だけでなく、世界にも通用する学生であり、この本質を見る力というものが世界で輝くための一つのものだ。この力は誰にでもあり、考えることを始めることにより磨かれる。今回の作品を通して、少しでも多くの人に考えることをしてもらおうきっかけになれば良いと考えている。

菅原麻里奈、脇奈々海、田中亜弥、石橋春菜、石松小百合、岩本みゆき、牛島春、小島彩（田澤ゼミ）

●発表タイトル

スペインの歩き方

当ゼミの所属生は、全員が2年次のSAプログラムでスペインに滞在していた学生である。SAプログラムの中で様々な経験をし、そこで感じた疑問をより学問的に追及したい、また同じスペイン語圏であるラテンアメリカの文化も知りたい等、スペイン語に関連する多種多様な興味を持った学生が集まって活動している。日頃の演習では、SAで培った語学力の維持向上を図るためにスペイン語での個人スピーチやディベートを行い、また各々で興味分野の研究を進め、発表することで互いに知識を深めている。

今年度の学会の発表作品は、旅行パンフレットとして親しまれているダイヤモンド社の『地球の歩き方』にちなみ、タイトルを「スペインの歩き方」とした。国際文化学部生として、日本近隣の観光都市やSAで行った国だけでなく、より広く世界の文化を知ってほしい。そう考えた際に、学部生の中で誰よりもスペインに詳しいと自負する私たちがこの学会で行うべきことは、よりわかりやすくスペインのことを紹介し、他のSA先の学生にも知ってもらうことだと考え、この作品を制作するに至った。

スペインの興味深いところは、地域ごとに特色が大きく異なることである。今回の発表では、4つの主要地域マドリッド州、カタルーニャ州、アンダルシア州、ガリシア州を紹介するが、そのどれもが独自の文化を持ち、同じ国なのにそれぞれ違った印象を受けるのが面白い。日本人のイメージするスペインと言えば、フラメンコ、闘牛、ガウディの建築物…といったところであろう。が、実際にスペインに足を運んでみると、フラメンコならアンダルシア地方、ガウディの建築ならカタルーニャ地方というように、スペインを特徴づける文化は、実は国の文化でなく地域の文化であったりする。

インスタレーションという形態で発表する目的は、教室をまるごとスペインの地形に見立て、実際にスペインを歩いている感覚で作品を堪能してもらいたいと

考えるからである。本物の地形通りに地域ごとの展示ブースを設置し、歩くたびに移り変わる地域の特色をご覧いただきたい。

作品の一番のポイントとなるのは、何より「ガイドブックに載っていない豆知識」である。単にスペインについて知りたい、そういうことならガイドブックを読めばいい。実際に足を運んでみたからこそわかる体験談を交え、『地球の歩き方』を見ても知ることでできないような知識を提供する。

当学部の目標にも掲げられている「国際社会人」として社会に出ていくために、私たちは選択したSA先に限らず、広く文化を知る必要がある。日本国内で学んでいる以上、それらに直接触れる機会は残念ながらあまりないが、私たちの日頃の研究の成果を作品として残し、共有することが、学部生の異文化理解への一助となれば幸いである。

米本千夏、松沼春佳、北村恭兵、倉島ひかり、下山恵莉奈、野地沙織、樋口睦晃、江部綾、清水美沙、千葉かんな、内藤秀宜、長尾梨帆、平塚咲希、平安山良志、保坂拓海（佐々木一恵ゼミ）

●発表タイトル

東京オリンピック（1964,2020）から見る日本社会の光と影

1964年、アジアで初のオリンピックが東京で開催された。このオリンピックを通じて、日本は目覚ましい戦後復興を遂げた姿を世界にアピールした。オリンピック開催に向けて、首都高速の建設、東海道新幹線の開通、そして羽田空港の整備などが相次ぎ、その結果人々の移動は増え、生活もより近代化した。しかし、一見華やかなオリンピック開催にも、東京の古い景観の喪失、建設のため立ち退きを余儀なくされる住民や、大金をつぎ込んだ競技場の閉鎖など、影の部分も存在していた。

この東京オリンピック開催から約半世紀後の今年、2020年の夏季オリンピック開催地が再び東京に決定した。開催地決定に至るまでの過程は多くのメディアが取り上げ、世界中の人々の関心を集めた。東京では街中にオリンピックのポスターが飾られ、盛り上がりを見せた。一説には、オリンピックがもたらす経済効果は150兆円とも言われている。しかし、1964年開催時と同様に、やはり、環境整備やイベントへの巨額の税金投資など、影の部分は存在し、開催地の人口増加、交通渋滞を懸念して、住民の中には開催を望まない人もいる。

本発表では、1964年に開催された東京オリンピックと、2020年に開催予定の東京オリンピックについて、マクロな視点とミクロな視点から分析し、その光と影について、映像を利用したインスタレーション形式で発表を行う。そこから、観

覽者に個人としてのまた社会としてのオリンピックとの関わりを聞きたいと考えている。

発表者氏名：池田隼人、久保谷雄真、斉藤 拓、高橋裕大、本多翔悟、梅野紗衣、大西優輝、小林稜、笹本康貴、鈴木智香、中川卓彌（興石ゼミ）

●発表タイトル

新しいSA先を探そう—新興国SA—

我々興石ゼミは、国際文化学部のSAに対して

- ・費用が高額（長期SA 9大学の平均費用：約124万円）
- ・生徒のSAに対する目的意識がバラバラ
- ・自分自身で授業カリキュラムを組む／選択することが出来ない
- ・SAが観光と同等化している

などの問題点を挙げ、そこから2つの問題意識を持った。

1つは、SA先が大国に偏りすぎているという点である。行き先の多くは先進国であり、SAの根本的意義は異文化体験であるにも関わらず、日本とさほど生活環境に変わりのない暮らしを満喫することが出来る。それゆえに、観光気分でSAに参加しほとんど何も得ずに帰ってくる学生が少なくないという事態を招いているのではないだろうか考える。

もう1つは、多くのSA先において語学偏重のプログラムが組まれているという点である。これでは言語「を」学ぶだけで終わってしまい、言語「で」何かを学ぶところには行き着かない。語学はツールであり、それを学ぶだけでは異文化理解はままならないのではないだろうか。やはり海外に行って半年近くそこに住むならば、その地でしか学べないことを何かしら得て帰るべきではないか。

そこで、我々はこのSAに新しい価値を付け加えるべく、2本の柱を用意した。それは、「新興国」と「語学+a」である。そして、この2つを達成するために、フィリピンとインドの2か国を提案することとした。この2つの国をSA先にすれば、日本における暮らしとは大きくかけ離れた「非日常的」な世界に身を置くことが出来、そこで真の異文化体験を行うことが出来る。また、費用も安く済む（いずれのSA先も約4か月の滞在で100万円以内に収まる）ため、SA参加に対する経済的な負担を軽減することも出来るのである。

フィリピンの「語学+a」はインターンシップである。英語の授業はマンツーマンであり、そこで培った十分なコミュニケーション能力を用いてビジネスの世界に飛び込むことで、新興国で働く経験を積むことが出来る。また、インドのそれはITであり、昨今成長著しい「東のシリコンバレー」と呼ばれる地で、英語を

用いて先に行くインドの IT を学べる可能性を有する。

この2か国の新興国 SA について、2グループに分かれてプレゼンテーションにより提案を行う。プレゼンテーション終了後、オーディエンスによりどちらの SA 先により興味が沸いたかをジャッジしてもらうことで、勝敗を決する。また、当日配布するレジユメは SA パンフレットを模したものとし、新しい SA 先をより現実的に訴求していく。

この発表を通して、我々興石ゼミは学部に対し新しい SA の形を提案していきたいと考える。また、それにより今後 SA に行く後輩たちに対し選択肢を増やすことが出来るのを切に願う。
